
戦極姫～幾内の智将物語～

猫ヶ洞 一休

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦極姫〜幾内の智将物語〜

【Nコード】

N6206N

【作者名】

猫ヶ洞 一休

【あらすじ】

応仁の乱が起こって以来、將軍家の権威は薄れ、日ノ本国は戦乱の時代に突入する。それは、弱肉強食の時代である。隣国への侵攻で領国を増やす者、主君を殺し大名と成り上がる者、荒れてゆく日ノ本を見つめ天下統一を目指す者、様々な人々の思惑が飛び交う。そんな中、幾内の新米軍師天城颯馬は主君に仕えて何を思い、どう行動するのか。

序幕

空は曇天で暗く今にも雨が降りそうな最中、摂津国の江口城を包囲するように、兵は構えていた。

待機している兵達の表情は無骨で固く皆、気を引き締めている事からして戦が始まるうとしているのが分かる。

いや、すでに開戦してはいるのだが、この場所に陣を構えてからもうすでに十二日経っている。

なのに主君から一向に出撃命令が出ない。兵達は、いつ出るか分からない命令を唯、その為だけに待っていた。

「長慶様、このままでは援軍が来てしまいます。出陣命令を……」
「……分かつてる、天城」

そんな中、天城という男が主君とみられる女性に静かに陳言した。そよ風に揺れている黒い長髪をした彼女、三好長慶はそれに対してを淀みなく淡々と返答するだけだった。

「ここで政長を倒す事が出来れば先代の無念を晴らすことが出来るのですぞ」

「……無論、その為に長い歳月を掛けた。父を謀殺した政長を見逃す事は決して無い」

そう言い切った長慶の瞳には明確な信念が宿っていた。言うならば静かなる怒り——そう、絶える事の無い炎が揺らぎなく燃えて

いるようである。

彼女がそれほど目の仇にする相手の名は同族の三好政長。長慶の父を謀殺した張本人だ。

彼女の父である元長は三好家の総帥であり、戦にも強い優れた将であつたがこれを快く思わない人物がいた。三好家の長老という地位にいた政長である。

政長は自分が出世するためには優秀な元長が目障りで仕方がなかった。

故に自分の株を地道に上げて元長が孤立するようあれやこれやと策を用い、最終的には主君である細川晴元に『元長が謀反を謀っているようだ』と、陳言し一向宗の力を使って死に追いやつたのだ。

その元長の子である長慶はまだ幼少であつた事が幸いしてか、殺される事は見逃された。

長慶は憎悪を抱きながら、晴元の忠義の重臣として戦を次々と看破していき、武将として力を付けていく事となる。

長慶もまた優れた将であつた。彼女の血は名将の祖父の血が濃いらしく、父を遥かに超えていた。そんな彼女も父と同じく総帥の座に着いたが、更なる上を目指そうとした頃にあの政長が立ち塞がっていた。

長慶は一族の統制を乱すと、言う表向きの理由で晴元に討伐の陳言をしたが、晴元は政長を頑なに庇う。

この主君の態度に憤怒した長慶は主君を見限り、細川氏綱側に寝返つて晴元と戦を始めたのだ。

氏綱側に寝返ってから約一年、長慶は幾内領国をほとんど手に入れ、後はここ江口で勝利すれば強固な地位を手にする事が出来るのだ。

「ならば、今すぐに出撃すべきでしょう？」

「政長の降伏を待つ。城は出来るだけ無傷で手に入れたい」

長慶の城を無傷で手に入れたいというのは正論である。

ほぼ無傷で手に入れれば、城を補修するお金を掛けなくて済むからである。その為に、政長が現在籠城している江口城の周りを完全包囲している。

完全包囲する事によって、政長の城には味方からの支援物質は運び込む事は、天地がひっくり返しても不可能だ。

支援物質は戦をする上でどれも重要な物だが、その中で特に不足していると困るのが兵糧である。

理由は言わずとも分かるだろう。

人という生物は、どれほどの強力な肉体を持っていたても、腹が減ると本来の力を十分に発揮出来ない。

また、腹が減っては戦は出来ぬという言葉が、出来ている事から兵糧の重要性が極めて高い事が窺える。

完全包囲されて、支援物質が入って来ない政長軍の兵糧はもうすでに十日前に底をついており、兵の士気はだだ下がり、軍はもうすでに烏合の衆と化している。

であるからにして、天城は政長をさっさと討ってしまおうと、長慶に何度も陳言しているが、ずっと却下されて少しばかりイライラしていた。

「ですが――」

今度こそは……と、思いながら諦めずに説得しようとするが、

「下がれ、天城。何度言われてもまだ出撃命令は出さない」

「……はっ、申し訳ございません。」

主君に表情も声色も変えずに一喝された天城は即座に謝った。

主君に下がれと言われて、不服ながらも従うしかない天城が下がるうとした時であった。

「ち、長慶様、六角が……六角が……」

伝令兵が肩で息をしながら、慌ただしくやって来たのを確認した天城は即座に聞き返す。

「六角が動き始めたのか？」

「は、はい、確かにそのように報告を受けました」

伝令兵によれば、ここから半日かかる山崎に到着した六角の近江軍、一万の大軍がこちらに行軍しているとの事。

三好の現在の総戦力は三千。矛を一度交わせば砂の楼閣の如く崩れ落ちるのは目に見える。

「天城、兵を整えよ」

「ははっ、了承しました！」

ならば、六角よりも早く、支援する理由を潰せばいい話だ。
立て籠っている政長の城を落とせば、六角が居もしない政長を支援する理由が無いため、潔く兵を引き返すだろう。

「十河殿に城攻めを、安宅殿には政長が逃亡しないよう警戒をするよう伝達せよ」

「了解しました」

二人の伝令兵は天城の命を拝して、すぐさま馬で駆け出した。
そして、天城は次に兵達が待機している場所に移動する。

「皆の者！ 今から江口城の城攻めに掛かる！ 直ちに整列せよ！」

軍中に天城の張り上げた声が響き渡り、兵達は慌ただしく準備を始めて、十分程で整列した。

物見兵の一人が何かに気づいたらしく、天城に報告しに来る。

「天城殿、十河殿の兵はもう既に城攻めを開始しております！！」
「わかった。こちらもすぐに向かうぞ。では長慶様ご命令を」

西で布陣していた十河一存は六角の兵が動いたと知るなり、すぐ

に侵攻を開始したのだ。

物見兵から報告を受けて、整列した兵の前に立つ長慶に目を送った。

「皆の衆、出陣だ！ 政長の首を討て」

長慶の命令に兵達は長槍を大きく掲げ、空气中を震わす程の掛け声を上げて、江口城を目指し、行軍する。

江口城内の評議の間にて政長は兵糧攻めによって、肉体的にも精神的にも充分に追い詰められていた。

「殿！ 長慶の兵が東と西から押し寄せています！」

「わかっておるわ！ くそっ！ あんの小娘め……忌々しい……」

政長は長慶に対して呪詛を吐くように呟く。

「そもそも……だ。何故、あの天城までが小娘の方に着く？！」

「そ、^{それがし}某に言われましても……」

「くそッ、氣にくわん……」

政長は怒りを隠そうともせず、膝を小刻みに揺すっている。
天城は細川晴元の家臣であったが、元長と友好関係を築いていた
のは、政長は知っていた。

元長討伐時には何も行動を起こさず、晴元の命令に従っていたか
ら無害だと思い放って置いた。だが、違った。

無害では無かった。彼は長慶に同調して離反したのだ。

おそらく、盟友の弔い合戦である、この時を誰よりもずっと待っ
ていただろう。

「奴らを迎撃しておれ。ワシは機を見て脱出する。よいな？」

「ははっ！ 承りました！！」

政長は十日間もろくな物を食わず、倦怠感が感じる体を叩くが如
く、気合いを入れて逃亡する準備を整える。

西を見ると十河の兵と既に交戦している。政長はただ見つめる。
自分の兵が虫のように蹴散らされていく光景が広がっていく。

自分の兵が、徹底交戦をしているのにも関わらず、先頭にいる男
は次々と赤い花を咲かせながら突き進んでくる。

立ち塞がる者を切り伏せ、弓矢を受けても怯まず、気迫で兵を圧
倒し、一騎当千の力を発揮している。

その姿はまさしく『鬼』の一字にふさわしく、『鬼十河』と言
う渾名は伊達ではない。
あだな

「東から川を沿って行った方が良さそうじゃな」

政長はそう判断し、部下に作戦命令を下した。

東からも迫り来る長慶の兵に自分の兵を突撃させ、その後方で自分はいきなりと、居城の榎木城へ避難するといふものだ。

「全軍進めえ！」

指揮官の命令によって、五百余りの兵が彼方から進軍して来る、長慶の兵に向かう。

そして、政長と護衛の五人は榎木城を目指して、人知れず淀川沿いに移動する。

主君は逃げ、兵は死が待っている負け戦に立ち向かう。

たとえ負け戦になろうとも主君へ忠義を貫き、戦って華々しく戦場で散る事が武士の誉れであり、在り方なのだ。

そんな典型的な武士達が命の蝋燭を激しく燃やしながらか長槍で長慶の兵に掛かる。

「恐れるな、敵は既に死に体だ連携して掛かれ！」

長慶の指示を出された兵達は政長の一人の兵に対して、三人掛かりで応戦していく。

長慶の兵は千、その大半は百姓であるため、命を惜しむ者がいる。

命が惜しい農兵は長慶の命令を疑問を持つ事なく実行していった。死にたくない一心で、敵兵を長槍で数人で刺し、鮮血を走らせる。一人殺したら、次の一人といった具合に慎重に攻めて行く。

激戦を繰り広げている最中、暗雲が広がっていた空から雨が降ってくる。

始めは弱々しく、徐々に強まっていき、視界が悪くなる。

彼らは降り注ぐ雨をその身に受けながらも、長槍を必死に奮い政長の兵を江口城まで押し返す。

東と西から長慶と十河の兵が隊列を崩さず、城内に侵攻する。

「出てこい！ 政長のジジイ、この鬼十河が貴様の首をとってくれる！！」

十河一存は終始変わらぬ、怒号で敵兵を切り伏せながら城内に入っていく。

しかし、見つからない。どれほど探しても政長の影は見えず、末端の兵が掛かってくるだけだ。

「一存」

「む、姉上か」

背後から自分の姉の声が耳に入り、周囲を警戒しながら、姉の方

へ顔を向けた。

長慶は刀を片手に持って、平穏な顔つきで立っていた。

「城内はほぼ制圧した。後は残党だけだ」

「政長のジジイはどこへ？」

「逃亡している」

長慶はさらりと言う。一存は逃亡したと聞き、焦り始めた。

この戦で政長を討ち取れなければ、敵方は六角の援軍と合流することとなる。

「なら、早く兵に搜索させねば！」

「大丈夫。天城が既に予測して動いている」

「なるほど天城殿が……」

一存は安堵の息をついた。彼なら必ずやってくれるだろう。なんせ、今は三好家を支える筆頭軍師だからだ。

淀川の水は降り注ぐ雨によって、増水し流れが速くなっている。この川に足を踏み込めば、一気に流され溺死する可能性があるであろう川沿いで、政長は目前の天城と対峙している。

「天城イ……」

「どうも、ご無沙汰しております。政長殿」

天城の足元には政長の部下が血溜まりを作って倒れており、周りには政長らを取り囲むように十人の兵が刀を構えている。

その十人の兵から政長を守るように護衛の四人が警戒する。

「我らを裏切った男がよくも顔を見せられた者だな」

「裏切り……？ いえいえ、違います。元長の討伐が下された日から、あなた方を信用していませんから、裏切ってはいないですね。とまあ、話はこれくらいにしておいて、投降して下さい。あなたとて武士だ。ここで死に果てるよりは自刃する方がよいでしょう？」

不気味なほど丁寧な口調を話す天城を政長は睨み付ける。

この殺伐した空気のなかでも、政長は怖じ気無い。

「投降？ 臆病者のくせに偉そうな口を利くな？」

「そうですか……ならば仕方がないですね」

天城が一歩足を踏み出すと両者の兵は身構え、手を掲げて「殺れ」と口を開こうとする。

その時に政長の表情が崩れ、ニヤリと謀を企む悪党のような笑みを見せた。

「ふっ……後方でガタガタ怯えている者がでしゃばると痛い目に合うぞ？」

「天城殿ッ！！」

兵がいきなり叫ぶので何かと思った天城は、兵へ顔を向けようとすると、左胸に衝撃が走った。

喉の奥から生暖かい血がこみ上げ、口から吐く。

「ガッ、ハッ?!」

「クハハハ！ 油断するからそうなるんじゃない！」

何が起こったか分からないまま、目が開ききり、その衝撃の原因を知る。

認識した。自分の左胸に血飛沫と共に刀が真っ直ぐに生えているのだ。

天城は誰がやったのかと疑問が浮かび上がり、背後に首を回すと、政長の兵が自分を刀で貫いていた。

あの、初めに斬った兵はまだ生きていたのだ。

（なんとという誤算か……）

足に何故か力が入らなくなり、自分を支えられずによるめきながら地面に横たわった。

天城の兵が刺した敵兵を斬り伏せ、駆け寄る。

「天城殿オオツ！！　しつかりして下さい！」
「待ちやがれツ、貴様！」

政長はこの混乱に乗じて、護衛の四人と共に更に逃亡する。
天城の兵の中の三人がその後を追うが、残りは天城に駆け寄る。
七人の励ましの声が天城の耳に入るが、彼に怒りが沸き上がった。

「お前、達……何を、している、ゴホ、政長を、討て……最期の、
命令だ」

「何をおっしゃいますか！？　天城殿の方が――」

天城は兵の腕を掴み、力強く見つめる。
彼の政長を討てという執念が兵の目から入り込む。

「命令……だ」
「――ッ、承リッ、ました」

かそぼくも力がある声で命令され、兵達は逆らえない。
天城殿の願いを無碍にしては、彼は死に切れないのだと悟り、涙
ながらに政長の討伐に向かって行った。

そして、ここには横たわっている天城、一人だけとなる。
天城は降り注ぐ雨に、自分から流れ出る血を感じながら、ふと思
った。

自分はここで死ぬのだ。
だが、不思議と恐怖が無く、頭の中で自分の思い出が次々と駆け

巡った。

両親が頭を撫でてくれた事、元長と友になるきっかけとなる大喧嘩をした事、戦の初出陣の事、友に子が出来た事、それから数年後に自分にも子が出来た事など、一瞬にて頭によぎって行く。

「これが……走馬灯か……ふっ」

死を目前すると、今までの思い出が流れるという『走馬灯』、彼は信じていなかったのに、自分が体験した事に可笑しさを感じ、微笑に笑った。

雨は絶え間なく彼に降り注ぐ。天城の身体の体温が急速に奪われて行く。

自分の左胸に手をあてると血が温かく、心臓の鼓動が小さくなっているのが分かる。

自分の死が近い。

「湯に……浸かりたいなあ……」

天城はこの冷たくなった身体を温めてくれる、湯を思い浮かべようとすると、生意気で愛しい息子の姿が浮かび上がった。

脳内に浮かび上がってくる息子は、ぼさぼさの頭をして、相も変わらず眠そうな目をしながら、微笑んでいた。

「ふ、頑張れよ……そ——」

彼は息子の名前を言う前に、激動の日々を送った彼の人生は舞台の幕を静かに降ろした。

江口の合戦は天城の死亡から一時間後に終結。

三好政長は淀川で待機していた安宅冬康の率いる水軍によって、水死した状態で発見され、引き揚げられた。

そして、長慶を支えた天城の遺体は、遺族に引き渡す事に決定した。

引き渡す者は長慶の部下が行い、長慶、一存、冬安は細川晴元の追撃戦へと移る。

江口城の制圧と政長が死んだ事を知らされた晴元は、將軍家の義晴、義輝と共に近江へ逃亡、この時点で細川政権は事実上の崩壊となった。

序幕（後書き）

戦極姫のSSが少なくて日々悶え続けて、少ないなら自分が書いて活性化させればいいじゃないと思い、始めました。

更新は亀になりそうですが、完結を目指していきます。

堺での日常（１）

チユンチユンと鳥の囀ずりが聞こえ、朝日が上がり一日の始まりを告げる。堺国の屋敷の一室にて天城颯馬は眠りから覚めた。

その姿はぼさぼさの黒髪に中の上くらいの顔、そして薄い肌色の色無地の和服で藍色の袴を履いている。

「もう朝か……」

目をゴシゴシと擦り、暫くぼーっとしていた。颯馬のすぐ隣には軍学書やら大陸の書物やら本が山積みになっている。

「颯馬様、起きましたか？」

障子が開き、やや太っている中年女性の使用人のトメが入ってきた。

「見れば分かるだろ？ 起きてるよ」

「まったく……また本を読んで夜更かししましたね？ 目の下の隈が酷いですよ」

「別にいいだろ？ ちゃんと起きてるし、トメには迷惑をかけてない」

ぶらつきぼうに言う颯馬を見てトメはやれやれといった感じだ。

「手が掛からないというのは私としては助かりますが……」

こんな若い内から我が侘を言わないのは寂しい気がする。トメは使用人であるからにしてももう少し自分に世話をさせて欲しいのだ。彼女がする事は洗濯と食事の用意くらいであり、掃除に関しては颯馬が勝手にやってしまう。

「トメ、朝餉あさけはもう出来てるんだろ？」
「ええ、もちろんですとも」

颯馬は朝餉が出来ていると確認すると立ち上がり、部屋から出てゆつくりと移動する。

移動した部屋は颯馬の部屋よりも大分広い。
この広い部屋に一人分の朝餉が用意されている所に颯馬は座り「いただきます」と食物に、作った人に、感謝の念を込めて手を合わせる。

「召し上がれ」

トメがそう言うと、颯馬は食べ始めた。朝餉は汁物に玄米に漬物だけという大変質素な内容であるが栄養はきちんと取れている。
一人で黙々とよく噛んで食べる颯馬の傍らでトメがその姿を見守る。一人で食べるのが日常であるが颯馬は一人で食べる事には寂し

いとは思っていなかった。

父、正治は三好家に仕えておりが屋敷に帰ってくるは稀で母は既に亡くなっている。

父は自分を養うために休みなく働いているのは、昔から理解していたから疑念を持つ事無く一人で過ごしてきた。

「ごちそうさま」

「お粗末様です」

颯馬は十五分ちよつとで朝餉を平らげた。腹の具合は後少し食べたい気もするが、食べ過ぎは体調を崩す原因となるためおかわりは要求しない。

「トメ、今日は町に散策してくる」

「さいですか。気をつけて下さいね」

「分かってるよ」

颯馬は自分の部屋に戻り服装を整えて、紫色の羽織を着て屋敷の外へ出た。行き先は歩いて三十分くらい掛かる港である。

ここ堺国は南蛮との貿易が盛んなので珍しい物が入ってくる。そのため、船着き場で一日中見ているも飽きる事が無いのでしょっちゅう来ている。

「何か面白そうな本は無いかな？」

港に着いた颯馬は商人達の邪魔にならないように運ばれてくる物の中から本を探す。

本と言っても南蛮の文字はさすがに読めないので大陸のを重心的に探している。

「兄ちゃん、何か探してるのかい」

「あ、いえ、見ているだけです」

颯馬は商人に話し掛けられて一息も置かず返答した。それにも関わらず、証人は態度を変えない。

「いいよ、いいよ。そんな態度しなくても、探しもんがある事くらい分かるぜ。どんなのをお探しい？」

「いや、本当にいいですから」

「いいから、言ってみなって」

「……大陸の書物」

颯馬は断れば商人は諦めると思っていたが、食い下がってきたので仕方なく素直に答えた。

「大陸の書物ねえ……。確かこの辺りに……」

商人はその場所から少し離れた木箱を開けながら呟く。
一つ、二つと開けては探す。数分経ち五つ目の木箱を開けて、商人はようやく大陸の書物を見つけた。

「おつ、あつた、あつた。これなんかどうだい？」

颯馬の手に一冊の本が手渡される。

本の題名は『天之御使伝』と大陸の字で書かれていた。日本読みをすれば『天の御使伝』である。

「この本は大陸の三國の時のをまとめた話なんだがな、本当なのかどうか分からない胡散臭い物語だ。だが、面白いぜ」

「胡散臭い……？」

「そ、北郷一刀っていう軍師が出てくるんだがな、コイツがなんとも胡散臭いんだ。明らかにこっちの名前なんだが、この頃の時代は大陸とは交流してなかったから渡れるはずがねえのに何故が存在している」

商人は内容を思い出すように次々と説明する。

颯馬はそんな商人の話を相槌を打ちながら聞いていた。

興味深い話だ。それに大陸の軍師とは、どのような人柄なのだろうというような気持ちだが、颯馬の胸に沸々と沸き上がってくる。

「いくらですか？」

「ん、そうだな……百五十文で良いぞ」

商人は少し考えた後、値段を提示した。
颯馬は懷を確かめるとちょうど百五十文あったので幸運に思いながら商人に渡した。

「毎度ありー」

商人は百五十文ある事を確認すると意気揚々とした声で言った。

「ああ、ありがとう」

颯馬はそれだけ言って嬉しそうな表情を浮かべて身体を翻した。
そのような表情を浮かべたのは何故か？ それはこの本に軍師が載っているからだ。

彼は軍師になりたくて、軍学書を買ひ漁っては、ほぼ独学で学んでいた。

ちなみに天城家は武家であり、武芸を幼少の頃から強制的に習わされるのだが、颯馬には全くと言ってもいいほど才能が無かった。
才能が無くても努力すれば、技量は付くものなのだが、彼のサボり癖が拍車を掛けて、凡人の技量のままであった。

しかし、軍学においては何故か物覚えがよく戦、戯盤や将棋では父を何度か負かす程の技量を身に付けて行くのである。

父である正治は息子は武では無く智に長けていると見抜いた。と、言うよりも息子を武人に育てる事は諦めた。

それから、武芸は基礎だけにして（大抵はサボるが……）軍学書
を買い与え、屋敷に帰った時には戦略などを教えるようになった。
まだまだ、荒削りだが経験を積めば良い将になるだろうと正治は
親である事とは抜きに息子の成長を楽しみにしていた。

そんな彼は江口での戦いでその命を散らしたのだが、まだ颯馬に
は知らせは届いていないため知る余地も無い。

「北郷一刀……いったいどんな策を用いるのか」

颯馬は本の内容に期待を寄せて早歩きで自分の屋敷へと向かう。
嬉々飄々としながら曲がり角を注意もせず素早く曲がったのがい
けなかった。

「もぶっ?!」

誰ぞと知らぬ相手に衝突してしまい、颯馬は思わず尻餅をついた。
ぶつかった際に何やら柔らかい物に触れた奇妙な感じがあった。
今まで触った事も無いような、なんとも表現出来ない柔らかさだ
った。

かろうじて、表現するならば、全てを包み込むような優しい感じ
である。

「ん？ 悪いな青年。本を読んでいて気が付かなかった」

「あ、いえ、俺が悪かったです」

颯馬はぶつかった相手を見上げる。相手はキセルをくわえた女性だった。

ツンとした白い髪に、どこか気の抜けた目に『ぐらす』と言う南蛮の物を掛けていて、日ノ本では見られない服装をしている。

その服なのだが太ももの辺りがチラチラと見えるのだが、それ以上のモノが颯馬の目を釘付けにする。

「……………」

それは何か？

健全なる男性諸君ならつい見てしまふ箇所では無いだろうか？

そうあそこだ。女性の象徴である二つのお山だ。垂直に言えばおっぱいである。

颯馬は尻餅をついているためにこの女性の胸を嫌が応でも下から見えるので大きさがハッキリと分かる。この女性の胸はデカイ——としか表現しようがない。

（そういえば、ぶつかった時の柔らかい感触って……胸か？ 胸なのか？）

颯馬は先ほどの感触を思い出そうとするが『もにゅ』だったのか、『ふにゅ』なのかよく思い出せない。

曲がり角で女性とぶつかった際に、胸の感触を味わう事が出来る

彼は男性から見れば、羨ましい限りだ。

「どうした？ 青年」

女性はいつまで経っても立ち上がらない颯馬に疑問を浮かべて聞いてきた。

目の前の女性の胸に見とれていた颯馬は話し掛けられて、慌てて立とうとするが――

「痛ッ!？」

左足首に雷に打たれたような激しい痛みが走った。

どうやら転倒した際に足を捻ったようで、足を動かさなくても断続的にズキズキと痛みが生じている。

「ふむ、足を捻ったか……どれ、見せてみる」

「え？ は？」

女性のなすがままに袴の裾を上げて痛む箇所を見せる。

先ほどの気の抜けた目が嘘の様に真剣な目をして女性は患部を診る。

「ふむ……」

「……ゴクッ」

颯馬は女性の胸に再び注目する。この女性の服は胸の上半分は肌が露にさらけ出されているのだ。

目を逸らそうとするが、どうしても大きなたわわに、引き寄せられるように目が行ってしまふ。

何とも恐ろしい魔性な胸である。

「やや、腫れてるな。家で治療してやろう。ほら、立て」
「へっ？」

何が何だか分からぬまま、颯馬は女性に肩を預けながら連れて行かれる。

少しばかり歩いた先のこん縮まりとした家の中へと上がりこんだ。家の中はかなり乱雑しており、きつい薬草の匂いで充満していた。

「適当に座って待っている」
「適当に……？」

颯馬が中を見回しても座れそうな場所は見当たらない。どこもかしこも書物や怪しげな物でいっぱいだ。仕方なく乱雑している物を隅に寄せて、座る。

「町医者なんですか？」

ガサゴソと何かを探している女性に颯馬は何気なく質問してみた。

「まあ、そのようなものだが、もう一つ、つけ加えるなら、変人の――がつくがな」

彼女の返答の一部分が気になり颯馬は、頭をかしげる。けれども、女性は颯馬の様子を気にせず器を近く持つてくる。

何が入っているのだろうと覗き込むと、緑っぽい液体が入っていた。

その液体からは鼻を突き抜けるような、清々しい匂いが立ち上っている。

「ハツカですか？」

「そうだ。この汁が痛みを和らげてくれる」

ハツカは食べたり、煮詰めて出てくる汁を飲んだりすると、喉を冷たくしたり爽快感を与える。

そのため、香料や喉の痛み止めなどに使われ、更には女性が言ったように、筋肉痛を和らげるのに使う。

「患部にあてるぞ」

女性の手によって、ハツカの汁が染み込んだ布を患部に貼られ、紐で固定された。

数秒後には何とも言えぬ心地よい冷たさが、患部から感じた。

「ありがとうございます」

「どういたしましてだ」

颯馬が女性に治療の礼を言った後、彼女の名前が気になった。

「あの、名前は何と言うのですか？」

「杉田玄白だ。『死体荒らしの悪鬼』と言えば分かるか？」

「ああ……元の噂が、かなりねじ曲げられたヤツか」

「その噂は私の事だ」

玄白は何でもないように自分が元となった噂を語った。

彼女が『死体荒らしの悪鬼』と言われる所以は戦が終わった後、戦で散った死体を解剖している事からきている。

この行為を目撃した人々亡き者を侮辱する行為をする彼女を忌避した。

目撃者の一人が誰かに話をする、様々な尾ひれが付いた噂として、幾内中に一気に広まった。

実在するかしないかの真偽が定かでは無くても、人々はどちらでも良い。

空想の塊であっても、大勢の人が認知していれば、空想は現実にある』という存在に変わるからだ。

まあ、一番の理由は変わらない生活と、気が滅入りそんな戦の発

生と繰り返される日常の中で、一種の刺激ある清涼剤として、噂に耳を傾けているのが大多数である。

その大多数の者が生み出した噂は元の原形を留めてはいなかった。元の噂を知る者や彼女を目撃した者が、この噂を耳にすると「え？ 何ソレ？」状態になる程だった。

その大幅に改竄された噂の内容とは、禍々しい悪鬼で鋭く赤い爪と牙を持ち、満月の晩に死人を頭から足まで切り裂いて、肉を喰らうという具合だ。

「それで、死体を解剖する理由は何ですか？」

「おや、私が怖く無いのか？」

「何故、恐れる必要があるんだ？ 俺は死体じゃないから解剖はされないだろう？」

その言葉を聞いた玄白は鳩が豆を喰らったみたいにキョトンとし、そして、微かに顔が綻ぶ。

確かに、その通りだ。

自分は死体しか解剖しない。人々は自分の行為を外道だと言い、理由も聞かずに自分を避けていたが、目の前の青年は初めて理由を聞いて来た者だ。

それによく見れば、その瞳は真理を求める者の瞳とよく似ていた。玄白はこの青年なら自分の考えを理解してくれるかもしれないと思いつきながら話を切り出した。

「青年、五臓六腑を知っているか？」

「ああ、人の内臓の事だろ」

五臓六腑とは人間の内臓は心臓、肝臓、肺臓、脾臓、腎臓の五つの臓と大腸、小腸、胃、胆、膀胱、三焦

の六つの腑であるという、五行思想が混じった大陸の医術の説だ。

これは全国の医者が実際に検討もせず、信じて止まない絶対真理だった。

そして、書物で五臓六腑の存在を知った颯馬もそういう物なのだと、知識として頭に入れていた。

「それが本当に正しいかどうか疑問に思ってな、死体を解剖して大陸の書物と見比べてみた」

玄白は人体図が描かれた大陸の書物を開き、言葉を紡ぐ。

そして、何枚のも紙を取り出し、颯馬の前に並べる。

「で、これが私が写した奴だ」

颯馬はそれらを見比べる。大陸の図と玄白が示す図は完全に違っていた。

「かなり違うな。これは……」

「だろう？ お前は良い奴だな。頭の固い医者共にこの事を話しても全然耳を傾けもしない」

「今まで自分が信じて来た説が否定されるからな、それは受け入れたくもないだろう」

颯馬は受け入れない側の理由を推測し、述べた。

それに対して、玄白は「確かに……だがしかし……」と声を力を込めて、別の書物を取り出した。

「これは……？」

「南蛮の医術が記された本だ。確か、『あなとみあ・たーへる』と言っていたな」

「へえ、凄いな、コレは……」

颯馬は『あなとみあ・たーへる』を開き、内容を見ると、何とも現実味のある図と意味の分からない文字らしき物が綴られている。

玄白はこんな書物が読めるのだと、颯馬は畏敬の念を覚えた。

「この文字は何て書いてあるんだ？」

「読めない」

颯馬が文字について、質問すると清々しい程にさらりと返事が来た。

あまりにも清々しかったので、思考が停止した。

「……………読めないのか」

「ああ……読めないんだ」

「そうですか……」

「そうなんだ」

「……………」

話を続けようと何とか笑顔で会話を試みるも、途切れてしまい、微妙な空気が流れた。

何か、踏んではいけない所に踏んでしまったと、颯馬は感じた。

「青年」

「はい、何ですか？」

「これを私達が読めるような書物にしたいんだ。この文字を読める奴に心当たりはあるか？」

少し間が空いた後に玄白は読める人がいるかどうか聞いた。

玄白はこの書物を自分達が読めるようにすれば、新しい説が人々に受け入れるのではない、なんとか手に入れたのだ。

「そうだな、商人の中に通訳がいるから、頼んでみればいいんじゃないか？」

「あゝ、手当たり次第に聞いてみたが、全部断られたんだ」

「それじゃあ、もう、自分で覚えるしかないな」

颯馬から自分で覚えるしかないと言われて玄白はやはり、それしか無いのかと、落胆した。

南蛮の文字を覚えるのにどれほどの時間が掛かるのか分からない。

「ふう……地道に覚えて行くしかないか」

「それしか無いな」

そう会話はすると野太い鐘の音が聞こえた。

この音は昼間丁度をお知らせする寺の鐘の音である。

これは、寺の和尚が人々に昼になった事を知らせれば、きっと助かるだろうと善意から始まり定着した。

「昼か。そろそろ、おいとまさせて貰うぞ」

「ふむ、もうそんな時間か。久しぶりに充実した会話だったぞ」

颯馬は昼餉の時間だと思い、玄白の家から去ろうと立ち上がる。
足首の痛みは少し引いており、歩くのには問題が無さそうだ。

「それじゃあ、解読頑張ってください」

「あ、ああ……出来る限りな」

去り際に颯馬は『あなとみあ・たーへる』を指してそう言つと、
玄白は苦笑した。

そして、颯馬は玄白の家から去って行った。

「そついや、名前を聞かなかったな……。まあ、いいか」

一人になった玄白は颯馬の名前を聞かなかったのを思い出したが、
気にする事無く『あなとみあ・たーへる』を読むための勉強をする
ために、キセルに火を付けて机に向かった。

堺での日常（１）（後書き）

「片倉景綱と梵天丸がお送りする『なぜなに戦極姫』の始まり始まり」

「なあ……小十郎。このコーナーの名前、危なくないか？」

「このコーナーは作中の補足をする不定期開催のコーナーだ」

「おい、小十郎。無視するな」

「うるさいぞ、梵天丸。このコーナーは元々、最上が進行する所を伊達家が無理を言って交代して貰ったんだ。文句言うな」

「そうなのか？」

「ああ、そうだ。作者には逆らえない。それに、名前事なら気にするな。分かる人にしか分からないはずだと作者が豪語していたからな」

「そ、そうか……」

「そうだ。時間が惜しい話を進めよう。今回の補足は昼を知らせる鐘の事だ」

「戦国にそんなのあったのか？」

「これは作者の想像だ。昼だと判断する方法は太陽が真ん中に来たら昼だそうだ。戦国にそんな事があったかどうかの真偽は不明だ。これに関しての言い訳は原作が政宗やら玄白やらと時系列が違うのが入っているんだからいいんじゃないか？ との事だ」

「まあ、確かにな。結構、おかしい所があるからな」

「そういう事だ。原作を知らない人もそういう事だと納得してくれ。それじゃあ、また次回だ」

「また、会おう」

堺での日常（２）

颯馬は今日も町をぶらりぶらりと散策していた。昼間から何もせず、散策するなど颯馬を知る者から見れば、親のすねをかじって暮らしている駄目な人間と思われている。

その事は颯馬自身も自覚していた。もう、今年で十八になろうというのに、親の庇護下で生活しているなど恥ずかしき事だ。

もういい加減、独立して父が仕えている三好家に仕官しようかと、真剣に考えていた。といえどもこうして自由に過ごすのも悪くないかな？ と、思っていたりする。

けれど、武家に生まれたからには、世に自分の名を残したいという願望は少なからずある。

だから、父にこの思いをさらけ出してみようと考えて、書簡を一週間前に出した。

届くのに何日掛かるか分からないが、少なくとも一ヶ月以内には必ず届くだろう。父が書簡で返してくるか帰って来るまでは、いつも通りにぶらぶらと過ごす。

「あれは……新しく出来た、南蛮のか」

颯馬は南蛮神教の新しく建てられたと思われる教会を、偶然見つけて呟いた。教会の屋根には南蛮神教の象徴である十字架がそびえている。

初めて見かけた時は、とても違和感を感じていたが、今ではすっかり見慣れている。

一年前くらいだったか、南蛮人が貿易と共に布教をしたがって

た。境国の商人は莫大な利益をもたらしてくれる南蛮人との貿易を続けたいため、布教の話に一発で許可した。

普通ならば国の宗教は大抵、支配者である大名の信仰する物であったり、都合の良い物を奨励させるのだが、堺国に君臨する大名は居らず、商人達で治めている国なのだ。

国を防衛する兵士も商人達が金銭を出して雇った私兵だ。現在、幾内に力を持つ三好家は堺国を支配下に置いたが、それは名目上であって実際は支配されていない。

というもの、支配しようものならば商人達からの反発が起きて、反乱を起こされる恐れがある。

三好家はただ、貿易品を自分の所に売る優先度を上げて欲しいだけなので、防衛などの費用をはらうから自分の所を優先して欲しいと、粘り強く交渉して締結させた。

そして、商人達が許可を出した南蛮神教だが、最初の頃はあまり信仰するものはいなかった。

宣教師達が日々、宣教を続けて行くうちに百姓達を中心に信者が増えていった。また、武士や大名の中にも、ちらほら信仰する者が僅かに現れている。

南蛮神教を信仰する者は『イザヤ』といったような、洗礼名が与えられ、周りは彼らの事を『キリシタン』と呼ぶ。

颯馬はこの浸透しつつある南蛮教に興味があった。

日ノ本に存在する神道、仏教とは何が違ってその教えの何処に信者は惹かれているのかが、知りたかった。

幸い教会には信者はおらず、黒い服を着た宣教師が座って南蛮の書物らしき物を読んでいる。

颯馬は自分の好奇心を満たすために教会に足を一步と踏み入れた。宣教師は颯馬に気づいたらしく、書物を閉じてゆっくりと立ち上がった。

「入信希望者ですか？」

宣教師は片手を颯馬の方へ差し出し、拙い言葉で微笑みながら聞いた。

宣教師の印象として感じた事は、おおらかで優しくそうである。それと、髪と瞳は焦げ茶色で背丈が颯馬より高い。

「いや、ただ、南蛮神教がどんなのか聞きたいだけだ」

「良いデスヨ。あなたも話を聞けば、その素晴らしさが分かるでシヨウ。まずは、自己紹介しまシヨウ。私の名はヨハンと言いまース」
「天城颯馬だ」

ヨハンという宣教師に続いて、颯馬も名乗るとヨハンは手の平に収まるほどの十字架を両手で持ち、瞼を閉じた。

「主よ……彼の者に出会えた事を感謝シマース」

何かに対して祈り始めたヨハンを見て、颯馬は一瞬たじろいだ。ヨハンの行動は何も知らない颯馬にとって、不可解な事なのだ。

「では、教えて差し上げまシヨウ。まず、この大地とあらゆる動植物は主がお創りになられましタ」

「主とは何だ？」

「GOD——この地では神と呼びマース。主は使徒と呼ばれる天使達を従える、絶対神なのデース」

この事からいくつもの神を崇拝する仏教と神道の多神教に対して、南蛮神教は神は絶対に一人だけの一神教である事が分かる。

多神教と一神教のそれぞれの特徴を簡単に説明すると、多神教は一人一人の神に特定の役割を担っており、人々は豊作を願うなら豊作の神に、厄除けを願うなら厄除けの神にといった具合に信仰を捧げる。

一神教はそれが無い。

豊作も厄除けも全部、唯一神にお願いする。そして、この世のあらゆるものは神が創ったなどの傾向が一層強い。

異文化や異教、神を否定するような説や発見は異端視する事が多い。

「そして、この南蛮神教の教えを正しく広めたのが神の子である救世主のイエス・キリスト様なのデース」

「ふんふん」

ヨハンの饒舌な喋りを一言一句を聞き残さず、颯馬は記憶に南蛮神教の知識を入れていく。

やはり、未知なる物を知る事は楽しい。知る事で自分の空いている隙間が埋まっていく充実感と言つべき物を感じる。

「イエス様の教えは『愛』というものです。例えば、『汝、隣人を

愛せよ』というのがありマース」

「隣人を……愛する……？」

「ハイ、隣人と言っても、本当に自分の家の隣の人を示すのではありません。自分だけに関心を持つのでは無く、他人の出来事も自分の事のように扱いなさい
ということデス」

南蛮神教の戒律は『神の愛』と『隣人愛』の二つに集約する。

神を心の底から信用し祈りを捧げて、貧しい者には自分の財産を分け与えて、お互いに支え合う事が大事なのだ。

「そして、神を拒否した事を悔い改めぬ者は最後の審判にて地獄に落とされ、信仰する者だけが天の国に招待されるのデース」
「なるほど……」

颯馬は南蛮神教は仏教に似たようなものだとは判断した。仏教の浄土真宗、法華宗などの宗派の戒めなどは違うものも、信仰する者は天国に行けて、信仰しない者は地獄に落ちるという所がよく似ていた。

日ノ本の仏教で百姓などによく流通しているのは念仏を唱える事によって、天国へ行けるという形の宗派だ。

天城家は一応浄土真宗の信仰する家となっているが、颯馬は信仰する事は無かった。

本来の仏教の教え自体は良いのだが念仏を唱えるだけで簡単に天国に行けるだなんて、皆お釈迦様とやらを馬鹿にしすぎだろう。

颯馬は少なくともそう思っており、浄土真宗にも他の宗教も信じていない。いわゆる、無宗派という層の人間だった。

無宗派といっても、完全に宗教に関わっていないわけではない。年始年末になれば、当然のように除夜の鐘を聞いたり年明けを祝ったりする。

その行為は仏教と神道の宗教に関わっている。つまるところ、無自覚の信仰を持っているのだ。

「その天の国とやらは信仰するだけで行けるものなのか」

「ハイ、悔い改めて、富に執着する事なく隣人愛を実行すれば良いのデース」

「それじゃあ、商人達の中に信者はいるか？」

颯馬は年中休む事なく、お金儲けをしている商人の事を聞くと、ヨハンは眉間に皺を寄せた。

商人の中にキリシタンがいるという話は聞いた事がないが、あえて触れてみたのだ。

「……いえ、彼らの中には信者は一人もいません」

「それは、何でだ？」

「彼らは富を分配するのが嫌なのでシヨウ」

そう、商いをしてお金を儲ける商人と南蛮神教は相性が悪い。

南蛮神教の教えには安息日という、一週間に一回、絶対に休まなければならぬ日があるが、商人にとっては休むなど考えられないのだ。

商人達は損をする事を嫌い、得する事を考えるため、南蛮神教に入信する事は、天地がひっくり返ってもありえない。

「まあ、と、とにかくデス！ あなたも入信しませんか？」

ヨハンは商人が入信しない事を振り払うように、颯馬に入信を誘う。

されど、颯馬は首を横に振り、拒否の姿勢を示した。

「申し訳ないが、俺は入信しない。興味深い話をしてくれて感謝する」

「ムウ、仕方ないデスネ。自分で決めた事なら無理強いはできません。ですが、生きる事に苦しくなったら、来てくだサイ。主はいつでもあなたを迎え入れマス」

ヨハンはあつさりと入信させる事を諦めた。信仰とは他者から無理強いされてする物では無いのだ。

信ずるとは心の底から疑わない事である。だからこそ、自分の意思で入信しなければ、信仰の意味は成さないという考えを持つ者だった。

しかし、宣教師が皆ヨハンのような考えを持っているわけではない。

豊後の大友家、土佐の一条家に布教した宣教師カブラエルは南蛮教を早急に浸透させるために、当主に寺を打ち壊して、教会を建てさせている。

そして、仏教に入信している民を無理やり南蛮教へと改宗させている。

当然のように僧達や仏教徒達の反感を買い、両者の間に深い溝が出来上がっているのだ。

入信を無理強いしない点においては、ヨハンは良識を持つ宣教師なのだろう。

「それでは、あなたに主の導きがあらん事を」

「ええ、では……」

颯馬はヨハンからの祈りを受けた後、教会を出た。

通り道は人がちらほらと忙しく歩いていた。反面、颯馬はゆっくりと歩を進める。

「暑い……」

今日の天気は雲一つも無い、快晴である。爽やかな青色に黄色く輝く日がガラガラと輝く。

湿気があり、気温も高い。人々は熱が充満する暑さを味わっていた。

颯馬もその暑さを味わっていた。この暑さから逃れようと屋敷への歩みを早める。

数分ほど歩くと、頬に一筋の汗が流れる。それだけではない。背中もうつすらと汗をかいており、衣服が引っ付いて気持ち悪さを感じていた。

颯馬は更に歩みを早める。早く屋敷に帰って、涼しい部屋でゴロゴロしたいという気持ちが強くなった。

「っと！ スマンな」

「うっん、大丈夫だよ」

腹の辺りに軽く衝撃が走る。少女にぶつかったのだ。

先日の事を繰り返すかのように、またしても颯馬は人にぶつかったが、今回はどちらも転ぶ事は無かった。

颯馬はぶつかった、自分の胸元に位の少女に謝罪し、再び、歩み始める。

ぶつかった際に何やら違和感があった。しかし、颯馬の頭の中は帰る事だけでいっぱいだったので、気にする余裕は無かった。

「やっとだ」

自分の屋敷が視界に入った所で安堵する。
そして、何気なく懐に手を入れた。

（あれ……？ 無い）

金銭の入った袋が無くなっていた。金銭袋は決して落ちないように衣服の内側に縛りつけておいた。

それが勝手に無くなるなど、あああ、ありえない。

颯馬の思考がものすごい勢いで駆けめぐる。今日、何があったかを思い返す。

「出かける時はあって……教会を出る時もあつたはずだ。……で」

——帰る途中で少女とぶつかった。

あの時に感じた違和感を必死に思い出す。
少女とぶつかる際に懷に違和感を感じた。その違和感の原因は少女が颯馬の懷に手を入れていた。

「アイツかッ!!」

颯馬は違和感の原因を突き止めて、叫んだ。
自分の物を盗られた事に憤りが止まらない。少女と別れてからそんなに時間は立っていない。

まだ、近くにいるかもしれないと結論をはじき出す。
少女の顔を記憶の中から引きずり出して、その顔を探し出すべく町へ駆け出した。

「あのガキ! ぜってー、捕まえてやらあッ!」

その時、堺の町に颯馬の叫び声が響き渡った。

堺での日常（２）（後書き）

景「『なぜなに戦極姫』の時間だ」

政「今日は南蛮教——現代はキリスト教と呼ばれる宗教の事についてらしいな」

景「うむ。なぜ日本に宣教しに来たのかという事だな。実は日本に宣教されたのはカトリック派のキリスト教なんだ」

政「キリスト教も仏教みたく派閥があるのか？」

景「宗教というのは人によって解釈の仕方が異なるからな。キリスト教、仏教に関わらず、他の宗教にも起こる。そして、日本にキリスト教が伝来する前にヨーロッパでは宗教改革が起こって『プロテスタント』という宗派が台頭した」

政「なるほど……おそらく、その新しい宗派に信者が取られたりでもしたのだろう」

景「正解だ、梵天丸。この新宗派は富を蓄積する者でも天の国に行けるという教えが商人達の支持を得た。その逆にカトリックは支持者が激減して、キリスト教が根付いていない日本に布教しに来たというのが一つの理由だな」

政「ふん。で、他の理由はなんだ？」

景「ああ、それは【作者の干渉フィールドによって読めません】だ」

政「お、おい、どうした小十郎……」

景「どうやら、作者が干渉してきたようだな。おおかた、これから先に関わる事だな。今日はここまでにしよう」

政「そうだな。では、また次回だ」

堺での日常(3)

颯馬が金銭を盗られた事に気づいた頃、少女は黒い髪を揺らしながら、人通りの少ない道で金銭を数えていた。

「ひーふーみーやーとう！　っと、五十文か……。蕎麦が六回食えるくらいか」

少女は幼い姿とは裏腹に大人びた声を放ちながら、少し残念そうな表情を浮かべた。

彼女は颯馬自身の事を調べ、有力な武将の家の者だと知って、さぞかし懷が膨れているだろうと期待しながらスリを決行した。

その結果はたったの五十文。

一般的な庶民からすれば、持ち歩く金銭にしては少し多いくらいだ。

しかし、少女からすれば少なすぎるのだ。

彼女はスリをして日々を食い繋ぐ身分だ。

五十文では一日一食が食べるとすると、一週間持つか持たないかわからないである。

他人の懷から金銭を盗む技術には自分でも自信を持っているが、盗る回数出来るだけ抑えたい。

自分が盗ったと気付かれ、盗人として顔を知られたくはないからだ。

顔を知られ、手配が回るものならば、町から町へと逃げ回るハメになる。そういう目に合うのはご免だ。

まあ、彼女の親友は正反対に自分の悪行を誇り、声を高らかに上げている。

親友は貧しき者からは決して盗らず、富む者から金銭や骨董品を盗る天下の大泥棒としてその名を轟かせている。

彼女からすると、呆れて物も言えない。

そんな事をすれば、躍起になって捕らえようとする者が増え、危険な日々を送る事になる。

自分の名が知れ渡り危険な日々を送る事が楽しいのだと、親友は語るが彼女は一片の欠片も、一塵でも理解できない。

誰に盗られたか分からないように金銭などを盗み、庶民に紛れて暮らす彼女には一生分からない事だろう。

「ま、感謝するよ。天城の嫡男殿」

そう言つて、彼女はこの場から去るために早歩きで移動する。

移動している最中に彼女の後方から駆ける音が響いてくる。

おそらく、飛脚が駆けているのだろうと彼女は何気なく振り向いた。

駆けていたのは飛脚では無かった。駆けて来るのは――。

「見つけたぞ。盗人ッ！」

自分が盗んだ相手である天城颯馬の姿があつた。

颯馬は鬼の如く表情を歪ませて、少女を捕まえるべく駆けていく。

「あちゃー、気付くの早すぎるよ。今日は厄日だな。厄祓いでもしてもらうかな」

少女は落ち着いた様子で軽口を叩きながら、颯馬の方を目を向ける。

汗を流しながら必死に駆けて来る颯馬の姿を滑稽に思った。

「厄払いする金はないから結局しないけどね」

少女は颯馬に背を向けて逃走を開始する。

小さな身体だというのに、大人と同じ速さで……いや、それ以上の速さで駆けていた。

「ぐぬぬぬっ」

颯馬も負けずと駆ける速さを上げる。

普段から身体を動かすのをしてない颯馬にとって、体力は余り無いため短期決戦を目論んだ。

「むっ、速いな。走りには自信があっただけだな」
「いい加減に捕まれッ！」

予想外だった。少女は自分の足の速さには誰も追いつけないと思っていた。
大人ですら、自分の速さに適わない。なのに、この男は追いついてくる。

颯馬の様子を見れば、すでに疲労困憊の表情が出ており息を激しい。

この男、限界を超えて走っているのだと思考した。

「作戦変更」

少女はこのまま走っていても埒があかないと判断し、人通りの多い道に入って駆ける速さを少し落とした。

颯馬は速度が落ちた少女を確認して、これを機とばかりに最後の力を振り絞って駆ける。

（後、少しだ！）

颯馬は少女へと手を伸ばす。

一度目は衣服を掠めただけだった。

二度目の試みは見事に少女の二の腕を捕らえた。

捕らえた二の腕を離さぬように力を入れて引く張る。

「やっと捕まえた……ぞ」

「いやっ！ やめてっ、離して変態！」

逃走劇は終わったかのように思ったが、少女は先ほど大人びた声ではなく幼い声で叫んだ。

そして、颯馬から逃れようとジタバタと手を振りほどこうとする。

「は？ いきなり何を……？」

「犯されるー」

そこで颯馬は理解した。今の状況を整理すると……

自分がいたいけな少女を襲っているように見えなくなると。
いや、見えなくはないではない。完全にそう見える。

もし、自分がこの状況を見れば、自分でもヤバい人に認定する。

「兄ちゃん、ちょっといいか」

「白昼堂々から少女を襲うたあ、見過ごせねえぜ」

その証拠に善良なる庶民一、二、三と次々と現れては颯馬を取り
囲む。

気づいた時にはすでに遅し、颯馬に逃げ場が無くなった。

「違っ！ 俺はソイツに――」

「いいから、その手を離せ」

庶民達によって少女が解放される。

颯馬は大人達に囲まれ身動きができない。

「で……なんで少女を襲っていたか話してもらおうじゃねえか」

「だからな、金銭を盗られたんだよ」

「嘘言え！」

「嘘じゃねえ！」

颯馬は庶民達と口論している最中に少女がにこやかな顔で去っていく姿を見た。

その悪気のないような顔を見て、苛立ちが激しくなった。

あの顔を見て叫ぶ事を我慢できるものだろうか？ 否、叫ばずにはいられない。

「あんやろーッ！」

颯馬は怒りを吐き出すかのように自然に口に出していた。

すぐに首根っこを捕らえて殴ってやりたいのはやまやまだが、庶民達に阻まれて動く事が出来ない。

そんな颯馬を嘲笑うかのように少女は手を振りつつ、誰にも気づかれず立ち去っていった。

「あのガキが俺の金銭を掠め盗ったんだ」

「最近、スリが横行しているとは聞くけどよお。あの嬢ちゃんがそうだと云うのか？」

「そうだよ。つか、アイツすでに逃げたし！」

颯馬の言葉に庶民達は少女の姿を探そうと辺りを見回す。
どこに目を向けても少女の姿は無かった。

「ホントだ。いつの間に消えたんだ？」

「そういや、あっし……。金銭をスラれた日にあの少女とぶつかったな」

「なんと！ では、あの少女が犯人だと？」

「え？ じゃあコイツの言っている事は事実なのか？」

颯馬を取り囲む男達からどよめきて疑惑が起こる。

この場にはいない少女の言っていた事は嘘ではないか？ と思い始める。

そのどよめきを鎮めるように一人の男は手で制した。

「真偽を明らかにするには少女を一旦捕らえるぞ。まだ近くにいるかもしれない」

「よし、皆で手分けして探そうか」

「ああ……」

嘘か真かを証明するためには少女を捕らえ、スリの被害にあった者に被害にあった日にぶつかった見覚えがあるかと問う事にする。

見覚えがあれば少女の犯行の件が濃くなり、そうでなければ颯馬が嘘をついていたとなる。

「俺の疑いはまだ、晴れないのか？」

「あたりめえだ」

「そうか……」

未だ、疑われている事に対して、颯馬は仕方がないかという表情をしつつ、息をつく。

「じゃあさ、見張りをつけても、いいから俺も搜索させてくれ」

「ふむ……いいだろう。皆、搜索開始だ」

その合図によって、少女を探し出すべく四方八方に散る。
颯馬は二人の男に左右に挟まれながら、搜索を開始した。

「アイツはその道から去っていった」

「なら、行ってみっか」

颯馬達は少女が去って行った道を突き進んで行く。

進んで行く中で周りにも目を向ける。

黒髪を後ろに束ねていて、のんびりするような目をした背丈の低い少女は、どこへ行ったのかと。

盗人容疑者はいったい、どこを逃走しているのと、探し続けた。

「いたっ！」

「どこに!？」

右側の男が少女を見つけたらしく、声を上げた。

颯馬も男の視線をなぞるように追う。

その視線の先に少女があった。

すかさず、颯馬達は追いかけた。

「今度は逃がさねえ」

「またか……。めんどっち」

吼える颯馬の姿を再度、認識した少女はうんざりした。

今日は本当に厄日なのかもしれない。彼らを見る限り、他の人も自分を搜索しているのだろうと予測できる。

ここまでくると、もう堺には居ることができない。明日には自分が盗人として千里に知れ渡るであろう。

「ここは過ごしやすい場所だったんだけどな……」

少女は逃げる素振りも見せず、その場で人との別れを惜しむように呟いた。

そして、駆けて寄ってくる颯馬達に捕らえられたというのに、ニヤリと笑った。

「何がおかしい？」

「いやー、久しぶりに使うなーと思ってね……？」

颯馬は少女が何の事を言っているのかは、検討もつかない。
そんな事よりもだ……、

「てか、俺の金を返せ！」

「いいよ。返してあげるよ。ほら」

少女が颯馬の金銭袋を揺らしながら、つまんだ。
まごうなき事に颯馬の物だった。颯馬はひったくるようにして、
受け取り金銭を数える。

額に変化は無いようで、颯馬は安堵の息を吐いた。

「嬢ちゃん、今までのスリは君がやった事か？」

「さてね……？ 想像に任せるとしよう」「

男が事実確認のため少女に質問した。

「まあそれよりもだな、天城颯馬」

「なぜ……名前を……」

自分の名前を言われて、胸がどきりとした。
誰も見知らぬの初対面の人に自分の名前を言われれば、不審に

思っだろう。

颯馬とて、例外では無かった。そもそも、この時代、近隣との仲間意識が非常に強いため、他所者が入ってくる事を嫌う。

そのため、他所者に近隣の人の情報を簡単に話す者などはいない。スリは最近横行し始めたので、この少女を容疑者と仮定すると堺に来てから日あまり経っていないので、他所者にあたる。

「ちゃんと、責任は取って貰うからね。じゃねえ」
「おい、こら！」

颯馬の言葉に応える事なく、立ち去ろうとする少女の肩を男が掴んだ時であった。

少女の肩が陥没し、崩れていく。

「なっ!？」
「ひいあわわわ!？」

少女の肩を掴んだ男は盛大に驚き尻餅をつきつつ、後退りする。

見守っていた颯馬ともう一人の男は、魂が抜かれたように、その場から動かなかった。

否、動けなかった。自分達のすぐ前で、絶対にあり得ない事が起こったのだ。

人が消えて、鼠になったというあり得ない事が……。

呆然とする颯馬達から一匹の鼠は素早い動きで、何処ぞと行ってしまった。

その場にあるのは、少女が身に纏っていた衣服のみと、それを見つめた男、三人だった。

「これは……夢……なのか……？」

颯馬がぼつりと言って、二人の男と顔を見合わせた。

彼らも、なにがなんだか分からないという感じだった。

颯馬達は自分の頬をつねってみる。頬に痛みはしっかりと走った。この痛みで夢から目覚める様子も無いので、これは現実であると証明される。

颯馬達は狐につつまれたような気分で、他の者達に報告をすると当然のように笑われた。

しかし、事実は事実なのだと話をしたが、最後まで相手にしてくれず、そのまま解散となった。

この話は明日には笑い話として、堺中に知れ渡るであろうと颯馬は考えながら帰路を歩む。

本当にあの場で起こった事は嘘だったのだろうか？

狐に化かされて見ていた幻覚だったのか？

幻覚にしては現実感があった。あれは確実に現実で起こった事なのだと、絶対的な確信とは言えないが、颯馬はそう思った。

家の前まで近づくとなにやら人がいた。

何事なのかと疑問に思いつつ足を踏み入れると周りがざわめく。

「ああ、颯馬様。今お帰りになりましたかッ!!」

そんな中で颯馬のもとに駆けつけたのは使用人トメであった。しかし、様子がおかしい。トメの目には涙が溜まっていた。

「何があつたんだ？」

「それが……それが……」

トメはただそう繰り返すのみで、話が見えない。

颯馬が困惑する中、家から年端も行かない少女が歩み出てくる。紫がかった髪は左右に一つずつ束ね、南蛮衣装を取り入れたような和服を着ていた。

「あなたが天城颯馬かしら？」

「はい……」

可憐な声が響く。

颯馬は彼女の問いに頷いた。

「私は三好長慶様にお仕えしている松永久秀と申します。長慶様の命により——」

久秀はそこで一息ためた。雰囲気からして、あまりよくない事を告げられるのだろうと颯馬はそう感じた。

「颯馬殿の父君、天城正治殿の戦死の知らせと遺体の引き渡しに参りました」

「な……に……？」

颯馬の懸念を裏切る事なく父の死という、悲しい事実を突きつけた。

仕官（１）

天城家から念仏を唱える和尚の声のみが流れる。

無論、他でもない正治の死のための念仏である。葬式は遺体が天城家に運ばれてすぐに行われた。

正治の死を知った近隣の人のほとんどは参列し、彼の死を悼んだ。彼らに加えて、久秀と長慶の部下達も参列していた。

部下達も正治の死を悔やむように顔には悲しみが浮かび上がっている。けれど、久秀にはそのような様子は見られない。

悔やみ、悲しみといった感情は顔には現れず、平静な清ましたままであった。彼女が何を思いながら、葬式に参列しているのかは、悲しみに暮れている参列者達には考えを浮かばせる事は無い。

ただ、一つだけ彼女について気づいた点を知った者もいた。久秀はしっかりと念仏を上げている和尚の方を向いているが、視線は喪主である颯馬をを眺めるようにじつくりと見ていた。

颯馬は久秀に見られていることなど知らず、父の死を悲しんでいた。念仏など耳に入ってこない。

頭の中は父の事でいっぱいだった。何故、父が死なねばならぬのか？ この戦乱の時代は戦死する事もあるのはよくある事だと知っている。

されど、この時ばかりはその常識は意味をなさない。父の遺体を見ると涙が溢れそうになる。優しくも厳しい父はもう動く事はない。自分に話しかけてくることは未来永劫、決してない。

悲しみに加えて、颯馬には疑問もあった。

父は心臓部分を刀で貫かれ、死の間際まで痛く辛いはずなのだ。

なのに、どうして、そこまで満足そうな笑顔をしているのか理解できない。

死を迎える瞬間まで恐怖を感じる事なく笑顔で逝けるのか？ それは颯馬には分からない。

分かる時が来るのは死の瞬間を迎える事で理解する事ができるのであろう。

颯馬は父の亡き顔を思い浮かべると一雫、頬を伝った。喪主が…男子たるものが涙を人前に見せる事は恥ずべき行為である。

そのため、その雫を誰にも見られないように、颯馬は慌てて指で拭い去った。平常を保たないといけない。

父の手前、せめてこの葬式の間くらいは喪主として毅然とした姿を見せてやりたい。それが今自分ができる事だろう。

颯馬はそう心にとどめ、唇を噛みしめる。ただ、ひたすらに心を殺し、気丈で有り続ける。

その振る舞いは久秀の目に止まった。肉親の葬式を目の前して悲しみという表情を一瞬だけしか見せなかった颯馬に興味を引かれた。気丈な男だと思ったのだ。参列している男共すら、悔やみや悲しみといった感情が顔に出ているのに、颯馬はそれらの感情を隠している。

まるで、平静という名の面を被っているようである。それも、なかなか外れる事ない面を被っている。

だからこそ、だからこそである。久秀は颯馬の心の中を暴いてみたいという、好奇心に駆られた。その面の下の素顔を晒したら、どんな顔をしているのかと、想像していた。

「松永殿……」

「ん……？ 何かしら」

久秀がそんな事で思索に耽っていると、颯馬が声を掛けた。

「式は終わりました。次は火葬です」

「え……、あ、そうね。申し訳ありません、正治殿の事を思い返しております」

久秀の周囲の者は立ち上がっており、棺に入った正治を運んでいた。つまりは、座っていたのは久秀のみ。

この場での事を考えると少し恥ずかしい様を久秀は見せた。その恥ずかしさを誤魔化すためにも久秀は正治の事を思い返していたと嘘をついた。

嘘と言っても、完全な嘘では無い。颯馬と正治を見比べく、思い返していたのは事実だ。まあ、思い返したのはほんの少しだが。

「……父上はどんな方だったのでしょうか？」

「正治殿の事ですか？」

火葬場所へと棺を運ぶ人々の後を颯馬は久秀の隣を歩きながら話しかけた。

「はい、松永殿は知っておられるようなのでお聞きしたいのですが」「そう……ですね」

澄ました表情で思索し始める久秀。その内心は少し困惑していたりする。

実のところ、久秀と正治の関係性はまったくと言っていいほど薄い。会話も、体面上のやり取りくらいである。

正治は軍師で戦で指揮を採るために度々出陣し、久秀は長慶の祐筆であり戦に出陣する事はあまり無い。

出陣するとしても、規模の小さい戦くらいである。そのため、顔を合わせる事も滅多に無い。

「耳にした話で正治殿は、なんでもできる御方でした。武においても、智においても、文化面においてもです。兵達や民からも慕われていたようですわ」

「まったく、想像もつかないな」

人から聞いた正治の能力と人柄について、久秀は語った。

颯馬はその話に対して苦い笑いで返した。

颯馬から見た父と一致しないものだったからだ。帰ってくるなり、武道の習練を強要する父だったからだ。

逃げれば習練時間の増加という罰が実施され、戦略などを習う時間が減るので嫌々ながらやった。

それも全力で。手を抜けば、木刀や鉄拳という叱咤がすぐさま飛ばしてくる熱い父だった。

「颯馬殿は正治殿から働きなどは聞かされていなかったのかしら？」
「ええ、一切も話をしてくれませんでした。『己を語るな。人は己を語る時、話を誇張し驕る事になる。驕りはいらぬ反感を買い、か

の平氏のように身を滅ぼす種となる』と言われてな」
「それは、それは、為になる言葉ですね」

なんともこの日ノ本の者によく当てはまる言葉だ。日頃から謙虚に振る舞え、さすれば人との和は保たれる——といったところだ。ことわざから抜き出すとすれば『出る杭は打たれる』が一番しっくりくる。

「しかし、謙虚になりすぎても駄目だとも言われてな。ある程度驕る事も大事だと言うものだから、結局、曖昧なんですよね」
「適度にと言うことなんでしょうね」

そうして話をしている内に火葬場所と到着する。人々は棺を置き、薪を用意し、油を掛ける。

火のついた木を持った和尚が歩み出る。

「では、皆さん。火を着けます。正治殿の安寧をお祈り下さい」

しゃがれた声で言いながら、和尚は火を棺へと近づける。
その手を颯馬が掴んだ。別れを認めたくないという感情からではない。

「和尚さん、俺にやらせてくれ。最期の別れくらい」
「ふうむ……よいじゃろ」

父の下から離れるというケジメをつけるためだ。
和尚はどうやら、颯馬の意志を汲み取ったようで、火のついた木を手渡した。

「ありがとう」

和尚から火のついた木を受け取った颯馬が意を決して棺へと歩む。
ゆっくりと歩み、火を近づける。

「しかしのう……あの悪ガキがよくここまで成長したもんだ」

和尚の発言によって颯馬はずっこけそうになった。

（何故に今そんな事を言う！？ アンタ、和尚だろ！？ 空気を読めよ……）

「そうだな……手に負えないイタズラ坊主だったもんなあ」

「まあ、その事は全部、たまに帰ってくる正治さんに報告されて罰が与えられてたもんね」

「ああ……懐かしいな。その度に颯馬君の悲鳴やら泣き声やら響いたもんなあ。ありや、気持ちがスカッとしたぜ」

「ちょっと、皆さん！」

颯馬が制止をかけようとするが、近隣の人達の颯馬の昔話は続けられる。

幼少の頃の自分はかなり調子に乗っていたとはいえ、颯馬にとってそれは恥ずかしい過去だった。

それはもう、崖から飛び降りたいほどの恥ずかしい事である。

「颯馬！ 覚えてるか？ 和尚を肥やしの落とし穴に落としたのを。おもしろかったよな。」

「この悪ガキ共が！ あの二オイをとるのにどれだけ、苦労したか知っておるのか！」

「さあ？ 知らないよ」

「三日じゃぞ！？ 三日間、二オイがとれなかった」

「二オイは三日坊主だったってか？ 坊主だけに」

「それおもしろくないわ」

颯馬とつるんでいた友もまた、昔に颯馬と共にやったイタズラ話で花を咲かせていた。

もうかなりざわついており、止めようにも止まらない。

長慶の部下達は啞然と彼らを見つめるしかなかった。それ以外の行動する事が思いつかない。

「ぷっ、ふふふ、ふっふふふ……」

その光景が久秀にとって滑稽に見えた。

啞然とする連れに、騒々しく颯馬の過去話で盛り上がる人々、彼らの口をなんとか閉じさせようと颯馬が躍起になる姿、しんみりした葬式の欠片が少しも見えない。

まるでこれは葬式ではなく、颯馬の過去話暴露会ではないか。まあ、それほどにもこの混沌とした光景は久秀の腹を苦しませてくれるのだ。

また、この光景は、颯馬は武家の者にも関わらず、庶民にからかわれるほどの間柄を持つのだということも示してくれる。

これは普通では考えられない。身分的に考えれば、庶民が正統な武家の者を馬鹿にすれば、問題になる。

正治の時からこうだったのか……。それとも、颯馬が身分の差すらも普通に超える事のできる者なのかは久秀には分からない。

だが、親しまれているという事実、揺らがない。

「静かにしなさい！」

肩を震わせながら、トメが彼らの動きを鶴の一声で完全制止する。先ほどの喧騒がまるで嘘のようだった。

「あなたが騒いでいては、正治様がいつまでたっても眠れないじゃないですか！ それに、三好長慶様の使いもいらしているんですよ。時と場所をもう少し考えなさい！ さ、颯馬様」

「あ、ああ」

トメの説教により久秀達以外の一同はやり過ぎたと反省する。もちろん、和尚も、もれなく。

「コホン——父上、こっちは相変わらざる馬鹿騒ぎしてるよ。だから、安心して天国へでもどこへでも行きな」

そう言つて、颯馬は棺に向かって火を投げ入れた。

火は油に引火し、薪へと移り、炎と化す。そして、棺が炎に包まれた。

これでもう、正治は、この世との接点が無くなり、墓で永遠に眠る、死者となる。

颯馬はその燃える様を見つめる。その颯馬の心に念仏を上げていた時の悲しみと言った負は存在しない。

本音を言えば、悲しみがあるのだろうが、それを上回る感情があった。

感謝である。育ててくれた事への、教えてくれた事への、そして、今まで生きていてくれた事に。

（ありがとな……そして、じゃあな）

この後の進行は何の騒動もなく、正治のお骨を墓に入れて無事終了した。

仕官（１）（後書き）

景「さ、今回は戦極姫とは全然の関係ない話だ」

政「関係のない話？」

景「ああ、戦極姫を作った会社が新作に三國志を舞台にした『三極姫』というADVシュミレーションゲームを売る事に、作者がな……」

政「三國志って……確か、もう他の会社が」

景「発売して、漫画化やアニメ化したほどヒットしている」

政「そこに入る余地は無いんじゃないか？」

景「無いだろうな。それに力を入れるより私達に力を入れた方が良いと思うんだがな」

政「本当に何を考えているんだ」

景「さあな、偉い人の考える事は理解ができないからな。お前のように……な」

政「小十郎、それは私を馬鹿にしているのか？」

景「……さて、また次回だ」

政「あっ！ オイ、答えろ！」

仕官（2）（前書き）

一応警告します。

エロ注意！ ゼロ魔の十二巻ほどの描写はしていないから、安全なはず……

仕官（2）

堺の夜は誰もが寝ている訳ではない。夜中にも金儲けに走る商人は大勢いる。

貨物を積んだ船は、いつも日が昇っている時に来るとは限らない。朝に来る時もあるし、夕方に来る時もある。はたまた、真夜中に来る時だってあるのだ。

しかし、どんな時間帯であろうと商人達は貿易する手を休める事はない。

前にも述べたが、堺は商人が運営している所である。誰の支配も受けないし、何らかの圧力にも屈しない独立した町だ。

何故この大名にも影響を受ける事が無いのか。それは、堺にだけしか持たない強みがあった。

強みとはあらゆる貿易物の品々ある。貿易品が堺の武器なのだ。仮にどこかの大名が堺の利益を強引に奪おうものならば、その大名の領地と貿易の取引を止める。すなわち、貿易の断絶だ。

貿易を断絶されると大名は堺から得ていた利益が無くなり困る。

故に、堺との貿易に関しては下手に出なければならぬ。

堺はそれほどまでに力があり、高い身分の相手でさえ対等、または少し上の目線から対応する。

そうして、貿易で物を実際の価値より少し高く売り、商人は懐を肥やして行く。その懐から堺の治安維持や防衛費に充てる。

兵力があり、貿易においては他国を手玉に取る事もある堺の町は、

堺国と呼ばれる。

町ではなく、国。つまり、それほどまで堺は影響力があるという事だ。

堺との繋がりを確かなものにし、更には自分の所と優先的に貿易をして貰うにはどうしたらいいか。

簡単な方法としては他の貿易相手よりも、代金を上乗せする。もしくは、密かに交渉をし、賄賂を渡す。後者の行為を行うとしたら、人目が付きにくい夜が行動に起こしやすい。おそらく、毎日のように商人は大名からの使者などらと密談をしているであろう。

その裏交渉を人知れず、現在進行している何処ぞの屋敷が一軒あった。

「――鉄砲を……ですか。しかし、あれはまだ試行錯誤中でしてね、とてもじゃないが自信を持って売れるほど完成してないですな」

白頭の老齢な男が目の前的人物に静かに語る。密談相手は扇子で口元を隠しつつ、目を細めた。

この部屋にいる二人は、鉄砲に関しての話をしていた。鉄砲は宣教師であるフランシスコ・ザビエルの来日と共に種子島に伝来した。伝え聞くところによると、鉄砲は扱いやすく中々の威力を発揮したため、大名は何とか増やせないものかと思った。

そこで伝来した一丁の鉄砲を職人に渡し、複製せよと命じ、職人は鉄砲の複製を試みた。

しかし、最初から上手く行くわけも無く、当然のように失敗した。よくあった失敗例は形は出来ていても、撃つとなると何らかの不

良で暴発する事が度々あった。

その暴発は使用者の命を奪うほどであった。されど、職人は鉄砲の複製を諦めずに改良に改良を加えて、ついには事故率の低い国内産の鉄砲を作製する事に成功した。

そうして、生産方法が確立された鉄砲は日ノ本各地に貿易などによつて知られて行つた。

知られた先でも鉄砲を自分の所で生産させようと躍起になって鉄砲の研究を日々進めている所もある。

堺も鉄砲を生産させようとしている一つであった。当然と言えば、当然であろつ。

鉄砲は武芸に優れていない農兵でも引き金を引くだけで、遠くから相手に死をもたらす事が出来る。

頭が回る戦国大名は鉄砲は戦を有利に進める事が出来ると考え、鉄砲を買い求めている。

堺の商人はその需要を当然知っており、今まで他国から鉄砲を輸入して売っていた。だが、自分等で生産出来ないかと思案するようになる。

そう考える過程は他国から買つて、大名に売つても数は少なくても、かなり利益は出る。

鉄砲を多く欲しがる者は多くいる。ならば、自分達、堺で鉄砲を生産出来れば、莫大な利益を手にする事ができる。

そう思つて、堺の商人は鉄砲の生産に手を掛けたのだ。

「本当にそうなの？ 本当は出来ていて、私達に売らないで、別の所に売っているんじゃないかしら？」

「いえいえ、本当に安全を保証できるほどに生産できておりませぬ」

密談相手の探るような言葉に老齢の男はさらりと嘘をついた。

本当は生産出来ており、安全性も高い。この堺で鉄砲は今も作製されている。

ならば何故、嘘をついたのか。金さえ払えば、物売る商人としては、おかしい。

商人は金儲けに目が無いとも評されるが、実際は異なる。

政治的な状況や他国の勢力にとても気を向けている。どこの所が政治的に強く、弱いのだとか、堺に敵意を向けていないかとかである。

それらの事を総合的にまとめて、堺に利益を与えてくれる相手に取り入る。

最新の武器である鉄砲とあらば、更に売る相手を見極めなければならぬ。

誤って政治的に力を持たない所に売ったのでは、本当に強い相手から何故こつちに売らないのかと怒りを買う事になる。

その怒りから堺に矛を向けられては大変困る。戦になったら太刀打ち出来ないとか、そう意味ではない。戦となると商売に支障が出てしまうからだ。

支障が出ると損失も出るし、何より力のある所との今までの信頼関係が土に帰ってしまう。

そんな訳で、力のある所との友好を維持するためにも、鉄砲とい

ったような価値のある物は力を持つ者に優先的に売る。

堺に近くて関係の深い勢力は三つ。紀伊国の傭兵集団の根来衆と雑賀衆。そして、宗教の中で入信者が多く、一揆で国を混乱させるほどの力を持つ一向宗の本願寺勢力だ。

この三つの勢力に現在、鉄砲は売られている。それらの勢力に十分に行き渡った後で他の勢力にも売り始める。

「ふうん、そうなの。でも、私達は鉄砲を出来るだけ早く……それも大量に必要なの。何とかならないかしら？」

「そうは言われましても生産方法を確立するのは遅れていますし……」

「そこを……何とかお願いするわ」

密談相手は音も無く、男の傍に寄る。密談相手の顔が部屋に差し込む月明かりによって、明らかになった。

二つに束ねている紫髪、ツンと尖った目つき。その正体は松永久秀であった。

「それは、無理な——」

「これなら、どうでしょうか？」

久秀は男が発言を遮って、手を男の袴の中へと滑り込ませた。そして、すぐに男に快感が走った。

「そ、そんな事されましても……」

「あら、貴方のココはやる気満々のようよ」
「うっ……」

男は久秀にギュツと握られ、男は不覚にも呻き声を上げてしまった。

そして、久秀の手は上から下へ、下から上と、上下に緩やかに急激に激しくと緩急をつける。

「——ッ、はあはあ」

「ココが……良いのかしら」

男の身体がビクンと震えだす箇所を久秀は確かめるかのように攻める。

男は何も考えられない。ただ一心に溜まっているものを早く吐き出したいという事しか頭に無かった。

今すぐに吐き出したいのにいくら刻が過ぎようと男が最高潮に達することがない。

「ふふっ、早くイキたくてとても苦しいでしょう？」

「……くッ」

久秀は手を動かす事を止め、妖艶な笑みで語り掛けるが男は肩で呼吸するだけで必死だ。

それほどまでに良いのであろう。しかし、この状態ではスッキリしない。

まだ、何も吐き出していない下腹部を放置される事は生殺しの状態だ。

「鉄砲を生産している事は掴んでいるわ。もちろん、誰に売っているのかもね。二ヶ月以内には鉄砲を五百丁欲しいのよ。最高としては千丁くらいね」

「千丁も……！」

男は久秀の無茶な要求に驚愕した。鉄砲はそんな簡単に生産出来る物ではない。

それなのに、二ヶ月以内に五百丁を生産する事は無理がある、あろうことに、千丁となればもっと無理だ。

「最低でも五百丁近く用意出来ればいいのよ。無茶な要求だけれど、その分代金は弾むわ。それに……こちらの方も今すぐに楽にしてあげる」

「うつ……」

久秀が男の下腹部を人差し指で軽くなぞった。

また一度、男の身体が震える。

男は頭の中で思考を巡らせようとするが、いかんせん、快楽を求める事でいっぱいだ。

「その要求……呑みましょう」

男は快樂に折れてしまった。正常な状態であれば、のりくらりと話をはぐらかしていただろうが、今は正常な状態ではない。であるからにして、男は自分が何を言ったのか思い返す事さえしなかった。

「それじゃあ約束通り、久秀が樂にしてあげる」

承諾の言葉を聞いた久秀の顔に黒い笑みが現れる。
なんて脆い。男というものは簡単だ。快樂が生じさせて生殺しにすれば、すぐに正氣を失う。

久秀は目の前の男を嘲笑いながら、自分の腕前を披露し始めた。
それと同時に彼らを照らしていた月は雲に隠れ、光が射すことのない時間を生み出した。

葬式を終えたその次の日。颯馬はいつもよりも早く起き上がった。
どのくらい早いというと、まだ日が出ていない時間に起きた。
頭を掻きつつ、颯馬は湯殿の方へと足を向けた。朝から湯浴みをするわけではない。少々、髪と顔を整えるためだ。

そもそも、湯浴みをするには水を焚かなければならない。水を焚

くには大量の水と薪が必要だ。

水を焚くのに時間と労力が掛かるし、薪の代金も掛かる。それに、天城の屋敷に人は颯馬とトメの二人しかいない。

だから、一週間半に一回湯浴みするくらいで、後は手ぬぐいを水で濡らして、身体の垢を落とすくらいだ。

毎日、湯浴みしている者がいるとしたら、裕福な家が、かなりのキレイ好きもしくは湯浴み好きである。

「ふう……」

桶に入った水で顔を洗った颯馬は手ぬぐいで、顔面の水滴を拭き取った。

そして、水面に映る自分の姿を見る。

自分の髪は鶏のトサカのように上へ跳ね上がっている。跳ね上がった髪を直すべく颯馬は片手で水をすくい、髪に擦りつけた。

そして、上から下へと髪向きを修正する。さすがに一度だけでは直らないので、同じ動作を何度か繰り返した。

「こんなもんか」

他の場所に寝癖がついていないか確認した颯馬は顎をさすった。

颯馬の体毛は薄い方なので、ひげはあまり生えていない。せいぜい薄く短いひげが数本生えているくらいだ。

水面を見ても目立ったひげは無いので、颯馬は剃らないで湯殿を出た。

そして、部屋に戻り衣服を整えた。

「刀は……っと、あった、あった」

颯馬は本の山に囲まれて置かれていた打刀うちがたなと脇差わきざしを引っ張り出した。

この二つは簡単に説明すると一般的な武士が腰に差す大小の刀である。

打刀うちがたなが大刀で脇差わきざしが小刀だ。

武士は基本的、外に出かける時はこの二刀を帯刀しなければいけないのだが、颯馬は全く帯刀した事が無い。

理由としては堺は治安がいいので帯刀する必要が無かったのと、単純に帯刀するのが面倒だった。

前者が三割で、残りの六割が後者の理由ではあるが……。

そんなわけで、普段から帯刀しないで、屋敷に置きっぱなしの二刀は手入れもろくにされておらず、塵を被って眠っていた。

「手入れしていないから抜けないと思ったが、大丈夫そうだ」

颯馬は塵を払った二刀を鞘から引き抜けた事に安堵の息をついた。数秒ほど眺めた後、二刀共鞘に納めて、帯刀する。

「なにやら物音がすると思えば……珍しく正装をしていらっしやいますね」

颯馬が帯刀したのと同時に障子が開いて、トメが颯馬をまじまじと見ていた。

「なに……な、頼みに行くのに正装じゃないと無礼になるからな」
「と言われますと、仕官するつもりですね」

「そうだ、今から久秀殿にその旨を伝えに言ってくる」

その事についてトメは別段驚きもしなかった。

正治が死亡した今、颯馬が仕官するだろうということは予期出来ていた。

武家の当主を継いだ者が、家を存続させるために仕官する事は当然の行動である。

「家の留守は任せて下さいね」

「ああ、任せた」

颯馬が仕官すれば、屋敷はこれからずっと当主不在になる。

当主がいない屋敷を管理するのはトメのみだが、堺は治安も高いし、戦も起こる事もあまりない。

絶対に安全だ——という根拠は無いが、颯馬は比較的安心して任せる事ができる。

そうして、颯馬は久秀らが休んでいる宿へと向かった。

日も昇らないうちに向かう。迷惑をかもしれないが、久秀達がい

つ堺を発つのか分からないので、早い時間帯に訪れる事にした。

目的の宿は事前に聞いていたので、迷いもせず到着した。

三好家の家臣とあって、宿の周辺に何名かの見張りが木箱に座っていた。

「朝早くに申し訳ない。久秀殿に会わせてくれないか？」

「んあ？ 松永殿にか？ 聞いてみねえとわかんらん。それよりどこのもんよ？」

宿の入口に座っていた見張りは、思い瞼を指で抑えながら聞いてきた。

この見張りは昨日、葬式の参列者の中にいなかった事を踏まえると、堺側が用意した警備なのだろう。

「天城一郎颯馬と申します」

「天城？ ああ、正治殿の息子さんかな」

「はい、そうです」

颯馬が姓と名の間に一郎と名乗ったのは、これが颯馬の現在の正式な名前である。

姓と名の間に入るものは通称の事を示している。

通称の例としては、生まれた順番であつたり、守護職名であつたり、官位であつたりする。

颯馬は守護職も官位も持っていないため、生まれた順番である呼称、一郎を通称とする。

この場に全く関係が無いが、尾張の織田信長の現在の正式の名前は『織田上総介信長』だ。ちなみに自称である。

「ちょっと待ってな」

見張りはそう言っただけで宿の中へと入って行った。

颯馬が外で待っていると、宿の中から見張りが久秀に呼び掛ける声が微かに聞こえてきた。

当然のように久秀はまだ、就寝中であるようだ。

颯馬は少しばかり、睡眠の邪魔をしている事を申し訳なく思った。

「松永殿がお会いになられる——との事だが……身支度に暫く時間が掛かるから、ちと待ってくれ」

「申し訳ない」

十分後に見張りが再び颯馬の所に来て、そう伝えた。

確かに久秀の姿は身支度に時間が掛かりそうだなと、颯馬は昨日の姿を思い浮かべていた。

久秀殿は幼いとはいえ、女性だ。なにかと、準備する事があるのだろう。

もしかしたら、寝癖のついた髪を直すために湯殿にいるのかもしれない。

そう考え始めると、颯馬は久秀が湯浴みする姿を想像した。

待っているのに暇だった事もあって、颯馬の想像力は最大限に稼動する。

肌白い肢体を持った久秀が髪を下ろして、湯を浴びる様子が想像できた。

更には、彼女は生えているのか生えていないのかなど、大変失礼な事を颯馬は考えていた。

男というものは皆、すけべな事を想像せずにはいられないのである。

「おい、身支度出来たつてよ」

「へ？ あ、ああ」

想像に耽っていたので、時間があつという間に過ぎ去り、久秀の身支度が整ったと告げられた。

「奥の階段を上がって、すぐ右手の部屋だ」

「右手の部屋だな？ ありがとう」

見張りはあくびをしながら、久秀の部屋を颯馬に教えた。

颯馬は見張りに礼を告げた後、暗闇の宿の中に入って行った。

急な角度の階段を一步步上って行き、右手の久秀の部屋の前に立ち尽くした。

颯馬は一息ついて、大きく鳴り響く鼓動を静める。

宿とはいえども、女性の部屋に入るのだから、緊張せずにはいられなかったのだ。

「久秀殿、よろしいでしょうか？」
『どうぞ』

襖の向こうから久秀の声が響いてくる。
了承も頂いたので、颯馬は音を立てぬように襖を開け、部屋に入る。

「朝早くから久秀に何か用かしら」
「突然の訪問に対して、お詫びを申し上げます」
「本当ね」

久秀はいかにも不機嫌そうだった。髪はまだ少し湿っているし、額にはうっすらと汗をかいていた。

また、疲労感が若干顔に出ている。
颯馬の想像通り、久秀は湯殿で髪を直し、急いで身支度を済ましたのだ。

「えと……まあ……」

久秀の発言に対して、颯馬はどう切り返せばよいか困惑した。

「で、話は何なの？」
「は、はい。話というのはですね。仕官させて頂きく——」

「仕官の話なら、こちらから伺う予定だったわ」
「はい……？」

疑問混じった颯馬の反応に久秀の眉間が少しシワが寄った。
颯馬が朝早くから来なくても、久秀が堺を発つ直前に仕官の話についてする予定だったのだ。

「昨日の内に話をしておいた方がよかったかもしれないわ……。
過ぎてしまった事はしょうがないわ。仕官の話は三好家からも誘いが来ている事ですし、決定ね」

「ありがとうございます。して……出発はいつに？」

「昼頃に発つ予定よ。それまでに荷物を整えて来て下さい」

「わかりました」

颯馬が一礼し、その場を立とうとすると、久秀は思案顔になった。

「ねえ、颯馬」

「はい、なんでしょうか？」

軽やかな声で久秀は颯馬を呼び止める。

その声に颯馬は襖に掛けた手を止めて、彼女の方へと振り向いた。

「敬語を使うのは止めて、もう少し砕けた話し方をしないかしら」
「何故でございますか？」

「久秀はあなたと友好的関係を築いて行きたいの。だからね、そんな堅い口調は止めて欲しいの」
「了承し——いや、わかった」

颯馬は彼女の微笑みにドキリとしながら、申し出を受け入れた。
特に深く考えずに……。

ここに颯馬と久秀の友好関係が結ばれたが、どのような事を引き起こすのかは、誰もわからない。

ともあれ、颯馬は三好家への仕官が決定した。決定したと言っても、仮決定である。

正式に仕官を成立するのは三好家当主の長慶に謁見して、任命されてからとなる。

久秀は荷物を取りに行った颯馬の姿を見送った後、口元をニヤリと歪ませた。

「有望な駒が手に入ったわね……」

誰にも聞こえないほどの大きさで、久秀はポツリと呟いたのである。

仕官（2）（後書き）

政「小十郎！ 戦極姫2が延期になったぞ！」

景「やはりな……」

政「やはりなつて……驚かないのか？」

景「梵天丸、あの会社が発売日を延期にするのはいつもの事だ。作者なんて延期になった事を驚いてはいないが、悩みを抱え始めた」

政「意味が分からないぞ、それ」

景「私も悩みの内容までは分からないが、こう呟いていたぞ。『狩りと戦国を同時に堪能するにはどうすれば良いんだ？』とな」

政「狩り？ 鷹狩りの事か？」

景「さあ？ 私にも分からない」

仕官（3）

山城国勝竜寺城。

この城は山の上に建てられた堅固な城で、山城国の防衛において重要な拠点だ。江口の合戦以前は山城国官領である細川晴元の支配下にあった。

だが、現在勝竜寺城に居るのは三好長慶の軍だ。三好家は堅固な勝竜寺城を無血開城させていた。

晴元方の城が矛を交えず、無血開城された経緯は長慶方の兵が大軍になっていたからであった。

その数、およそ三万。

江口の合戦で長慶方が三好政長を討ち取り、晴元が將軍を引き連れて逃げたというのが周辺に知られると、長慶方に志願兵が殺到したのだ。

そうして、兵が三万に膨れ上がると、山崎に布陣していた六角家の一万の近江軍は、戦をするのは不利だと判断し、兵を退いた。

近江軍を指揮していた六角義賢は部屋の四隅に目が届く自分の部屋に帰れると、頬を綻ばせながら退却していたそうだ。

とまあ、三万に膨れ上がった長慶の兵は山城国の勝竜寺城を包囲した。晴元側の城主の兵力は二千だけだったので、三万の大軍を目の前にして呆気なく降伏し、長慶の軍門を降った。

「山城国へ足掛かりは成功ですな、姉上」
「……ん」

評議の間で長慶は弟の一存の言葉にコクリと頷いた。順調に勝ちを重ねて来た事もあってか、一存は興奮が収まっていなかった。

「このまま一気に京から晴元側を追い出そうぞ」
「ふう、皮算用ばかりばかりだ。一存は楽天的過ぎるから困るよね」

小馬鹿にするような声で、一存の一つ上の姉である冬康は言った。派手さは無いが、清楚な着物を着て優雅に茶を飲む冬康に対して、一存は黙っていられない。

「お前のように後ろ向きで物事を考えるよりは、よっぽど良いわ！」
「でかい声で叫ばないでよ。敵を目にすれば直ぐに突っ込みたがる脳筋老け顔」
「なんじゃと！ この消極的なまな板が！」

売り言葉に買い言葉、お互いに相手の胸を突き刺す言葉を浴びさせる。

どちらも退かず、口撃の手を休ませない。二人の喧嘩は白熱し、部屋の外にまではつきりと聞こえるほど、声が大きくなっていった。

「アンタみたいな奴と結びついた義妹が可哀想だわ！」

「可哀想じゃと？ 思い込みも甚だしい」

「お二方、喧嘩は止めて下さい。城内にいらぬ噂が広まってしまいます」

喧嘩をする二人の間に、長慶達の叔父である三好康長が仲裁に入った。

康長は昔から長慶達の兄弟姉妹喧嘩にいつも仲裁に入っている。特に喧嘩の仲裁に入る事が多いのが、冬康と一存の喧嘩だ。

喧嘩の仲裁に入るのはとても体力も使うし、ストレスも貯まる。そのせいか、康長の髪は日々に抜けていき、薄くなっていた。

髪を犠牲にして喧嘩を仲裁してきた康長であつたが、この日の喧嘩は中々収める事ができない。いつも以上に激しい喧嘩だ。

自分では収める事ができないと判断し、長慶に助けを求めようと視線を送る。

「……………ふう」

だが、康長の思いは届かない。長慶は茶を飲んで一息ついて二人の喧嘩を見ているだけで、止める素振りを見せなかった。

昔から長慶はこんな具合だ。兄弟姉妹の喧嘩を積極的に止めようという働きはせずに、今のよう黙って見守るだけだった。

長慶は基本的に寡黙で感情の起伏が薄い。そのため、家臣や兵達からは、長慶が何を考えているのか理解できないため、報告や言葉

を交わす時には内心でビクついている。

ただし、長慶の弟と妹はそのことについては慣れているようで、あまり気にせずに会話している。

叔父の康長はどうかと言えば、慣れてはいるが感情を読み取れないというのは、非常にやり取りしづらかった。

長慶の復讐相手である政長との戦の時には、怒りや恨みといったものが微かながら滲み出ていたので、感情をなんとか読み取れていた。

しかし、政長を討ち、復讐を終えると、毒が抜けたように感情の起伏が薄くなり、何を考えているのかが分からなくなった。

天城正治が戦死した時でも、一存や冬康は涙したにも関わらず、長慶はいつも通りであった。康長は彼女の態度に対して、悲しく無いか？ という疑問を投げ掛けたかったが、どうにも口から出せずに問う事は出来なかった。

「屋敷じゃあ、鈴虫を愛でる変人め！」

「アンタの髪型、兵達の間で流行っているそうだけど、気味が悪いのよ！」

「あ、あのよろしいでしょうか？」

二人の喧嘩の最中にこの城の小姓であったものが恐る恐ると入ってきた。

汗はダラダラ、目は伏し目がちだ。悪い報告だからこの挙動なのでは無い。喧嘩の最中に至急の報告をしないといけないからだ。

もしかしたら、自分が喧嘩に巻き込まれるのではと思っていたので、この小姓は別の小姓を集めて、誰が報告に行くか虫拳で決めようじゃないかと提案した。

虫拳とは三すくみの拳遊びである。人差し指は蛇、親指は蛙、小指はナメクジだ。

蛇は蛙に強く、蛙はナメクジに強く、ナメクジは蛇に強い。ナメクジが蛇に強いというのに疑問を持つかもしれないが、ナメクジの身体の粘液で蛇を溶かしてしまうから、蛇はナメクジを恐れていると言えられている。

その虫拳で負けた者が報告に行く決めて、虫拳をしたわけだ。結果は言い出しっぺであるこの小姓が負けてしまった。

ついていないとばやきながら、喧嘩の起こっている間へと報告をしに来た。

「……………」

小姓は長慶の方へ顔を向けると彼女は一回だけ手招きした。こつちに来いと言っているようだったので、小姓は腰を低くしながら部屋の隅を通り、長慶の前に到着する。

「報告は何？」

長慶は簡潔に小姓に聞いた。小姓は喧嘩をしている二人と仲裁している者を背景に、報告を述べ始める。

「長慶様の右筆と名乗る松永久秀という者が、十五人余りの兵を引

き連れて来ておりまして、入城したいと言っておられるのですが、よろしいでしょうか？」

「問題ない。久秀をこの部屋に連れて来て」

「後、兵以外に天城颯馬という者もおるのですが、その者は如何しましょう？」

天城——という姓が小姓の口から出ると、長慶の眉が少し動いた気がした。

そして、少しの間が空く。その間は小姓にとって、ひどく長く感じられた。

小姓は自分が何か不味い事を言ってしまったのかと、不安になり緊張が高まる。

「天城……颯馬……か、その者もここへ」

「は、はい……かしこまりました」

そして、ようやく長慶の発した言葉に小姓は胸の内で安堵の息をついた。

緊張で小刻みに震える足取りで、主からの拝命を実行に移すべくこの間から退席した。

「冬康、一存」

激しく口論が飛び交っているこの場では、耳を傾けないと聞こえないくらいの大きさで、長慶は二人の名を呼んだ。

二人は長慶の声に気づかず、喧嘩を続けると思いきや――

「何ですか姉上！」

「なんでしょう姉様！」

刹那の内に喧嘩を止めて、長慶の声に反応した。康長は長慶の声など聞こえず、二人の反応にその場で困惑した。

だが、すぐにまたかと思った。この二人の喧嘩中に極々稀だが、長慶が止めるつもりは無くても呼び掛ける事がある。

二人は康長の仲裁の声は容易く無視するのに、康長が聞こえない長慶の声にはすぐに反応する。この二人、二つの耳とは別に長慶用の三つ目の耳をどこかに持っているじゃないかと、康長は思っていた。

「久秀と天城の子がここに来る。だから喧嘩はおしまい」

「ぬう……しかし、この阿呆が突っ掛かって来て……」

「何言ってるの？ 私は突っ掛かってなんかいない。事実を言ったまでよ」

長慶の前で互いに保身のために弁解をし始める。それでまた、喧嘩が始まりそうな雰囲気が出てきた。

「おしまい……」

「わかった」

「はい」

確認するような長慶の二度目の勧告に二人は従った。互いに一度睨み付け、自分が先ほどこまでに座っていた場所に戻った。

康長もまた、仲裁をした事によってハゲ散らかった髪を整えて、座った。

「長慶様、お二方を連れて参りました」

襖の向こうから小姓の声が聞こえると襖が開き、長慶らの視線が開いた襖に集中した。

清まし顔の久秀に続いて神妙な表情をした颯馬が入室した。二人が入室すると襖が音も無く閉められた。

「命を何事も無く遂行でき、颯馬殿を連れて参りました」

中央に二人は座し、久秀が任務報告をする。長慶は久秀の方を向いて聞いていたが、康長、一存、冬康は颯馬の姿をチラチラと見ていた。

康長はこれが正治の息子かと、一存はひよろひよろした男だなと、冬康はキタキター！ いい男！ と、各々そんな事を考えながら颯馬を見ていた。

「うん、ご苦労さま、久秀。天城颯馬、三好家に仕えるので間違いない？」

長慶は久秀に対して労いの言葉を送り、颯馬の方に顔を向けて仕官の意思を問う。

颯馬は狼狽えながら、平伏する。

「はい、私——天城一郎颯馬は三好家に軍師として仕官をきぼっ…」

颯馬は言葉の途中で盛大に舌を噛んだ。どうにも、こういった場に慣れていないようだ。

つかの間の閑寂が起こった。

「ぶわっはっはっはっはっ！」

「あははははは！ 緊張して噛むなんて、可愛いじゃない」

笑いが沸き上がり、颯馬は赤面した。なんたる失態だろうか？ 意識しながら喋っていたのに噛んでしまうとは。

横目で隣の久秀を見ると彼女は声には出していないが、身体は何かを我慢するように揺れていた。

「申し訳ございません。このような場には慣れていないもので」「気にしなくていい。仕方ない事。冬康、一存、笑いを止める」「はっはっはっ……すまぬ、颯馬よ」「クスクス、最高よ、颯馬」

笑いが静かになって行く中、颯馬は落ち着きを取り戻す。二度目は噛まないようにと注意を頭に刻む。

「私は三好家に仕官を希望します」

「確認した。今日から三好のために働いてもらう。頭を上げていい」

「はい、失礼して」

颯馬は平伏した頭を上げて、長慶を見据える。第一印象は人形みtainな表情に胸がでかい。

主君となった者に対して、胸がでかいだなんて思う事は不埒かもしれないが、本当にでかいんだから仕方あるまい。

「では皆さま、今日からよろしくお願いします」

長慶の姿を上から下へと見据えた後に颯馬は、周りをぐるっと見回した。

そして一礼と共にこれから、長い付き合いになるであろう彼らに挨拶をした。

「存分に働いてもらいますぞ、颯馬殿。私は長慶達の叔父の三好康長と申します。叔父と言っても、彼らほどの優れた能力は備わっておりませんがな」

やや自傷気味に康長は渴いた笑いを見せながら発した。彼は自分には能力が無いと言うが、それは無い。

戦であれ政治であれ、長慶達ほどではないが普通にこなす。ただ、こなした結果が素晴らしいでもなく、かといって全く駄目だということでも無い。

何もかも普通なのだ。せめての特長と言えば、薄ハゲだろうか。うん、それくらいしかない。

「第三子の安宅冬康です。姉さま以外の粗暴な兄弟と違って、少々茶を嗜んでいます。よろしかったら一度私の屋敷で——」

「止めとけ、コイツの屋敷には鈴虫が沸いている。付き合わん方がいいぞ」

「邪魔しないでよ！ 馬鹿！」

冬康は颯馬に茶の誘いをしようとした所で、一存が遮るように茶々を入れたのに対して、反射的に本性を表に出してしまった。

まずい、彼に悪い印象を植えつけてしまった。冬康はそう思い、一存への怒りを我慢する。

好感を持てるような笑顔で颯馬に微笑みかけて——

「弟が言った事は嘘ですので、お気になさらず私の屋敷に——」

「わしは末子の十河一存だ。戦場の働きから鬼十河と呼ばれている。これからよろしくな、颯馬」

再び冬康は一存に遮られて、不機嫌になり眉を寄せた。人の恋路

を邪魔する奴は馬に蹴られて地獄に落ちるべきだ。

言葉には出さないが心の内で一存に向かって、呪いを掛けた。だが本当に馬に蹴られると本気で願っているわけではない。

嫌いであっても一応は血の繋がった弟だ。

間違っても死んで欲しいなどと願う事は無い。ただ、少しだけ腹を下すとかで苦しめばいいのにと、願う事はあるが。

「よろしくお願いします、十河殿」

「うむ。そうじゃ、後でわしと鍛錬せんか？」

「……………遠慮させてもらいます」

苦笑いしながら颯馬は一存の鍛錬の誘いをやんわりと断るが、不意に一存の目が光る。

「軍師と言えども戦には兵を率いてもらう事があるからな。殺されないように鍛錬は必要だろう？ の、姉上」

「ん…………一存の意見は正しい。颯馬は鍛錬をすべき」

「ということだ」

一存は自信満々な笑みを浮かべた。その笑みは主君の言葉には逆らえまいというような感じである。

こうなると、もう否応なしに受け入れるしかあるまい。断れば主君の言葉を聞き入れない家臣と判断される。

「……………わかりました」

「鍛錬の日はわしが直々に稽古をつけてやるからな。覚悟しておけ」

颯馬の表情は平坦であつたが、内心では言葉に表せないほどに苛まれていた。一存の楽しそうな笑みを見れば、かなり厳しい鍛錬になりそうだと予想ができるからだ。

出ることならば、一存との鍛錬は放棄したい。したいが、主君の意見もあるし自分自身も戦場であつさりと死にたくはない。となれば鍛錬に付き合うしかなさそうだ。

颯馬はいろいろと考えた末にそう結論を出した。

「では……山城国制圧に向けて話し合いますかな」

「それなら久秀はこれで失礼致します」

康長が山城国制圧の話を切り出すと、久秀は一礼しこの場から退出しようとする。

「久秀もいていい。山城国制圧に必要」

「了解しました」

三好の姓をもつ三人は右筆の久秀を評議に加える事を不思議に思つたが、長慶に何か考えがあるようなので特に口を出したりはしなかった。

そうして、山城国制圧に向けての評議が始まる。

仕官（3）（後書き）

景「三好は山城制圧に手を掛けたか……。我らも早く米沢を奪還して奥羽を治めたいものだなあ、梵天丸」

政「うるさいな、言われなくてもわかっている。いつかは天下を取りたいと思っているんだ」

景「ほう……なら、山城国を制圧が重要である理由はなんだ？」

政「愚問だな。山城国は禁裏や室町御所が存在する。それらは日ノ本のもつとも重要な政行まつりごとわれる場所だ。だからこそ山城国を支配下におき、室町幕府の政の主導権を握れば天下人になれる——だったよな」

景「そう、全ての国を支配下におかなくてもだ。三好はどう動くかな？」

政「今の私達には関係無いな。小十郎、出陣するぞ」

景「わかった。兵をまとめてこよう」

幕府掌握（１）

京の町はかなりの混乱状態に陥っていた。將軍と管領細川晴元の逃亡に三好家の侵攻、これらの事はしつかりと京の人々の耳に入っていた。

人々の目には細川家と三好家の対立というのがはっきりと見えていた。郊外に行けば細川晴元側の兵が布陣している。話に聞けば、京のあちこちに兵が布陣されているらしい。

また京が血に濡れて死体が溢れるのか……。人々は起こるであろう結末を脳裏に浮かばせ、顔を暗くした。

京の町は過去に大規模な戦乱に巻き込まれている。室町幕府が設立される前には南朝と北朝に朝廷が二つに分かれ、京の支配権を争った南北朝の乱。そして、戦乱の世を生み出す原因となった足利家の將軍争いから勃発した応仁の乱。

南北朝の乱は親から子へと語り継がれ、応仁の乱は命からがらに生き残った人々の記憶に強く刻まれている。

応仁の乱は京を舞台に戦を起こした町は荒らされ、死体が道端に放置され、帝が住む禁裏は殆ど燃え崩れてしまった。かつてのきらびやかな京は足利家の醜い將軍争いで荒廃したのだ。

更には食う物も無くなっていき、乞食が増えた。だけれども誰も乞食に食べ物を恵む者などいない。当たり前だ、自分もろくに食えないのに他人に恵むわけない。他人の命より自分の命だ。

人々は呟くのだ。地獄じゃ……地獄じゃ……生き地獄じゃ……と。死んだ方がマシかもしれないが死にたくない。悪いとは感じつつも生きるために悪に手を染める者もいた。

現世は苦しいが来世ではそんな思いをせずに幸せになりたい、と仏教——一向宗（浄土真宗）や法華宗（日蓮宗）の教えにすがる者もいた。

どちらかを選択した人も別の選択をした人も、応仁の乱が終結すると応仁の乱が集結して訪れた平穏に皆が喜んだ。そして、荒廃した京を再び蘇らせようと力を合わせて、少しばかりだが復興を遂げ戦が起きない日々を送った。

その平穏が再び破られようとするものだから、金を持つ者は京から逃げ出した。しかし、金もなにも持たぬ者はどこにも逃げる事ができない。

人々は閻魔様の裁きに掛けられる列を並んでいるようなものである。並んでいる彼らにできる事は何か？

彼らにできる事は一つだけ。裁きを受ける時を怯えて待つことだ。そして、どのような結果になろうと、ただ受け入れるだけである。

京に遠くから野太い一定した音が風に乗って聞こえて来た。その音に続いて人の掛け声のようなものも聞こえた。

どうやら、人々は閻魔様の裁きを受ける出番になったらしい。

京から離れた所で三好家の旗が蠢いていた。三好家は京の町を指して進軍する。その兵の数は京の町を守るために布陣している晴元方の兵を余裕で越えている。

三好家の兵は四つの部隊に分けられ、それぞれ制圧する場所を決められていた。一存は右京の西院小泉城を、康長と久秀は左京の將軍家の居城である二条城の制圧を任せられた。

颯馬は長慶の補佐と遊撃の任についた。冬康は勝竜寺城でのんびりと警戒に当たっている。始めは久秀が勝竜寺城で警戒に当たる予定であった。

だが、戦を好まない冬康が久秀との任の交代を申し出たため、このような役割配分となった。

「第一陣の十河殿が相手を蹴散らし……いや、まずは康長殿の弓兵部隊で戦力を削ってからか……？」

進軍する最中で颯馬は馬に乗りながら京の防衛部隊との野外戦の進め方を考えていた。目の前に戦戯盤があるかのように想像の駒を動かしていく。

偵察兵の情報からは京の晴元方の兵は殆ど野外に布陣しており、兵数は二千人ほどである。

兵数が少ないのは晴元方が未だ態勢を立て直してないのだろう。この好機を狙って山城国を制圧し地盤を整えれば、三好家の勢力は更に強化される。

まずは政の中心である京の支配を必ず成功しなければならない。
まあ、兵の数を見比べれば晴元方が負けを見るのは明らかだ。
しかし、万が一というのがあるので颯馬はあらゆる可能性を想定
して対策を考えておくのだ。

「颯馬、緊張してる？」

颯馬と同じく馬に乗って移動する長慶が前を見据えたまま声を掛けた。颯馬は思考を止めて主君の質問に今感じている事をありのままに答える。

「ええ、まあ多少の緊張と恐怖感がありますね。」

これから向かう場所には命の駆け引きを行う戦場だ。戦場では一瞬でも迷いを見せれば死が襲ってくる。死にたくなければ殺られる前に相手を殺るしかない。

しかし、相手を殺すという行為が一番難しいのである。何故なら相手も死に物狂い気持ちで殺しに掛かってくるし、人を殺すという行為に人は躊躇いを持ったり恐れのいたりするのだ。

であるからして、戦場では人を殺すという行為を割り切る事が出来る者、力の強い者が生き残れる。

——俺は……人を殺せるだろうか……。

颯馬は人を殺す事を割り切れるかどうか不安に感じる。今は名も分からぬ人を殺す事ができると思っているが、いざ戦となった時に躊躇いが絶対に生まれないかと問われれば、分からないと答える。

躊躇いが生まれるかどうかはその時にならないと分からないのだ。

「そう」

長慶は小さく頷いた。

「その感情は当たり前のこと。私も戦の前にも、戦の中でもいつも感じている」

「長慶様がですか……？」

晴元に三好家の領土を奪われ、阿波でほぼ軟禁状態にあった彼女がある日、細川家のために仕えて各地を転戦し続けた。

父である三好元長の領土を取り戻すために休みもせずに数え切れないほどの戦場に出陣し、勝利を納めてきているのだ。

だからこそ颯馬は戦に慣れているので、自分が抱くような心情は持っていないのでは無いかと思った。

「力を持っていたとしても私は只の人。致命的な傷を負えば死ぬ。だから戦場でうまく立ち回れるか不安に思う」

長慶も人の子。人である以上は怪我也するし致命傷を受ければ死

にもする。だから、死を恐れるという感情を当然持っている。

死とは恐ろしく、そして公平なものだ。権力を持つ者であるうと貧民であるうと関係無い。死は世を生きるもの全てに平等に降り注ぐ。

「……なるほど。少し私は誤解していたようです」

「何を？」

「う、それはあの、非常に言いにくい事でして……。今まで思い込んでいた事なんです……」

颯馬は狼狽しながらしどろもどろに反応した。今まで思い込んでいた事というのは颯馬が堺で耳にした長慶の動きから思った事だ。

この思い込みの事は口に出すと長慶に対して不敬に当たるかもしれないものだ。できれば言わずに済むようにと、なんとか誤魔化そうとする。

「問題無い。颯馬の思い込んでいた内容に関して処罰はしない」

「む、無理無理！ 言う事は出来ません！」

必死に手を横に振りながら言えないと主張する颯馬の方を長慶は向いた。

しばらくの間、長慶はだんまりと颯馬を見る。全てを見透かすような視線に颯馬は更に狼狽する。

無言の圧力というものであるうか。そういうものがジリジリと向けられていた。

「その思い込みとは何？」

再び、長慶は颯馬に問う。口に出してよいのか颯馬には分からない。素直に言うべきか？ それとも沈黙を押し通すべきか？
どちらを選ぶかと汗を流しながら迷い、結論を出した。

「本当にいいんですか？」

念には念をと確認を取ると長慶は小動物のようにコクリと頷いた。

「怒ったりしないですね？」

まだそれでも不安なため颯馬は更に念を入れて聞くと、長慶はまたコクリと頷いた。

颯馬は息を深く吸い込んで吐く。なんだか戦の事よりこっちの方が緊張してきたのだ。主君にも発言を許可された事だし、もう腹をくくって言うしかあるまい。

「堺で長慶様の働きを聞いてですね……」
「……うん」

声が震える。声だけじゃない。馬の手綱を握る手も颯馬の気づか

ぬ間に震えていた。

出だしを言った後に中々言葉が続かない。颯馬はもう一度深呼吸をした。

「戦の出陣の話ばかりが多かったので、長慶様という人は戦好きなんだな——と思っていたわけです」

「……………そう」

彼女の表情はいつもと変わらないが、馬の歩みが早くなった。怒っているのかは分からないが、多分怒りを感じているのかもしれない。

これには慌てて颯馬も馬の歩み早めて、長慶の後を追う。

「いや、これはただの思い込みだって！ 今はそんな事は思っていない」

「怒っていない」

弁解する颯馬に対して長慶は顔も向けずに一言言った。その言葉に安堵の息を颯馬が吐く。

だが、長慶の口はまだ少し開いていた。

「ただ、少し癪に障っただけ」

「怒っているじゃないですか！」

「怒っていない」

「だから——「怒っていない」申し訳ございませんでした」

珍しく力の入った声で否定されると颯馬は思わず謝ってしまった。その謝った速さは刹那であった。

しっかりと彼には主君と家臣という意識が頭にあるようだ。熱くなる少し言葉使いが素に戻るようだが、徐々に直して行くだろう。

「……と、いうのは冗談」

「は？ えと……待って下さい」

いったいどの言葉が冗談に当たるのかを考え始めた。先ほどの会話が長慶にとって冗談で恐らく「怒っていない」というのが冗談に当てはまるのだろう。

颯馬もそこまでは理解した。だが、深く考え過ぎて頭を悩ましていた。「怒っていない」が冗談——つまり嘘。という事は怒っているのでは？ と。

「うーん……ん？ 法螺の音……という事は」

京への進軍方向から法螺貝の野太い音が響き渡って来た。今の状況でこの音が鳴り響く理由は一つだ。三好方と晴元方の互いが視認できる距離になり、合戦を始めたという事。

現に法螺貝の音が響いた後から人の雄叫びらしくものも聞こえて来た。

「やはり、防衛部隊を置いていたか」

「晴元は権力にとっても固執する人。その事を考えれば当然」

「その権力を三好が手に入れたら今度はこちらが権力を失わないように守るわけですね」

「……颯馬、気が早い」

「すみません」

戦は始まったばかりだというのに既に先の事を考えている颯馬を長慶がたしなめた。今は目の前の戦に集中しないといけないのだ。余計な事を考えているとすぐにあの世行きだ。

たしなめられた颯馬はすぐに気持ちを切り替えて、戦に臨む事だけを考え背中に提げておいた弓を手に持つ。

「一存が戦っている前線へと向かう。付いてきて」

「承りました」

「全軍急げ！」

長慶の一声によって千五百の兵の歩みが速くなった。進む事数分、戦場はすぐに見えた。

兵の気合いの入った声と共に長槍や刀で殺しあう光景があった。

戦況は三好方が完全に押していた。今ぶつかっている敵の兵の数は約八百、三好方の一番槍の一存の兵の数は二千。その後続く康長と久秀の兵を合わせれば五千に上る。

「……圧倒的だ」

一存の部隊の活躍を見とれながら颯馬はそう呟いた。一存の部隊は精強だった。決して止まらずに目前の敵を撃破していく。

彼らの部隊だけで晴元方の兵の相手は充分すぎる。そのせいか後ろの康長と久秀の兵の出番が無い。

まさに一存無双。

合戦をしている一存の部隊向けて、双方から晴元方の兵が進んでいた。後方の兵達には視認していたが一存の部隊は前方の敵しか見えていないようで気がついていない。数は少ないがこのまま行くと一存の部隊に損害が出る。

「長慶様、双方のどちらかを康長殿に任せて片方を討ちに行きますか？」

「うん」

「伝令兵、康長殿に左の部隊を相手するよう伝えよ」

「はっ、承りました！」

伝令兵は命令を受け取ると馬に乗り、駆けていった。これで左の敵部隊は康長の部隊が相手するだろう。

さて、右の敵部隊は長慶達が相手をするが部隊内の編成としては、前衛が長慶の率いる長槍が主な千人の兵。後衛が颯馬が率いる五百の弓兵だ。

「矢を射て！」

長慶達の部隊と敵部隊の距離が近づくと、颯馬は攻撃命令を出した。命令を受けた兵士は弓を引いて、矢を敵部隊の方斜め上の方向へ放った。弓兵の一斉攻撃には颯馬も加わった。馬に乗ったまま弓を引き絞り、射ち放つ。

一斉に放った矢は山なりに飛んで行き、敵部隊に矢が雨のように降り注いだ。矢はそのまま地面に突き刺さったりあるいは敵兵の鎧に弾かれたり、肌の部分に命中したりした。

運悪く肌の部分に命中した敵兵は刺さった痛みに対応し、歩みを止めてしまう。これこそが弓兵部隊の目的である。当たるか当たらないかは二の次で一番の目的は敵部隊の統率を乱し、弱体化する事である。

「射ち続ける！」

二本目、三本目と弓を引き続ける。だが、相手も負けてはいられないと言わんばかりに矢を放って来た。飛んでくる矢の数は颯馬の部隊が放った数と比べると少ないが、運悪く受ける兵が出る。

「そろそろいいだろう。手を止める！ 突撃部隊が交戦する」

長慶の部隊が敵部隊に急接近する直前に弓兵部隊へ攻撃中止の命

令が渡ると、兵達は弓を引く手を止めた。弓を引く手を止めた理由は味方が敵と接近戦をしている時に矢を放つと、味方に矢が突き刺さる可能性が発生する。

だから、味方が敵と接近戦が始まりそうな頃合いを見て攻撃中止の命を下したのだ。

矢が放たれなくなると長慶の部隊が斬り込んだ。矢が途切れた後に斬り込んだ時間の差はほとんど無かった。敵兵は飛んで来る矢に向けていた注意を長慶の部隊に移そうとする隙を突かれて、撃破されていった。

「……………」

颯馬は長慶の部隊が敵兵を撃破する様子を見ながら固唾を飲み込んだ。

——これが戦場。これが殺しあい。流れる血に出来上がる死体。

颯馬は先ほど自分も矢を放った事を思い返す。自分の放った矢の何矢か敵兵に突き刺さり、敵兵は痛みに苦しんでいた。無論、矢に刺さってすぐに死に至る

訳ではないが、長慶の部隊が敵兵を殺しやすくなった。

自らが直接命を奪ってはいないが、彼らが死ぬ原因を作りだしたのだから人を殺したのと変わり無い。

そう認識するが恐怖や抵抗感があまり沸き上がらない。今の颯馬の中の高揚感が恐怖などを塗りつぶしていたからだった。

もう無理だと悟ったのか敵兵が徐々に下がって行く。この郊外戦は三好家が勝利したが、これで終わりでは無い。

三好家の目的は京の制圧だ。この戦はおまけみたいなものだ。

「よし、これから京に入るが決して略奪、乱暴といったような狼藉をするな。もし、敵兵を見つけたら追い払うか捕らえよ」

颯馬は一存や長慶の兵らが足並みを揃えて京に入って行くのを見て、率いる兵に注意をする。兵らは頷く者もいれば、残念そうな表情を浮かべる者もいた。

この反応では少々不安が残る。京で民などに乱暴など働いてしまわれると反感を買い、三好家としては支配しにくくなる。

そうなる事は絶対に避けるため命令はきちんと言い聞かせるようにと、長慶は言い渡されていた。ならば……少し言葉を付けたそう。

「この命に背く者は例外無く処罰する」

この言葉を聞いた兵らはすぐに承諾の応答をした。京で略奪でもする気だった一部の兵達はそんな気持ちなど消え去ってしまった。

浮かれていた表情は固いものとなり、キビキビと足並みを揃えた。彼らの様子を颯馬は見渡し、これなら大丈夫だと安心した。

「では、京へ入るぞ」

号令を掛けると颯馬の部隊はゆっくりと京へと入って行った。

幕府掌握（１）（後書き）

景「さて、今日は……っと」

政「紙……？」

『祝！！ 戦極姫２！！ 今睡眠を削ってプレイしています！』

景「ああ……そうだったな。つい忘れていた」

政「私もだ。しかし、前に狩りに行くかどうかとか行って無かったか？」

『狩りの方は頑張つてある程度進んだから、戦極姫に手を出しました。いやゝテストが近いというのに狩りまくった甲斐があったね』

景「ダメ人間だな」

政「同感だ」

『何とでも言うが良いさ』

景「まあ、狩りまくっていた事はそこらへんに捨てて置いてだ。最初のルートは我らを選んでくれたのだろっな？」

『……………ウン』

政「動揺が現れてるぞ。お前、本当に我らを選んだのか？ 斬られ

たくなかったら素直に吐け。」

『アハハっ……伊達を選ぶと周りの国の城が堅いもん。それになんか、百合百合な感じがするのでパスして武田にしました。もう終わったんですけど、シナリオ一新という事もあって満足しました』

政「よし、素直に吐いた褒美として苦しまず殺してやろう」

『ちよっ！？ 結局、斬られるんですか！？』

景「作者……」

『はい……？』

景「死ね」

『わー、有難い言葉ありがとうございます。ってなるかつ！わー
ったよ、次は伊達をやりますってば』

政「ふん、いいだろう。許してやる」

『あざーす。そういえばそうそう、景綱さん』

景「なんだ？」

『雀極姫で行き遅れに気にしているんですってねwww あ、OP
でバニー姿にもなっていましたねwww』

景「——ッ、さくくしゃく」

『ハハハッ、中々……可愛——うわっやめ何をすry』

幕府掌握（2）

京に三好家が統率した兵を率いれて入って来ると人々は一人残らず家の中に閉じこもった。

何をされるか分からないという警戒心と恐怖心からだ。そのせいで京は人がいないのではないか？ というほど静かであった。

静けさの中で先ほど敗残した晴元方の兵の一部は、京の中に逃げ込みやり過ごそうと考えていた。

しかし……今の京は、どこもかしこも三好の兵が彼らを捕らえるためにうろついている。一体、どこにやり過ごせる場所があると言うのだろうか。

民の家に匿ってもらおうにも戸は固く閉ざされており、呼び掛けても何の反応も返ってこない。ならば、左京と右京にある城に籠城しよう。三好の兵の目をすり抜けて赴いてみたが、既に三好の手によって制圧されていた。

敗残兵は袋小路に追い詰められた鼠になってしまった。どんな行動を起こそうにも猫に襲われる。

何をやっても無駄だと思いつ始めると自暴自棄になり、三好の兵に突撃するが全て切り伏せられた。

この事が敗残兵を恐慌状態にさせて、三好に降伏しても殺されると思ひ込ませ更に暴走させていく。

何やってもいい。自分の欲望を満たせ。

他人の事など知るか、どうせ最後には三好の手に掛かって死ぬのだからと、頭に刻まれた。

一人、二人、敗残兵らが暴走していく。仲間もやっているのだから自分も……という具合で感染していった。

——略奪、暴行、殺人、破壊、というような乱暴狼藉を京の民に行い始めた。

もちろん、この事は騒ぎになるので、三好の兵にとってはどこに敗残兵がいるのか見つけやすくなっただけでなく、京の民の感情が良い方へ傾いた。

乱暴狼藉を行う晴元方の兵から守ってくれるのは三好の兵だ。

民の目には脅威から守ってくれる良い大名家、細川よりも三好の方が規律が守れていると、映った。

敗残兵の行為によって目的がどうであれ、民を味方につけた三好家が京を支配する正当性が強くなった。

そうになると、民からどこに晴元方の兵が乱暴狼藉働いているかなどの密告が多くなり、京の敗残兵の駆逐がより一層進んだ。

己の行為によって首を絞めた敗残兵は乱暴狼藉を止めると思えば、逆に悪化させることに加速する。

金品、女、金品、女、金品、女、女だあ。

ある敗残兵の一人がそう思いながら三好の兵の目をすり抜けて、

後ろ姿の少女を見つけた。

紫の派手な着物だ。どこぞの公家の者だろうか。

しかし、公家の者であるなら尚更、今の状況で京を歩くはずがない。いや、公家であろうとなかろうと、戦の延長戦の真っ只中にある京で出歩く馬鹿はいない。

だが、敗残兵にはそんなことなど、どうでもよい。目の前に女がいる。その事実だけで充分だ。

「いひひひ……」

敗残兵は下劣な笑いを小さく発する。これから女をねじ伏せ、犯すと思うと自然に笑いが出ていた。

気付かれてはいけないと口を閉じて、物音を立てぬよう女との距離を縮め、髪を掴んで引き寄せようと手を伸ばす。

「これで、二十四人目ね」

女が敗残兵に聞かせるように発したが、敗残兵は気に止めなかった。何の事を言っているのか分からないが、それよりも女だ。

「げっへっへっへ」

女の髪を掴んだ——掴んだはずだったが、感触が無い。

ドサリと何かが地に落ちる音がした。敗残兵は何が落ちたのかと疑問に思い、地に目を移す。

——アレハナンダ？ 切断された手だ。——イッタイ、ダレノ？
己のだ。

「アギアアアアアアアツ！？ 手が……手が……」

手を切断された方の腕の血を止めるように押さえて、膝を地につき悲痛の声を上げた。

女はいつの間にか引き抜いた、血が付着している刀を持ったまま、敗残兵の方に振り返った。

「あら、中々声を出すのね」

満面の笑みを浮かべた女は、松永久秀であった。彼女の笑みはとても可愛らしいものだったが、敗残兵は恐怖した。

その笑みは悲痛な声を上げたことに対する喜びだ。彼女は人を痛めつけて、苦しませるということを、楽しむ一面を持っている。

「は、は、ひいひい……」

恐怖から逃れようと、羽をもがれた虫のように地を必死に這う敗

残兵であつたが、上手く這うことができない。

久秀はその虫に静かに歩みよつた。その一步一步の雑踏の音が恐怖を煽る。

「ねえ……まだ死にたくない？」

「はひつ、死にたくないです。どうか見逃して下さい」

大の虫は憐れな姿になりながら、この場の強者に尻尾を振つた。

「そう……わかつたわ」

「で、では……」

虫の顔色が明るくなった。なんとか許されたのだと喜びでいっぱいだ。

その虫を上から見下ろしながら、久秀は更に笑みを深めた。

「じゃあ、もつと苦しめてあげなきゃね」

「ギイイイイイイッ！」

迷いもなく虫の脚部を刀で数回ほど深く突き刺した。腹の底から上がる悲鳴に久秀はケラケラと笑つた。

ある一つの遊戯をする無垢な子どものように、顔を輝かせて命を弄ぶ。はたのめから見れば狂っているとは思えないだろう。

もし、長慶や一存らがこの残虐な行為を見たとしたら、止めるよ

う命令を下すが、生憎ながらこの場にはいない。

それもそのはず、久秀は主君、三好の重臣の目と耳が届かない場所を選んだからだ。

この辺り一帯の三好の兵は全て久秀の私兵が見回っていて、他の兵はいない。この場は松永久秀の独壇場と化していた。

「ほら、もつと……もつと泣き叫びなさい。ふふふ……」

すぐに死んでしまわぬように急所をわざと外す。指、手の甲、肩と箇所を変えながら楽しむ。

さあ……次はどこを刺してみようかしら？

久秀は心を躍らせる。残虐な行為を行いながら、愉悦するのだ。頬についている一滴の血が狂気含んだ美しさを増幅させる。

「そうね……左胸ね」

「あ、ガッ！」

素早く左胸を突き、風穴を作り上げた。虫は軽く鳴いた。指二つくらい入りそうな風穴は虫が呼吸しようとする、空気が左胸から漏れる。

虫が苦しそうに掠れた呼吸を繰り返す。目の焦点が合っていないことから、もうじき死に至るだろう。

「うふふっ！ あははっ！ どう？ 苦しい？ 何か言っでござんなさい」

言葉は返ってこなかった。虫は眼を開けたまま壮絶な表情で動かなくなっていた。

久秀はそのことを認識すると、つまらそうに一息ついた。もう少し、長く楽しみたかったが、遊び道具は壊れてしまった。

もっと自分を満足させてくれる玩具は、どこかに無いものかと思案する。真っ先に新しく家中に入った颯馬を玩具にしようかと思うが、止めておいた。

久秀が出世するためにも、利用価値のある彼は自分の陣営に引き入れないといけない。

だから今は本性を見せるようなことは控える。

「……今は無理だけれども……将来は、ね。ふふふっ」

ある程度、家中での地位が上がった時に颯馬を玩具として扱おう。自分の本性を初めて知った時、いったい颯馬はどんな反応してくれるのか、今から楽しみで楽しみで堪らなくなってくる。

そして、己が起こした惨状に目をくれもせずに、どこかへと歩き始める。壊れた玩具はもう遊べない。だから、興味すら持たない。それと同時に、彼女の私兵が、久秀に不利な噂が立たないように、無惨な姿の死体を顔面蒼白になりながら処理する。

処理される死体の存在は完全に抹殺され、残虐な行為が無かったことにされる。人として許せない行為だが、彼女の私兵は憤りの感

情はない。

一人残らず彼女に絶大なる忠誠心からでなく、恐怖心から命令をこなしている。主がどんな残虐な者であり、齒向かったり機嫌を損ねたりしたららどうなるかを仲間の死によって、その恐ろしさを知っている。

いつもと変わらない手慣れた感じで、死体はあつという間に片付けられた。その後、残虐な行為が行われた周りの民家に口止めのために金銭を贈る。

民は金銭を恐怖混じりに受けとる者が多数だった。誰彼もが関わりたいくなさそうに、金銭を受けとるとすぐに戸を勢いよく閉めて栓をする。

この反応ならば、噂されることも無かるうて。

久秀の私兵らは、生気を感じられない虚ろな目で恐怖を胸に抱き、次の任務へと迅速に行動に移す。

帝が公務を行われている御所に長慶と颯馬が兵を率いて訪れていた。もちろん、制圧しに来たのではない。

三好家当主である長慶が帝に謁見するためである。

京から晴元方の敗残兵が、ほぼ一掃されたことが確実となると、三好の実効支配地となったが、今の時点では何の権限を持っていない。

権限を持っていなくとも勝手に政を行う事はできるが、それでは晴元に侵略する大義を与えてしまう。

よって、帝より何らかの京を治める権限のある官位を承ろうとして、献金をすると共に謁見を求めた。

この場合の献金を賄賂と言われたらそうかもしれない。しかし、どちらの言い方でも現在の朝廷に対しては、効果があることには変わらない。一番の理由としては、帝が最低限の生活を送ることで精一杯になるほど、お金に困っていたからだ。

帝の生活費や祭祀を行うお金は各地からの大名、民、僧から献金で賄っている。だが、今は戦乱の世。大抵の大名達は自分の事で手一杯で、朝廷に献金などする余裕などない。献金するのは国を支配する正当性を得る、官位を求めるくらいである。

このことから帝や朝廷は消滅や忘れさられてしまうかと思われるが、その逆だ。將軍家と幕府の威光が陰れば、陰るほど帝と朝廷の権威が強くなる。

官位を得ると言う行為は朝廷から任命されて、初めて成る。つまり、日ノ本の最大の権威を持つのは帝と朝廷であることがハッキリと分かるだろう。

しかし、権威を持っていながらもやはり利用されることが多い。今回も長慶が謁見を求めたのも朝廷の権威を利用するためである。

「……………遅い、ですね」

宮内に帝の謁見を申し入れてから、中々返答が来ないことに颯馬はボソリと口にした。

そう言つのも無理はない。謁見を申し入れてから一時になろうと
していた。

「……………我慢」

「そうは言いますが、いくらなんでも時間が掛かりすぎです」

「……………我慢」

立ち待たされ続けた足が棒のようになっていいる。疲労している颯馬が文句を呟くたびに、長慶は間を取らずに言い聞かせる。

その二人のやり取りは姉が弟に言い聞かせているように見える。

「お待たせして申し訳ございません」

ゆつたりとした歩みで帝の侍従が御所から出てきた。長慶の前に出ると一礼する。

それに合わせて長慶も一礼し、颯馬は主君に倣い一動作遅れてした。

「……………して、返答は？」

「陛下はお会いになられるとのことです。宮内官の協議でも三好殿

の謁見を許可するとの結論が下りました」

侍従は淡々と上からの結論を述べた。

返答が遅かったのは宮内官が長慶を帝に謁見させても良いか、話し合っていたらしい。

「……感謝する」

「それではご案内させて頂きますが、中にお入りになられる前に腰の物はここで外してくださいませ」

帝に謁見するからには、やはり凶器になるものを持ち込むのは禁止されている。

長慶は指示通りに刀を外した。

「……颯馬、預かって。後、兵も……」

「はい、お任せください」

率いていた兵の指揮権と刀を颯馬に預けると、侍従は「こちらへ」と手で促して謁見の間への道を先に歩む。

颯馬に見送られながら、長慶は侍従の後について御所の中に入った。

厳かな長い廊下を歩くこと数分。女官が立っている場所の部屋の前で侍従が足を止めて、長慶の方へくると向いた。

この部屋が謁見の間なのだろう。

「到着致しました。この部屋が謁見の間でございます。入室される前に失礼ながらも一度、危険な物を持っていないか女官に確認させて頂きます」

「……（コクリ）」

了承の意を示すと女官が危険物を隠し持っていないか長慶の魅力的な身体に触れる訳だが……。

女官の両手は下ろされたまま、ある部分を一点に狙うかのように卑猥に指を少し動いている。

指だけじゃない。視線も長慶の強調された双子山を穴が空くほど凝視している。

その気迫に長慶は圧される。戦場で感じるものとは違った威圧感。そう、例えるなら女官が狩り人では無いかという錯覚を受けた。

「失礼します」

「……は、はい」

長慶の身体に魔の手が——いや身体検査のために手が伸びる。これは女官の私的な検査ではなく、仕事としてやっているのだ。……たぶん。

身体を固くする彼女に女官が、確認のために最初に触れた場所は足だった。そこから徐々に、ポンポンと確認しながら上に向かっていく。

「……………ッ！」

「フーン、フーン」

女官が丸く可愛らしいお尻を数回撫で回すと、長慶は思わず声を上げそうになった。

触り方がとてつもなく、ゆっくりだった。何という確認の仕方だろうか。

身体検査の手は止まらず、続行される。腹回り、両腕と検査されて残るは双子山のみとなっている。

女官の指が忙しく動く。

「ふふっ」

女官は微かに笑みを見せながら、張りのある双子山へと手を掛ける。

一回、二回とふにゅと揉んでくる。弾力ある胸は手を押しはねるくらいだ。

その光景を近場に控える侍従もいる訳だが、彼は慌てて身体を明後日の方に向けて、必死に見ないようにしていた。

「——ッはあ！」

色っぽい声を長慶は上げる。その声に反応して侍従は己の耳を塞いでいた。

……………恥ずかしい。

声を聞かれた事に長慶は顔を朱に染めた。だが、そうしている間にも胸は揉まれ続ける。

「……………ッ！　ッ！」

声を上げたくなるのを必死で堪える。
まだ、まだ、検査は終わらないの？

「——はい、終了です」
「……………ふう」

……………やっと、終わった。

長慶の胸の感触を思う存分味わった女官は、一仕事を終えたような感じで、すっきりしていた。

「ああ、終わりましたよ。山本殿」
「……………あ、ああ。そうか、もう下がって良いぞ」
「はい、失礼します」

間延びした声で女官はその場から立ち去った。――随分と嬉しそうな雰囲気です。

そして、仕切り直すように侍従は軽く咳払いした。

「では……中へお入り下さい」

「……（コクリ）」

朱に染まったまま長慶はうなづち、開いた襖の先へ歩む。上座には薄い何かで仕切られた空間とその隣に彼女を案内した侍従とは別の者が座していた。

おそらく、帝はあの仕切られた空間に入るのであろう。

長慶は謎の空間の隣にいる侍従に一礼してから正座した。

「陛下がお入りになられます」

淡泊な侍従の声。ついに帝との謁見が来たのだ。

帝が入ってくるということで、長慶は平伏して待った。

襖が開く音がし、布が畳を引きずる音がしたあと、座るような音がした。帝が謎の空間に座したのだ。

「三好殿、お顔を上げられよ」

「……はい、恐れながら失礼します」

老齡の男性の声が空間に響く。その声に従って恐る恐ると顔を上げるが、薄い何かで仕切られているため、どのような顔をしているのか分からない。

だが、庶民とっても大名にとっても、神カミのような存在が目の前にいる。

「……この度は突然の謁見を受けてください、感謝致します」

「そうですね。あまりに突然の謁見でしたが、余は三好殿にお聞きしたいことがあります」

「……何でしょうか」

長慶は固唾を飲み込んだ。いったい、何を聞かれるのか。

「何故、このような行為に及んだのですか？ 細川殿によって、近畿に平穩が訪れていたはずなのに。民は、戦乱など求めていないはず」

民のことに気かけ、憂う声。帝はいつも民の平穩を願っている。日ノ本で最大の権威を持っていながらも権力を持っていないために、帝が何かをすることが出来ない。

「……細川晴元殿は、民のことを考えてません。私利私欲に、まみ

れています」

細川晴元ほど私利私欲にまみれた大名はいない。晴元は己の地位を守るために長慶の父を一向一揆を用いて殺した。

その後、己では止められなくなった一向一揆を、阿波国で軟禁されていた長慶を呼び戻せ、鎮圧を命じた。

なんとも、身勝手な采配だ。父を殺すために用いた一向一揆が止められなくなったから戻って来いとは。

それも、父を殺す原因となった政長を重臣に据えたままのところだ。晴元という人物は家臣の心情を考えない暗愚の大名だ。そのような者が民のことを考えることが出来るわけがない。

ここに至るまでの推移を長慶は述べ続けた。

「……………そうであるか。細川殿は……………はあ……………嘆かわしい」

帝は盛大に息を吐いた。晴元と何度か会話したことがあったが、その会話がただの口出任せであったのだ。

さぞかし、落胆しているのだろう。しかし、ここで会話を途切れさすことはせずに、長慶は続けていった。

「三好殿は民をどのような存在に思うか？」

「……民は我ら武士にとって、身体のような存在です」
「……………ふむ」

謁見の時間も終わりに近付いてきて、最後に帝からの不思議な問いかけに長慶は臆するなく答えた。

民からお米や金子を納めてもらうことで武士は給与を貰い生活する。そのかわり、武士は民の安全と秩序を外敵から守る役目を担う。民無くば、武士無き。武士無くば、民無き。民と武士は共同体である。

「余は民は——いや、日ノ本に住む者は宝だと思っておる。三好殿も、細川殿も……どのような身分の者でも」
「……………？　どういう意味ですか？」

長慶は意味が分からなかった。宝とは大切な物という読み解き方だ。それなのに何故、民のことを考えない晴元も宝に入るのか。

「陛下、お時間です……………」
「なんと……………もうそんな時間か。三好殿、残念ながらこれまでです」
「……………細川晴元殿も宝とはどういう意味ですか？」

……………待つて欲しい。まだ理由、聞いていない。
長慶は再度、帝に理由を求めた。

「意味はそのままの意味です。細川殿を憎む三好殿は、余の感覚を

分かってもらえぬでしょうけど」

しかし、帝は彼女を納得させるような答えを詳しく出さずに退室してしまった。

……宝？ 私も晴元も？

考え込むがいつまで経っても答えは出ない。ただ、一つ分かることが長慶にあった。

帝は長慶とは違った見方で日ノ本を見つめていると言っことだ。

幕府掌握（２）（後書き）

政「陛下が出てきたな」

景「今回は陛下の神カミのような存在という補足だ」

政「気になったんだが……読みつける必要あったのか？」

景「あるんだよ。カミという読みは大和言葉の意味を示している。
このカミは現御神アキツミカミのことだ」

政「全然、分からんぞ」

景「説明するとだな。現御神アキツミカミとは絶対的ではなく、尋常でない優れた徳を持つものを神カミとして崇めるんだ」

政「なるほど、陛下は徳が優れているから現御神アキツミカミとして崇められるわけか」

景「まあ……その『優れた』というのは善いことや尊いことに当てはまらず、悪いことや奇しいものでも、ずは抜けていれば神カミになる。簡単にいうと鳥獣本草、山海、人間でも、ずは抜けていれば神カミになれる」

政「おお……そうか！ 現代であれば、神と呼ばれる者がいるじゃないか。『漫画の神様』手塚治虫。『経営の神様』松下幸之助」

景「うん、そのような者達も同じ現御神アキツミカミの定義から来ている。何か

に優れてさえいれば梵天丸だつて神になれるぞ？ …… 優れていれ
ばな」

政「うつ……私は…… いや、戦国時代で神なるのは無理じゃないか
？」

景「いや、そんなことはない。尾張の大うつけの織田信長は祭神と
して京の神社に祀られているぞ？」

政「なにっ!？」

景「嘘だと思ふなら『織田信長 祭神』で調べて見るといい」

幕府掌握（3）

京から晴元方の兵を大体追い出した三好家だが、誰一人勝利に浮かれていなかった。

山城国管領職は晴元が就いているまま。將軍も晴元の元にいる。兵を追い出しただけで、京に晴元の影響力が完全に無くなった訳ではないのだ。

將軍が三好を征伐せよと糾弾したら、間違いなく隣国の大名が加担し攻めてくる。

その影響力を無にしようと考え、京に三好屋敷と松永屋敷を作り、久秀は代官としての任を受けて颯馬はその補佐と京の警護の任を受けた。

今の彼らの任としては京の晴元方に与した者達の排除が先ずの目標である。

「颯馬、次はここをお願い」

「ああ、わかった」

京の松永屋敷で颯馬は何やら紙を久秀から受け取り、紙を広げ内容を確認する。書かれている内容は晴元方に与したと思われる家と最後の文に久秀の名があった。

久秀が裁許状を書き、颯馬がその判決を執行するということになっている。

本来ならば代官である彼女が判決執行に立ち会った方が良いのだ

が、そうもいかない状況になっている。

「ねえ……颯馬、疲れたわ」

「……同感だが、それでも氏綱様が上洛してくるまでには、やっておかないとな」

颯馬は疲労が溜まっている久秀に同調しながらも仕事をするように促した。

彼女がそう言ったのは理解はできるのだ。一日中、部屋で気が遠くなるほど同じ内容の裁許状を何枚……いや、何十枚と書き続けているのだから、苦に感じることもだろう。

しかし、疲労を溜めているのは颯馬も同じだ。裁許状に書かれた人物をしょっ引いたり、京周辺の警戒に他の地域の戦地で戦をしている長慶と三好家家臣達への兵糧や武器などの供給、兵站線の確保などなど、仕事に追われる毎日だ。

「氏綱様……ね。ふふっ、あの男は自分が傀儡にされるなんて頭がないでしょうね」

思い出したように笑いながら久秀は、晴元方に与したという疑いがある者を一覧表から選び、次の裁許状の作成に取り掛かる。

「だろうな。まあ、これも必要なことだ」

氏綱というのは河内国の細川氏綱のことで晴元と仲が悪く、対立していた。彼の望みは足利將軍を補佐し、幕政を統轄する管領職に就くことだ。

管領は代々、將軍家の一門が就くものである。細川家、畠山家、斯波家の三つの一門が交代交代で管領職に就いていた。

つまり、阿波国の土豪にしか過ぎない三好家が管領に就くことは出来ないのだ。

現管領である晴元を蹴落とすには細川の血を持つ氏綱が必要なので、三好家は氏綱を擁している。ただ、長慶は氏綱の知らぬところで三好家内にこう発言した。

——……管領に就かせる。でも、お飾り。

長慶としては、応仁の乱を長引かせた一つの原因である細川家に強い不審感があつたので、政治的実権などは三好家が全て握る気であることを家臣に伝えていた。

だからこそその傀儡。三好家が表立って政を行うのではなく、裏に身を潜め行つ。

「む……この家で……本当にいいのか？」

裁許状を目を通していた颯馬が目丸くしながら、確かめるようにそう久秀に聞く。裁許状に書かれていた家がとんでもない家だっ

た。

名門の武家とかそういう位の家柄でなく、更に上の位の家だ。

「俺の目に間違えがなければ、近衛家と書いてあるんだが……」

「そうね、確かにそう書いたわね。それに何か不備でもあるのかしら？」

「五摂家の……だよな？」

何度も文を読み返すが、何回確認しても五摂家である近衛家が書かれている。

五摂家と言えば藤原北家の嫡流で近衛、二条、一条、九条、鷹司の五つで摂政・関白に就ける公家だ。公家の家格の中で頂点に立っている。

近衛家をしょっ引くというのは、公家との関係を損ねる。日ノ本が武家中心となった今でも、無視できない力を持っている。疑いがあっても止めておいた方が良いと思う。

「だからどうしたの？ 私は長慶様の命令通りにやっているわ」

「……そうなんだが」

それが何か？ と返され、颯馬は少々困った。執行してもよいのか大いに悩む。

京の支配を強固にしたいなら、公家と友好な関係を結ばないとならないのだが、主の命令もある。

命令内容は晴元方に与した者とその家は例外なくしょっ引くように言われていた。主の命令を忠実にこなすならば、五摂家の近衛家で

あろうとも疑いのある者はしよつ引くべきだ。

「はい、これもお願いね」

颯馬が考えこんでいる内に久秀がまた一枚書き上げた裁許状をポンと目の前に置いた。今度の名は誰かと目を通すとまた目を丸くする。

「久我晴通、また近衛家……」

今度は現近衛当主の弟だ。どうにも今回は公家を中心に裁許状を書いているみたいだ。それも高級公家を中心としている。

公家と三好家の仲が悪くなりそうだが、別の見方をすれば逆らう者は容赦しないというのを示すことが出来る。

「……ふう、当家の意を示すためには仕方無しか。行ってくる」
「ええ、よろしくね」

颯馬は公家をしよつ引くことを決断した。そうと決まれば彼の行動は早い。裁許状を持って最低限の武装をした兵を何人か率いて、松永屋敷出発した。

颯馬が兵を率いて町を歩めば、たむろっていた民衆はパツとどこかへ消え去ってしまう。

理由くらい分かる。颯馬の後ろの物々しい兵達を恐れて逃げ出した。民衆が恐れているのは兵だけで颯馬に関してはあまり気にしていない。

彼らの認識としては颯馬はただの三好家臣であり、名前も知らぬ者が大半だ。しかし、颯馬を動かしている人物——松永久秀の名前は、晴元方に与した者を処罰するために裁許状を発行し、容赦なく刑を執行させる者として知れ渡っている。

「でかい屋敷だな……」

近衛家の屋敷を見つめ思わず口に出した。三好屋敷や松永屋敷よりも豪邸で屋敷周りは堀がある。

下手すると將軍の二条城よりも豪邸だ。颯馬が見た感じでは、二条城は幕府の権威が本当に落ちているのだと再認識するほど、とても寂れていた。

これじゃあ、將軍様よりも公家の方がよっぽど贅沢な暮らしをしているのではないか？

そんな風に思いながら近衛屋敷の門戸を三度叩いた。するとすぐに声が返ってくる。

『どちら様でしょうか？』

事務的な感じからして、門番の仕事を請け負っている近衛家の使用人だろう。

「奉行だ。細川晴元に与力した近衛一門を捕らえに来た。今すぐに門を開け」

『なっ……少々お待ちを。主に聞いて参ります』

使用人は驚きをあらわにし、近衛一門の誰かに相談させて欲しいと求めた。

これは危険だ。相談と称して逃走するかもしれない。

「今すぐ門を開け。でないと打ち壊して入るぞ」

逃げる猶予を与えないように、颯馬は脅しを掛けることで相手を先制する。

この仕事を何度かやっているとなれば失敗を犯すことがある。よくあった失敗例は相手の言い分を聞いて待つと、いつの間にか姿を眩ます事例があった。

探し出すのに無駄な手間を掛けられ、仕事が増えて苦勞させられたものだ。失敗を重ねて思いついた対策がこれだ。

颯馬としては本意だが、相手の言い分を聞かないで強引に捕縛する行動を取るようにした。

「……………」

門戸の向こうからの返答が無いのと駆ける音を確認して、軽く重い息を吐き出した。今までは脅しを掛けることで大人しくなったのが、今回はそうも行かないらしい。

「門戸を打ち壊せ！」

強行手段を用いる命を兵達に下した。

『うおりやあああああつ！』

待ち構えていた兵の内の斧を携えていた闘志満々の二人が、斧を奮って門戸に四方に切れ込みを入れる。

こうすることで門戸を破壊しやすくなる。

斧を奮った二人が下がり、細長い丸太を四人掛かりで持っていた兵らが、続いて門戸に叩き込めんと振り子のように揺らした。

『一ッ、二の三ッ！！』

足並みを揃った瞬間で細長い丸太を、門戸に最高の勢いで叩き込んだ。短い鈍い音を辺りに響かせる。

一度では門戸に少し傷をつけただけだった。まだまだ……休むことなく、丸太を叩き込まなければ。

『そおおおれっ！』

『うりやつ！』

『それ、よっ！』

門戸に一定の速さで丸太を叩き込むこと三度目。門戸に大きな亀裂が入り、木片が飛び散った。

少し小さな穴が出来上がり、近衛屋敷の一部分を覗かせた。あと一打でこの門戸は粉碎される。

『でりやあああああつ！』

気合いの入った声に合わせて最後の一打が門戸に入り、丸太が突き刺さった。そして、乱暴に丸太を引き抜くと、バラバラと音を立てて木片が地面に落下する。

門戸に大人が十分に腕を通す余裕がある大きさの穴が出来た。その穴に腕を通して、門戸を固く閉ざしている原因である門かんぬきを取り外す。

足裏を左右の門戸に掛けて押し出すと、門戸は近衛屋敷の方に向かって開かれた。

「よし……一度この家の者を捕縛せよ」

颯馬は兵らを見回して一度頷き、静かに言った。

「刃物を取り出した奴らはどうしますか？ 殺りますか？」

「やむ得ないのであれば切っても構わない。だが、殺さぬよう努力してくれ」

「了解」

公家だから何人かの用心棒を雇っていると思う。おそらくは、契約主を守るために抵抗するだろう。

その場合は仕方ない。仕事を遂行するために殺させてもらう。

近衛屋敷へと続々と入って行く兵らの背中を颯馬は門前で護衛の三人の兵と共に見送る。中に入らないのは己の技量を自覚しているからだ。

剣の腕は、そこそこというより微妙。基礎だけ出来ていて、実戦では役に立たない程度。

中で刃を交える状況になったら間違いなく、兵らの足を引っ張る。そのように分析出来るから、効率よくやるためには颯馬は門前で待っていた方がいい。

兵達が突入してすぐに屋敷から人の悲鳴——というより奇声が次々と上がる。交戦か近衛屋敷の者のどちらかだろう。

颯馬としては近衛屋敷の者の悲鳴であって、交戦など起こらないでほしいと思う。ここは京の町。民が住まうところ。民は血が流れない平穏な日常を望んでいるのだから、血が流れるのを避けるべきだ。

「天城殿、中にいる者を一通り捕縛しました」

「早いな、もう終わったのか？」

突入してから半刻、兵のうちの一人が颯馬のもとに戻って、報告にきた。

門番の反応からして時間が掛かると思っていたが、案外早くに終わった。

「一部、刃物を取り出し抵抗した者がいましたが、近衛の者の説得で早めに終わりました。捕縛した者は今連れてきています」

「誰の血も流れなかったらうな？」

抵抗という単語を聞いて颯馬の目が鋭くなった。そこが一番、気になる部分だ。

「死者はでませんでした、打撲などの軽傷を負った者が双方とも何人かいます」

「そうか、分かった」

その報告を受けた後に近衛の家の者が兵達に囲まれて、颯馬の前に並ばせられた。彼らの名前を聞き出し、裁許状と照らし合わせながら罪状のない者を解放していく。

極めて強引な執行であったが死者はゼロ。颯馬の望む結果になっ

た。

しかし、三好家の暴力的行為の一つとして、今日のことは民の間に広まることだろう。

今はそう評価されても仕方がない。実際に暴力的だと颯馬自身も思う。

だけど、いずれはそんな評価も消えて、三好家の京支配が長くなれば、民はそれを当たり前のように感じる。

人間という生き物は慣れるのが早いのだ。

「——細川晴元に与力したと言うことで近衛植家、他十数名を無期軟禁させていただきます」

それは颯馬も同じことで、容疑者に対して罪状を読み上げ、執行する仕事に今は慣れた。この仕事、始めは精神的に来るものがあった。罪状を読み上げると容疑者に罵倒されたり、泣き付かれたりしたが、今ではなんともない。

今回はこの温厚そうな、よぼよぼの爺さん——近衛植家は何を口にするのか。

「……………飯は三食出るのかのう?」

「飯、ですか?」

なるほど、この予想は付かなかった。

颯馬は虚を突かれた質問に思わず表情を緩め苦笑した。彼だけじ

やない。兵達も苦笑していた。

この爺さん、この状況で飯のことを気にするとは、大物ではないだろうか？

「うん、飯」

「そうですね。一日三食出すよう指示しております。寺に軟禁させていただくので、必然と精進料理となると思います」

「精進料理！ それは楽しみじゃ」

これから軟禁されるとは思えないほどの明るい声。苦笑していた兵達から、まばらに笑いが起こる。

本当にどんな神経をしているのか不思議でたまらない。

「そろそろ隠居したいと思っていたところだしの。頃合いじゃ」
「では、寺へ」

そんな暢気な植家と他十数名を、三好家が見張りを務める一つの寺へと連行した。

まあ、暢気だったのは彼だけで、他の容疑者と近衛の家の者は颯馬に向けて恨み籠った敵意を放っていた。

向けられていて、いい気分になどなる訳がない。颯馬らはそこから逃げるかのように歩みを早めた。

この者達を寺に連行し終わったら、次は久我晴通を連行。その仕事が終わったら長慶様達の兵站の調整を行わないといけない。

三好家は今、摂津国、和泉国南部、丹波国の三国を同時攻略中である。この三つの兵站の調整を長慶は颯馬に任せた。

兵站が途切れれば、戦地で戦っている者達の敗北につながるのだから、大変神経を使う。

今のところは順調に仕事は進んでいる。その代償として颯馬の睡眠時間が著しく減った。仕事を終えて眠りついて四時後には、もう朝になっていたというような傾向が増えてきた。

睡眠不足だと身体に疲れが残ったままで重い。でも、仕える喜びというのを得る。喜びが仕事をやる気にさせてくれる。

颯馬は両腕をいっぱいに空高く上げて、肩の凝りをほぐす。君のために頑張ろうと気合いを入れ、改めて仕事に取り掛かった。

幕府掌握（４）

晴元方の勢力を捕縛したり排除した京に長い行列が訪れた。強い力を持っていることを内外に誇示するような盛大な行列。新しく管領に就く細川氏綱の上洛の列であつた。

「大した行列だなあ。誰の行列なんだい？」

「新しい管領のだってよ」

「へえ、管領が変わつたんか」

京の雅さを思わせる豪華きらびやかな行列は、民の気を大いに引いた。

それに加えて新たな管領の列だと知れると、どんな者かと興味を持った民が続出した。

どんなものかと一目見ようと道脇に大勢並び、氏綱の上洛を迎えた。

「——ははは」

輿の中でふんぞり返っている氏綱は、中から微かに見える大勢の民を見て、上洛していることに歓喜していた。

加えて、この感じ。大勢の者が氏綱の輿を見ることによって、注目されている。

これは、まるで神になつたかのような優越感を味わえる。

「ははは……うははははっ！」

宿敵、晴元を降ろして自分が管領の座に就ける。何度思い返しても笑いが止まらない。

何度も拳兵し、その度に破れ去った回数は数え切れない。最後に拳兵し敗北した相手は三好長慶。

彼女のことを恨めしく思っていたが、そんな気はすぐに失せた。味方に引き入れられれば晴元を撃破できると考えた。

駄目元で彼女に謀叛の密書を送ったところ、数ヶ月後に承諾してくれた。

そこからは面白いように三好家は晴元を撃破していき、領土を増やしていった。

氏綱は特に何をするのでもなく、三好の盟主として河内国でのんびり待っていた。

「長年の悲願が叶う」

そして今日、氏綱は管領職に就く。室町幕府の中で將軍の次に強い権力を持つのだ。

国を思いのままに、好きなように政を行える。氏綱にとって都合の良いお触書も作ることが出来るのだから、気分が最高潮になっている。

「晴元と同じ轍は踏まんぞ。三好には少し権限を与えて満足してもらおう」

晴元の失敗は家臣の心情を考えなかったこと。長慶の仇を重臣として据え、執着したのが愚かだ。

まあ、奴が愚かだったおかげで、氏綱は勝者として君臨している。こればかりは晴元に対して最初で最後の感謝をする。

ゆさゆさと輿に揺られて上洛の列は三好家が待つ管領御所へと入って行った。

その間も氏綱の笑いは絶えることが無かった。本人はいい気になっているが、輿を担いでいる者にとっては、うるさくて敵わない。輿を担ぐ二人の男は疲れたように、うんざりした顔をしながら目的場所にゆつくりと降ろし、氏綱に声を掛けた。

「氏綱様、御所に到着致しました」

「おおっ！　そうかそうか。はっはっはっ」

にやにやと笑みを出したまま、氏綱は輿から降りると足を止めた。ここが管領御所。今日から政務を行う場所を見渡し、満足したように頷く。

小姓に案内されながら氏綱は御所の印象を口にした。

「中々、真新しいじゃないか」

「少々、傷んでいたということで三好家が補修を施しました」

「ほう、誰が補修を命令した？」

「確か……松永殿と天城殿の案です」

松永は長慶の傍にいろのをよく見かけたから氏綱に覚えがあったが、天城と聞いて首を傾げた。

あやつは江口で死んだはず。もしや、一族の者か？

「天城は誰だ？ 正治は戦死したはずだろう？」「申し訳ございません。言葉が足りませんでした。最近、三好家に加わった、正治殿の子である颯馬殿です」

「奴の子か……。奴と違って好意的だな……」

かつての敵であり、ほんの少しの間、味方であった者の子に氏綱は思慮深くなる。

正治の手によって散々にやられたことと、味方になってからも自分に対して敵意を向けられてたことがあり、どうにも裏があるので
はと警戒してしまう。

「仕事を熱心になさるお方ですね。京の警護の任を受けておりますから、管領様と長いお付き合いになられると思います」

「うつむ……」

「では、管領様。お入りください。皆、お待ちしております」

信用できるのかできないのかと、悩む氏綱は小姓の言葉で現実引き戻された。

小姓によって開かれた障子の先へと足を踏み入れた。大広間には長慶を始めとする三好一門と三好家家臣が平伏して、管領の氏綱を迎える。

そのまま、彼らを見据えたまま上座に腰を据えた。

「……………管領職、ご就任おめでとうございます」

「うむ、ここまでご苦労だった。褒めてつかわそう」

「……………は、ありがとうございます」

長慶は変わらず犬のように従順だ。

この様子ならば、権威と所領を与えることや意見を蔑ろにさえしなければ、牙を向けることはないだろう。

そう氏綱は思ったがそれはすぐに打ち破られることとなる。

「……………管領様、管領職に就くには……………それなりの官位が必要。

……………その官位を朝廷より承った」

「ほうほう、それまたご苦労だった」

「……………管領様に従四位下の位階を」

長慶はそこまで言って、氏綱の許可も取らずに面を上げた。臣下が盟主の命も無しに面を上げたものだから、氏綱は不快に感じた。

「長慶、まだ面を上げて良いとは……ぬ!？」

不快感を隠さずに声に出そうとしたが、氏綱は絶句した。

長慶だけではない。その背後の三好の家臣も面を上げているではないか。

どういうことだ。何がどうなっている。

「……………私も従四位下の位階を授かった……………更に、本日から管領代行職に就く」

「何だとツ!! 管領代行職だと……………? そのような役職など聞いたことがない。貴様はふざけているのか!！」

長慶が自分と同格の官位であることと、存在しない役職を作ったことに頭に血を上らせて、氏綱は声を荒げた。

されど、長慶の表情は決して揺らぐことは無かった。

「……………管領様には淀城を居城としていただく。……………政務は三好家がやる」

「貴様……………貴様……………貴様アツ! 謀りおつたな!」

自分の処遇を勝手に決める長慶に激昂し、勢いよく立ち上がって指を向けた。

「……………管領職に就いてもらいたいと言った……………政務をやらせるとは言っていない」
「詭弁を吐きおつて！ 最初からそのつもりだったのか！！」
「……………」

長慶は黙りこんだ。その沈黙は肯定であることを氏綱に伝えていた。
ぶるぶると氏綱の身体が揺れた。顔を赤くし、目に憎しみを宿らせる。

「貴様アアツ！！ 小娘のくせに調子に乗りおつてえええッ！」

氏綱は乱暴に歩みながら、長慶を殺すつもりで襲い掛かった。
このようなことになるなら、脇差しても帯刀しておけばよかったが、今日は忘れた。
なので凶器は自分自身の手だ。

「姉上！」
「長慶様！」
「皆さん、管領様を止めて下さい！」

一存と颯馬が真っ先に氏綱の行動に止めに入り、康長の声に続いて他の家臣達も止めにかかった。
氏綱は邪魔者を押し退けようとするが、そこはそれ、武官が多い

三好家家臣団。

自らが戦場で矛を奮う彼らの力に氏綱は敵わず、簡単に動きを封じられた。

「ええい、貴様ら離せっ！ 邪魔をするな！ 盟主に逆らうのか！」

「管領様、この件は三好家家臣一同の総意です。そこをよく考え下さい」

「若造までが指摘するのか！ ふざけおって！ 何が総意だ、それが何だと言っただけだ！」

いつもの彼なら指摘されれば、それがどういう意味かは分かっただろうが、今は完全に頭に血が上っており颯馬の意見に対して、氏綱は正常な判断をできずにいた。

今はとにかく長慶を殺したくてたまらないのだ。

颯馬は気を引き締めてもう一度、氏綱に分かるようはつきりと言う。

「垂直に言わせてもらいます。三好家に管領様の味方はございません。あなたの命運は我らが握っております」

「ぐぐぐっ……」

氏綱は颯馬の言葉で冷静になり、唇を目一杯噛み締めた。

三好は誰一人たりとも、自分を盟主として仰いでいない。

氏綱は自分がただの操り人形であることを認識すると、その場で

うなだれた。

「……………管領様を寢室へ」

「了承した。管領様、お立ちなられて下さい」

長慶の命により小姓が氏綱を寢室へ案内しようと、立たせるために手を伸ばす。

その手を氏綱は払い、無言で立ち上がった。そして、長慶の方を苦々しげに一瞥し、この間から出た。

「……………くそが……………小娘め……………」

廊下を歩みながら、何度も呪詛をブツブツと呟く。自分の立場に認識は出来ても納得がいかない。

いつか……………いつかだ。いや、近いうちだ。管領が無くては三好が繁栄できないことを思い知らせてやる。

封殺が決定したにも関わらず、氏綱の野心は衰えることは無い。むしろ、傀儡にされたことへの不満で野心は拍車に掛かっている。この日から氏綱は、管領の実権を三好から奪取するために、心の内で策を練り始める。

「やっぱ、こうなったよなあ。何で長慶様はそれでもやったのか未だに分からん」

氏綱を管領として迎えたその日の晩、颯馬は寢床を提供して頂いている三好屋敷の廊下を歩みながら、あの場で起こったことを思い返していた。

傀儡にするというようなことを公言すれば、あのような事態になることは充分に予測できたため、身の安全を考えて長慶は出席しない方がいいと言う案があった。

颯馬もその案に賛成したが、長慶の結論としては却下された。

結果は、やはり予想していたことが起こってしまったが、氏綱が脇差しを持って来なかったので大事にならずに済んだ。

それでもやはり、あの展開は胸に悪かった。だから、二度としないようにと家臣一同が申し上げたが、長慶に話を流された。

「あの様子だと反省もしていないどころか、気にも止めていないだろうな。でも主君としては、あのような態度が望ましいのだろうな」

主義主張は一貫としているし、下の意見も参考にする。また、戦では己も参加して兵を鼓舞する。

主君として優秀な部類入るだろう。……何を考えているのか分からないのが少々難点だが。

「っと、通り過ぎるところだった。灯りもついているし、まだ起き

ているのか……」

危うく通り過ぎるところだった部屋からは灯火が漏れている。
この部屋の主はまだ就寝していないようで颯馬は少し悩んだ。
ある件について報告を忘れていたので、夜中でも報告しないと
マズイと思い、ここまで来たのだ。

——長慶の部屋の前まで——

ここまで来たのはいい。だが、ここに来て彼は馬鹿なことを思い
浮かべた。

天城颯馬の主君は三好長慶——女性である。

つまりだ……夜に女性の部屋に男性が訪れるというのは、あーん
なことや、こーんなことをする関係。

俗に恋仲——まだそうでない場合は夜這いと呼ばれる。

「——馬鹿かッ！」

不埒な考えがよぎった自分を冷静にするために、近くの柱に頭を
ぶつけた。

鈍い音がり、頭に鈍痛が伝わる。

「……………痛ッ！　グオオオッ！！」

想像以上の痛みに颯馬は頭を抱えた。あまりの痛さにその場で転

げ回るといふのは無いが、膝をついた。
足指をギュッと握り、痛みを耐え続ける。まったく、何をしているのだろう。

『……………誰？』

障子の向こうから長慶の声が聞こえた。どうにも、自分が馬鹿なことをやって、音を立ててしまったみたいだ。
うん……………逃げよう。

颯馬はこの場で起こした馬鹿な行為に恥ずかしくなり、逃げようとした。

だが、思い返す。報告する件はとても重要な事であることを。

「逃げちゃ駄目だろッ！」

もう一度、柱に頭を先ほどより強くぶつけた。
今度は先ほどの痛みとは異なり、額が割れそうなほどに鋭い痛みだ。

「ぬおおおおお！？……………角ッ。角にやっちゃまった……………」

膝について我慢できるものじゃなく、転げ回った。

「……………何をやってるの？ 颯馬」

澄みきった長慶の声。

時が止まるように颯馬の身体はピタリと止まり、長慶の方へ顔を向けた。

そこには障子を少し開けて、転げ回っている颯馬を覗く長慶の顔があった。

見られた。変なところを長慶様に見られた。

「あー、えーと、その。何というか……………うーん」

「……………落ち着きなよ、颯馬……………変だよ」

「……………はい」

変と言われて気持ちはどんよりとし、冷静さを取り戻す。

冷静を取り戻したことで、自分の行動を見返すと恥ずかしさで汗が吹き出る。

「……………何か用？」

「あ、はい。そうだった。先日、六角の情勢を探らせた兵から報告がありました、その件について報告することがあります」

「……………そう、じゃあ中で聞くから」

そう言つと障子の片側を開けて、長慶は背を向けて部屋を中心に

入って言った。

簡単に言ってくれるが、女子の部屋に入ったことが無い颯馬にとっては、物凄く抵抗感がある。

それも夜中なら尚更だ。

「……………え、中に入るんですか？」

「……………うん、お茶入れるね」

会話がずれていて、噛み合っていなかった。既に長慶はお茶を入れ始めて、颯馬が入室すること前提で事を進めている。

そうなると入らなければならないという強制力が働くわけで、結局中へと入り、腰を下ろす。

颯馬は緊張しつつ、長慶の部屋を見渡す。机に半紙、茶道具――彼女の部屋は余計な物は無く、派手さ藻無く、ただひたすらに簡素だった。

「……………お茶」

「あつ、ありがとうございます」

「……………少し、熱いから……………時間をおいた方がいい」

長慶から出されたお茶を飲んでから報告しようとしたところ、そう忠告された。

確かに持つてみると分かるが、湯飲みはずっと持っていると熱かった。

「じゃあ、お茶が飲み具合になるまでに報告させてもらいますね。どうにも、六角で不穏な動きがあるようです」

「……………どんな」

「南近江の坂本に大規模の兵が集結しているそうです。たぶん、晴元の京奪還のためかと思われます。何かしらの手を打たないとマズイです」

晴元が六角の手を借りて兵を挙げて来るのは予測はしえることだ。彼らには三好を打ち払い、京を奪還するという大義名分の理由を一つだけ持っているのだから。

その大義名分とは將軍家を上洛させるという事だ。將軍家は武士の頂点に立つ最高権力者である。

幕府の権威は失落しているとは言え、將軍が尊いものであることは変わり無い。

晴元が將軍を擁して進軍してくれば、賊軍三好家、官軍細川家という構図が成り立つため、三好にとっては挙兵しないで欲しかった。

「……………予想できたこと……………すぐに兵を向かわせたいけど……………」

「ええ……………二国の攻略に兵が割かれていますし、兵を新たに集めようにも財政状況からして無理です」

途切れた言葉に続いて颯馬が現在抱えている問題を口に出し分析し、互いに同じことを考えていると頷いた。

そうなのだ。摂津国と丹波国の支配が完全なものとなっておらず、兵の大半はこの二人に割かれている。

大軍でもって攻略できると思っていた二国は、抵抗勢力の籠城で時間が掛かっている。

そんな中で六角勢が挙兵するとなれば、大変苦しい戦いとなる。苦しいのは戦だけでなく財政の方もだ。

度重なる連戦や京の復興のために三好家の財政が支出と収入が、釣り合わなくなっている。

実のところ三好家は繁栄しているように見えるだけで、財政で破綻しかけている。

兵站を調節する颯馬はもちろん、家を背負う長慶もそのことをしっかりと把握していた。

「交渉で戦わずに済むなら交渉するんですが、無理があります。そのため、嫌が応でも戦をすることになるので、資金を調達せねばなりません。」

いろいろと考えた上で、公家の土地を横領して資金を得てはと思うのですけど……」

「……………颯馬、それは……………」

「わかってます。公家の反発を更に招くでしょう」

当然のことながら、颯馬はその影響も予測してある。横領という行為を行えば公家との関係は最悪になる。

しかし、資金を得る行為の中ではこの方法が欠点が少なくて済む。

「長慶様、公家は騒ぐでしょうが、民にとっては何の影響もありません。ここで一番怖いのは民が暴動を起こすことです」

畿内一円は一向宗と法華宗のどちらか入信している信者が大勢いる。

二つの宗派は少々過激的であり、民の暮らしが厳しくなれば僧が煽動して不満を一揆として爆発させる。

一揆を起こされると国力の低下、兵数の激減に繋がる。長慶自身、そのことを晴元の配下時に一揆を鎮めた経験を持って、随分に理解していた。

「無理でしたら無理と、この案を切り捨てて下さい。別案を考えますから。」

お茶、頂きますね」

「……………ん」

いい具合の温度になったと思い、湯飲みに手を伸ばしてお茶を喉に通した。

一口含めば、ほどよい甘さが広がり、ゆったりとした気分になる。美味しい。ただそう思った。あまりの美味しさに間を開けずに飲みほした。

そうして、一息ついてぼんやりとする。

「……………黙認する……………あまりやり過ぎないように」

不意に長慶より了承の意を告げられ、颯馬はハツとなる。

「あ、承りまし……た……」

「……………？　どうかした？」

「いえ、何でもありません。では、これで」

一瞬、長慶に陰りが見えたような気がしたのだが、気のせいだろう。

特に気にせずに一礼して、部屋を退去しようとする。

「……………颯馬」

「はい、何でしょう？」

名を呼ばれて、障子に掛けた手を止めて振り向いた。

「……………お茶、どうだった？」

「美味しかったですよ」

「……………そう、ありがとう」

口元を綻ばせた長慶の笑みに颯馬はドキリとした。普段では笑みは見せることのないのだから、尚更だった。

「で、では失礼します」

口をどもらせながら長慶の部屋から退出して、やや早歩きで自分の

部屋へと歩んで行った。

裏話だが……つい最近、長慶は大林宗套より茶を学び、その心構えを初めて実践して茶を入れたのがこの日だった。

まあ、そのような話を颯馬が知るすべは決して訪れないだろう。

幕府掌握（5）

財源捻出のための公家領地の横領は、長慶の黙認によって行われた。

土地の横領が度々行われたのはやはり、政の中心地である山城国が多かった。

横領の主導者は三好重臣ではなく比較的地位の低い家臣が中心だ。

その者達は己から横領しようと思ったのではなく命令されてやった。もしくは唆られて行動に移した者が大半である。

彼らにそうするように仕向けたのが颯馬と久秀の所業である。

颯馬は様々な人につながりを持つ久秀に協力してもらい、間接的な横領を成功させて三好の領地を増加している。

こうしたことで横領をした者達がその土地から兵を動かせる数が増えた。これが狙いだ。彼らが土地から得た収入によって雇える兵を増員したことにより、三好家の兵力が増加したことに繋がる。

間接的にだが三好家の財源悪化は徐々に解消していく。良い方法ではあったが予測された欠点は当然発生した。

予測された欠点——公家の三好家に対する心象悪化で敵視してくる公家が増えたことだ。

公家はこの横領行為に黙っていることはできずに長慶に対して不満をぶつけたが、返還されることはない。

横領に対する不満については、事の詳細を知らぬのでどうすることもできないと書面で通告され、以降無視されている。

無論、実際は知らないということはない。長慶は颯馬と久秀から横領した土地の場所、全てを知っている。知った上で表向きには知らないふりをして公家の言及を退けていた。どんな気持ちでこの行為を黙認しているのかは誰にも判らない。

だが、彼女の心象がどうあれ三好家当主として公言されると公家達はどうすることも出来なかった。

強大な軍事力を持ち勢力を誇る。不満はあれども蜂起する気は起こらない。逆らえば潰される……その様子は安易に想像つくからだ。誰も長年続いてきた家を自らの代で潰したくはない。不満を胸に抱えつつ、彼らは強者である三好の顔色を窺って媚びへつらう。

表は親三好を見せつつ心底では反三好という公家も珍しくはなく、親三好派というはあまり見受けられない。

「將軍様を擁立して頂ければ三好にとって都合のよいものでしょう？ 私が説得致しますから、矛を交えるのを避けていただけませんか」

「……………はあ」

「私に任せていただければ必ずしや連れて参りますから！」

三好屋敷に訪れて將軍説得を唱えるこの男。室町幕府の幕臣である。役職は將軍を補佐する役割の政所執事に就いている。

名を伊勢貞孝という。

幕臣でありながら反三好にならざる人物だ。彼は將軍が京から逃亡する原因になった三好に協調している。

敵であるはずの三好に協調するのは全ては幕府のために。その一念で三好に近づく者である。

今日、貞孝が三好屋敷を訪れたのは將軍の帰還を長慶に訴えるためであった。

「そのために協力してもらえませんか？ お二方」

貞孝は頭を下げて二人を見上げ、頼み込んだ。二人は顔を見合わせ息を吐く。

どちらも疲労の色が強い男。颯馬と康長である。

貞孝は長慶に会いに来たのにこの二人が話を聞いているのは簡単なこと。この場に長慶は不在だからだ。

さらに言うならば、山城国内にも長慶は居ない。重要地である京を放ってどこにいるのか？

彼女は西摂津の居城である越水城にいる。

越水城は現在の三好家の領国からして、有事の際にすぐに駆けつけることができるうってつけ場所。基本的に彼女は京に用のある時以外は越水城に在城していた。

「数週間前だったら可能性は低いですが、対話での解決もあったかもしれません。今では流石に無理です」

「そうですね。拙者だけでなく家臣団も颯馬殿と同意見です。将軍様達は六角と手を組み、坂本に兵を集結させるだけでなく如意ヶ嶽に新たな城を建築していると聞いておりますぞ。

こちらが対話を望んでもあちらが戦をする気では無理な話ですな」

数週間前は将軍と六角は坂本に兵を集結していただけだったが、日が過ぎることに状況は悪化していた。

京と近江を繋ぐ如意ヶ嶽に前將軍義晴の名で新たな城を建築し始めたのだ。

詳しい場所は慈照寺（銀閣寺）の背後にそびえる山。そこに自然の要塞となる城を前將軍は六角の手を借りて建築している。

京に入るか入らないかの場所での築城は、確実に侵攻を意図していた。完成すれば三好とつて平穩を脅かす最大の脅威となる。

「対話を諦めてはなりません。戦では互いに遺恨を残します」

「まあ……そうなんですけどねえ……。我らとしては、將軍様が確實にこちらに降ってくださるならば貞孝殿に協力しますが、今回は極めて和議を結べる可能性が低いので協力はできません。申し訳ないがお引き取り下さい」

あちらは六角の後ろ楯を得て強気になっており、和議を結ぼうにも無理難題な要求をしてくることが目に見えている。

三好が有利な和議を結ぶにはやはり、將軍を負かすしかないのだ。であるから、將軍との戦は絶対に避けられない。そう判断した上で颯馬は貞孝に申し出を断った。

「そうですか……残念です。ですが、幕府を存続させるためでしたら何でも致すので今後もよろしく願います。私はこの後將軍様を説得のために坂本へ向かいますので、京を留守に致します」
「そうですか、わかりました。道中にお気をつけ下さい」

望む返答が得られなかった貞孝は若干、肩を落とした。断られると予想はついていても実際に断られるとガツカリするものだ。

だが……それでも彼は望みを捨ててはいない。幕府存続のために行動する姿勢は依然として崩れていない。

慌ただしく貞孝は二人に礼をするとすぐに屋敷を出て、東へ向か

って行ってしまった。

部屋には颯馬と康長の二人だけとなる。

「さてさて、これからどうしましょうかな？ 颯馬殿」

「貞孝殿のおかげで幕府の権限を三好家が行使できていますし、氏綱様も大人しくしている。摂津国も完全支配に近づきつつあることで少しは余裕もできました。当面の問題は……」

「將軍様……ですな。まあ、前將軍様は何度も京を追われて歸京しては傀儡ですから意地になっておられるでしょう」

「誇りを汚されるのに耐えられないのはわかるのですけどね。將軍が勝手に動かれて民を苦しめる恐れがあるならば傀儡も仕方ない。戦乱の世なら尚更だと思っんですが」

二人は現状を確認するように交互に口にした。

そして、話題は今問題になっている対応について切り出される。

「それで……如意ヶ嶽の城は……やりますかな？」

「ええ、数日後に来る軍で妨害します。ですが本格的には矛を交えません。摂津の支配が完了して一月たつまで、城の完成を遅らせましょう」

築城の妨害計画はただ単に士気を下げるものではない。三好が全力で戦を交えるための月日調整である。

戦続きであった三好家は兵力を大分消耗し、兵士には怪我人もいて疲れている。

將軍との戦を伸ばせば伸ばすほど相手は力を蓄えるが、それは三

好も同じこと。

兵士に療養や休息を与えることで士気の低下を防ぎ、兵力を回復できる。

「作戦の決行は兵が到着して一日後にやりましょう」

「承知しましたぞ。それはそうと颯馬殿」

「はい、なんですか？」

康長の真剣な表情がうつて変わった。親しみのある態度だ。

個人的な話なのだろうと颯馬も肩の力を抜く。緊張が解れて疲れがのし掛かった。

めぐるましく変わる状況に対応するために休みなく働いた反動といえよう。

「久秀殿から聞けばここのところ、ろくに休息を取られていないよ
うで、拙者からみても酷い顔ですぞ」

「大丈夫です。戦続きの康長殿と比べれば大したことはありません
よ」

「女中からは毎日夜更けまで仕事をしているとも報告を受けておる」

指摘されると罰悪そうに颯馬は頬を掻いた。まさか、女中に告げ
口されるとは想定外だった。

颯馬自身は自分の仕事と戦術・戦略の研究を普通にこなしている
という感覚だったので、そこまで心配をさせていたとは思っていな
かった。

「あー、確かにそうかもしれませんが……最近は久秀殿と仕事を分担して貰っていますから睡眠は取れていますよ」
「何刻ですか？」

単純な問いに力がやけに込もっていた。
気づけば目も完全に追及しにきている。

「……………一刻半くらい？」

康長から視線を逸らしてポツリと自信なさげに呟く。
京に来てから膨大な仕事量を睡眠を削ってこなしていく中で身体が慣れてしまった結果、それが普通の生活になった。
恩恵としては研究の時間が大幅に取れるようになったこと。欠点として常時、倦怠感を生じている。

「……………皆が就寝する時間に合わせて寝てください。体調をいつも万全の状態に整えておくのも、将としての義務ですよ。良いですか？
？ 灯に使う油も安くはないのですからあまり夜更かししないで下さいよ？」

「すいません、善処します」
「善処するのではなく絶対にしてください。颯馬殿は三好にとって必要な存在なのですからな」

細かく注意されたからには改善しなければならない。康長が言うように颯馬は睡眠時間を増やさないといけないのだ。

そう、とりあえず改善案として睡眠時間を三刻くらい取ればよいだろう。それでもダメなら少しずつ増やせばいい。睡眠時間よりも戦術の研究方が大事だ。

通常の仕事に支障が出なければ問題ないというのが現時点の颯馬の思考だった。

南近江——坂本城

かの幕臣、伊勢貞孝は六角の厳しい身柄確認を通過して將軍の前に参じていた。目的は將軍の歸京のための説得。

貞孝は長年支えてきた前將軍の義晴に謁見を申し込んだのだが……

「そちは今ごろわらわの所に来て何の用じゃ？」

部屋にしばらく待たされて彼の前に姿を見せたのは、白色を基色に随所黄金色の線が走っている南蛮衣装を身に付けて、左右にくるりと巻かれた特異な髪型をしている金髪の少女。

その傍らにはそれぞれ、明るい赤と青色の髪をした女性を二人引き連れている。

貞孝は彼女達をよくよく知っている。幕臣である彼が忘れるわけもない。

前將軍が娘、貞孝が現在仕えている第十三代將軍——足利義輝。

それと御伴の細川幽斎・細川藤孝。

「義輝様、お久しぶりでございます。ご無礼ですが……義輝様ではなく、義晴様とお話をさせて頂きたいのです」

が、現將軍とも言えどもまだまだ幼いため、状況が容易く変わる政局を客觀的に見つめられるか不安が残る。

だから、年を重ねていて危機を何度も踏んで乗り越えた前將軍義晴に話を求めた。貞孝は若い義輝では政局を理解できぬだろうと考えていた。

「伊勢殿！ 義輝様がお会いになられたのにその物言いはなんだ！」
「私めは將軍様にお話をしに来たのです。あなたには聞いておらぬ」
「なんだと！」

藤孝が貞孝に今にも飛びかかりそうな勢いで怒気を放ったが、別段気にすることでもない。

昔から彼女はそうだ。主である義輝が蔑ろにされたらすぐ怒鳴るが、ちつとも怖くはない。

このような事は何回も体験した。きまって、彼女は怒りをあらわにしながらも手を出すことは無い。ただ、吠えるだけだ。

こういう奴は構えば構うほど突っ掛かってくるから、きっぱりと言った方が被害が小さくて済む。

「よいよい、藤孝。わらわはそこまででは気にしてはおらぬ。貞孝は

父上の腹心じゃったから、わらわより父上に先に話を通そうとするのは自然なこと」

「はっ、すみませんでした、義輝様」

藤孝は義輝に諫められると素早く怒りを収めた。良くできた奴だ。ここまですんなりと主の命を受け入れる者は、そうはいないだろう。彼女はまさしく忠臣。いや、ただ従うだけの忠犬だ。義輝限定の忠犬。

なら、貞孝はどうかといえば忠臣。忠犬ではない。主の行動が間違っていればそれを正す。

幕府存続を危うくする將軍であれば指摘し、存続できる道を選択させる。

忠臣は忠臣でも將軍ではなく幕府という機構の忠臣であつた。

「じゃが、父上は体調が著しくないため安静しておる。よって話はわらわが聞く！」

外套を揺らしながら威厳を出そうと声を張る義輝。普通だったらここで畏敬の念を覚えるのかもしれない。

「流石です！ 義輝様」

「貫禄がでていますね」

「そ、そうか。うむ、このように振る舞えば良いのか……」

相伴衆の藤孝と幽斎に拍手込みでおだてられて、ほんのりと頬を

染めて嬉しそうに笑みを溢す。

このやりとりで色々台無しで貞孝が畏敬の念を覚えることはなく、むしろ呆れていた。

この將軍は読みきれない。いつもは幽斎と藤孝とのやりとりで馬鹿主従にしか見えない。

能無しかと思えば、稀に將軍として相応しい行動をする。

将来、暗愚になるのか大物になるのか気になり、目が離せない將軍だ。

「義晴様のお具合が悪いとは、いつ頃から？」

「数週間前からでしょうか？ 突然、疲れたとお言いになられて寝込むようになったんですよ。祈祷もこないださせたので、時期に良くなると思うんですけど……」

幽斎は徐々に声を落として口を結び、沈黙した。その先に続く言葉は予想できる。

——前將軍義晴はもう先は長くはない。

義輝が目線を下に落として意気消沈していることが決定打になった。子から見てもそこまで義晴の状態がよろしくないのだろう。

「……………そうですか」

貞孝は一言だけそう力無く呟いた。

これは急がなければならぬ。將軍の帰京を実現しなければならぬ。將軍が京の地以外で亡くなる前に。

強い思いをたぎらせて使命感を強くした。

「ならば、義輝様。帰京致しませんか？ 三好もそれを望んでおります」

「三好は逆賊だ。わらわは逆賊の言う通りにはならぬ！ 帰京するときは奴らを追い出してからじゃ」

「そうだ！ 三好は將軍様達を追い出したではないか！ そのような家は放つてはおけぬ」

「伊勢殿……それが政所執事の言葉とは思えません」

三者同等に貞孝の提案に反対の意を示した。三好に対して良い感情を抱いていないようだが、それでは駄目だ。

現在は三好の力の下で幕政を行っているが、仮に將軍が三好を退けた後に幕政を行えるか否かとなれば否だ。

三好を退ければ、今度は誰が將軍を擁立するかで長い戦が始まる。労力を無駄に使う展開だけは避けないといけない。

「義輝様、冷静にお考え下さい。領国を増やす三好と將軍様が頼りにされる六角・細川連合軍……はたして勢力はどちらが強いかを」「利があるとか、そういう問題では無いじゃろう！ 大義はわらわにある。わらわに矛を向ける逆賊従う理由など無い！」

「……六角は頼りになりますか？」

「ぬ？ 何をいきなり……」

義輝は貞孝の問いに眉をひそめた。六角が頼りになるのかだなんて変なことを聞いてくる。

六角の支援で築城しているし兵士も出して貰っている。頼りにな

らないはずがない。

「上様は頼りにされておられるようですが、六角は三好と争って領土を得ることはありません。実のところ、この状況は望んでおられないのでは？」

「六角家は義輝様に好意的ですし、朝倉にも加勢を求めていますよ」「朝倉が重い腰をあげるといいのですか？」

日和見主義の朝倉が動くわけがない。あの家が腰をあげる時には既にことを終えている。

おそらくは三好の勝利で。

「もうよい、貞孝！ そちの顔なぞ見たくもない！ ここから出てゆけッ！！」

部屋を震わすほどの覇気に幽斎と藤孝の身体がビクツとした。

義輝は完全に血が上っている。ここまで怒る彼女を貞孝は見たこともないし、幽斎と藤孝もオロオロとしていることから彼女達もないのだろう。

刀に掛けられた義輝の手は鯉口三寸を切り、双眸は貞孝のみに向けられている。

殺意を向けられているのは貞孝にも分かるが動じることはない。

「座した状態から人を斬るのであれば、右足を地につけないといけません」

「わ、わかっておるわ！」

顔を朱に染めてギクシャクと右足を地に掛ける。義輝は剣術など充分に習っていない。

無理もない。度々、義晴と共に京を逃走し流浪を繰り返していたので腰を据えて剣術を習う余裕が無かったのだ。

いかに優れた名刀を持っていようと、担い手が上手くなければ宝の持ち腐れである。

彼女が今手に掛けている大般若・長光がまさしくそうである。

「——それで、私めを斬りますか？」

「……くっ」

「よ、義輝様っ、落ち着いてくださいっ！」「い、今すぐここからいねっ！」

幽斎と藤孝が殺気立っている義輝にしがみつき、衝動を収めようとする。

もう会話をする状態ではない。部屋の外からは異変を察したのか、多数の足音が聞こえてきた。

「……………義晴様にもこの提案をお告げ下さい」

それだけ言うと貞孝は部屋を後にして、外に出た。
騒ぎにはなったが相伴衆の二人が誤魔化してくれたのか、六角に

拘束や追跡などはされなかった。

「義晴様であつたら、私めの話は聞いて下さるのに。すぐに刀に手を掛けるようでは、まだまだだなあ……」

一歩間違えればあの場で切り捨てられたかもしれないというのに、貞孝は冷静だった。

腕を組み、自分が先ほどまでいた場所の方を見やった。

——戦はやむ無しか……。

嘆息を一つ洩らして、貞孝は京に繋がる道を歩み始めた。將軍不在の京へと進んでいったのだ。

幕府掌握（5）（後書き）

えー、戦極姫ファンなら既に知っている人もいるかもしれませんが…… 戦極姫3（天下を切り裂く光と影）、発売決定です。

発売日は五月！ ということは制作会社はいつも延期するので七月に発売ですね。

公式サイトを見ましたが……え、何コレ？ マジ何コレ？ 状態に陥りました。

だって、だって……キャラデザ、一新されてますもん！ 2と比べると完全別キャラです。しかも塗りかたがエロゲ塗りになっている
注）元からエロゲです。

しかもなんだあ……三好ルート？ ……複雑な気分です。この小説、書き続けていいんでしょうか？ 絶対に公式の方が面白くなるよ。

まあ、それはおいて気になった点

ルートは前の全部と＋三好と独自勢力だそうで、この独自勢力というのがちょっぴり気になりました。何なんでしょうね。

予想としては颯馬君主ルートが將軍家ルートです。願望としては南部家が北条家が来て欲しいな。あ、颯馬クン、イケメンになってました。なんだか今回男性キャラはネタキャラがないみたいです。米五郎もイケメンジジイに見えていたし……

猿から女体化したように今回も女体化した奴らもいました。

馬場、慶次、浅井、龍造寺、朝倉義景。確認できるだけでこれだけ。

馬場さん好きだったのになあ……でも馬兜を着けているので良しとしましょう。

君主達もキャラデザがすっかり変わっています。印象とルート予測も含めて……。

織田家 馬鹿っぽい信長じゃなくなりました。大人な感じがするのですが……私にはあるキャラに見えるんです。ジャンプの黒神めだかにね……。

ま、カリスマをバリバリ発揮するんじゃないでしょうか？

上杉家 謙信ちゃんが謙信さんと呼ぶようになるほどの物静かさに！ コレはあります。

伊達家 政宗……幼くなっています。なんだろう？ 2の方がいいぞコレ。説明文に他人を避けるとか書かれていたので、過去にトラウマキャラでしょう。

武田家 安定の信玄？ アリだけど……威厳が抜け落ちています。どうなんだろう？

大友家 信仰馬鹿が2より好きになれます。でも、道雪ルートですよね？ なんでメインヒロイン出さないんだろ。

龍造寺家 クマーが女体化してます。脳筋キャラですね。多分、ツンデレキャラ。うーむ、鍋島さんとクマ、どっちがメインだ？

毛利家 メガネじゃなくて猫人の一番目の奴が女体化。母親依存と妹との仲が悪いとな。どちらにせよ、女性陣は四人いるのね。

島津家 当主はこの方島津貴久、男性です。アーツと思ったら四人娘がいるそうで島津四姉妹は健在です。男性が当主かーお父さんは認めないぞみたいなルートかな？

三好家 当主は長慶。2だと動かしにくいからなのか、キャラデザと性格が変わりました。バリバリ喋ってます。

十河がオッサンではなくイケメンになりました。

次、三好三人衆が女体化です。まあ、当然と言えば当然か……目立ちましたからね。でもさあ、三好四姉弟を出して欲しかったかな……。二子と三子をね。

松永久秀……原画のままで！ イヤッホー、しかも衣装がエロくなっている。腹黒に活躍はきつとあるでしょうね。

ルートについては良ルートになるかは予測できません。自分も書いているから分かるのですが、三好家の史実は面倒くさいです。

一般知名度が低いから調べるのにも一苦労で、將軍とかと対立している。更には家臣に腹黒達がいる。書きづらい一大勢力ですよ。

結論

今までとは完全に違う者になります。光と影をメインテーマにしているので功績と悪行をストーリーに盛り込むということだとは思いますが、史実に近くなるのではなるのだろうな。どちらにせよ、買うけど。

楽しみにするんですが、この小説に3のキャラは出しません。

2と3じゃ、色々と差が有りすぎるから、出しても魅力が出せないと思う。

閑話 剣聖に師事すへ前編

京奪還計画実行は如意ヶ嶽に築城している城が三好の妨害を受けているということで、大幅な遅れが出ていた。

それでも着々とは築城はされていて、住み心地を無視すれば三、四ヶ月後には要塞として完成すると六角の次期当主に自信なさげに告げられた。

現將軍義輝は幸薄そうな六角義賢の言葉に不安を持ち彼女の親、六角貞頼に確認してみた。

貞頼からも三、四ヶ月で完成すると告げられて、それが本当であるというやく信用した。

義賢には悪いが、彼女は当主に向いていないと義輝は心の中で思う。

圧倒的に彼女は自信もなく思考が暗い。さらに聞けば、仕事関係以外では決して部屋から出ようとしない重度の引きこもりらしい。

あれでは貞頼も手を焼いているだろうに。

ともあれ、義賢のことはこれで終わりにしてだ。

二、三ヶ月の猶予に義輝は何ができるか考えた。

自分が帰京し、幕府の力を再興するにはどうすれば良いのかを……

……。將軍職がただのお飾りではなく己の力で幕政を行えるかを……。

考えれば考えるほど思考は渦に飲み込まれる。数日間考え込んだすえに、ついに閃いた。

ここは一つ、先人に倣ってみるのがいいのかもしれない。もちろん

ん、先人とは室町幕府を開いた祖のことだ。

義輝は父から聞かされた足利一門の祖の武勇伝を思い返した。

初代將軍——足利尊氏公は、初めは鎌倉幕府の一武将であつたが権力を握る北条を裏切り、後醍醐天皇に付いた。

後醍醐天皇に付いたのは尊氏公自身、まだ若かつたのだらう。天皇が政治を行い、国を治めるといふ『天皇親政』で大平の世になることに夢見ていた。

そして、天皇の勅命の元に鎌倉幕府を滅亡させた。これで尊氏公の望む『天皇親政』によつて大平の世が訪れる——はずだつた。

事實は後醍醐天皇の政治は失策続きで、大平の世になるところか更に混沌と化した。

大平の世になると信じていた尊氏公は、これをもつて失意した。

——やはり、力でしか大平の世は築けない——

現実を目の当たりにした尊氏公は後醍醐天皇を見限り、北朝について南朝を滅亡させることを決意した。

それから尊氏公は、朝敵が『悪党』と呼ばれる者を使つて攻めて来るのを撃退する日々に追われた。

幾度の戦場を駆け抜け、打ち破り、時には負け、時には窮地に陥つた。

四苦八苦しながらも勝利して国を治めるために室町幕府を開いた。

さて、尊氏公は何を持っていたか？

言うまでもない。尊氏が持っていたのは武士の根本たる力である。それも他者を圧倒する武力。

尊氏は力を持っていたから武士の棟梁として認められたのだ。

だが、代を重ねるごとにいつしか、力を失っていく。

先祖を蔑ろにするわけではないが、途中の代から公家のような生活になり驕るようになったから、將軍の權威が失われたのではないだろうか。

武士として振る舞い続けていれば幕府はここまでは酷くはならなかったのかもしれない。

だが、過去のことを思っても何も変わらない。大事なのは過去を踏まえた上で、どう行動するかだ。

ならば——と義輝は結論に至る。簡単なことだったのだ。

（わらわが武士としての模範になれば良いのじゃ）

將軍が武士としての在り方に戻ればいいのだ。武士とは力。その力とは劍術や戦術などの武術全般。

義輝はまず、劍術を極めようと思った。將軍に力があると思われれば幕府の權威も元に戻り、その力をもって、日ノ本の戦乱を徐々に落ち着かせることができる。

そんな彼女に耳よりな情報を飛び込んで来た。劍聖と呼ばれる者が京に上洛していると……。

極めるならその者に師事しようと劍聖を半ば強引に呼び寄せ、教えてくれるよう頼んだ。

剣聖の答えは……

「やだよ、なんでオレが將軍に剣術を教えねえといけねえんだよ？」

無位無冠の男は畏れもせず義輝の頼みを拒否した。

誰に仕えているわけではないこの男の服装は色褪せて、くたびれている。おまけに無精髭まである。

総合した上で一言で表すならば、『浪人』。これに尽きる。

「わらわに剣術を教えられるのは大変名誉じゃぞ」

「そんな無くても生きてられつよ。悪いがオメエに剣術は教えられん」

剣聖——塚原ト伝は將軍の頼みをなんてことはないように再度断る。

しかも將軍をオメエ呼びである。彼には將軍に対する尊敬の念の欠片すらないことが明らかである。

義輝の御伴はしかめっ面になり、幽斎は感情を抑えたが藤孝は我慢できずに爆発させた。

「無礼者がっ、義輝様に対してなんたる言葉を！」

「こんくらいで怒るたあ、なおさら教えられんよ。オメエはずいぶんと甘やかされてんな」

「我慢できんっ！　ここで叩き斬ってくれ」

悪そびれることなくさらにその言葉使いをする彼に藤孝は立ち上がった。

マズイと思った義輝が制止を掛けようとしたが……すぐにその必要性が無くなった。

「……あ？ 小娘が言葉使いくらいでうるせえんだよ。その腰の引き抜いてみる。自身を守るためにオメエを斬るぞ？ その覚悟が………あんのか？」

彼の雰囲気が変わった。先ほどとは全く違う。

表すなら……研ぎ澄まされた刀のように鋭く、凍てついてゆくような雰囲気。

ト伝は刀には手を触れていない。なのに喉元に白刃を突きつけられているかのような錯覚。

「——ッ!？」

藤孝は動きを止めた。いや、止められたと言うのが正しいのだから。

思考が危険と判断する前に身体が先に動かなくなったのだから。当然、義輝も幽斎も同じような状況になっている。蛇に睨まれた蛙とはこのことなのだろう。

「……っ、っっっ……」

身体の自由を拘束する威圧の一番の標的になっている藤孝は、呻きながら足を震わした。

ト伝と視線を交わすだけで刀を抜いた一寸先にはどうなるか、自然に想像させられる。

何度も斬りかかる予想をするたびに藤孝は、どのような形であれ一撃で絶命させられる未来しかなかった。

気づけば、藤孝は脱力して座り込んでしまっている。

「――」

義輝は言葉を失った。

ト伝の強さに見惚れてしまったのだ。刀を抜かず、持たずして相手の戦意を喪失させるほどの実力者。

想像以上の者だ。自分の望む力をト伝は持っている。是非とも教えを賜りたいものだ。

「さあて、伊勢神宮に参拝して帰るかな……」

威圧感がなくなり、義輝らが解放されるとト伝はそそくさと立ち上がって、背を向けた。

これ以上話すことはないという様子である。

「ま、待つのじゃ！ わらわに塚原殿の剣術を師事させて欲しい。

この通りで……頼む」

最後は言葉を詰まらせながら言い切り、義輝は——初めて自尊心をかなりぐり捨てて、人に土下座した。

本当に初めてだ。戦乱の世に生を受けて、義輝はいつも土下座される側だった。

やんごとなき血を継ぐ者であるから誰もが義輝を誉め称える。流浪してもなお、大名は土下座はせずとも下手に出て顔を立ててくれた。

援助してくれる大名はいつもいるのだ。

義輝は援助を受け入れる。將軍の権威を保つために地位に相応しい生活をし、誰一人にも媚びずに尊大な態度を取る。

上から命を下して結果を待つ。それだけでよかったのだ……今までは。

この場において、考えを改めさせられた。浪人、一人を従わせる力すら義輝自身にはないのだ。

所詮、義輝を担いでいた者は彼女ではなく將軍というモノであった。

「よ、義輝様!？」

藤孝が動揺する。だが、義輝は彼女の様子など気にしない。真剣にト伝から剣術を学びたい。今はただ、それだけの一心だ。

教えを乞う。教えられる行為を当然に思っではいけない。知識や技術を持つ者に教えて頂くのだ。

師事する者は師を敬い、頭を下げなければならない。何かを教わるというのはこういうこと。

「あ……塚原殿、御伴の私からもお願いします。義輝様に教えてあげて下さい」

「ちよつと幽斎まで！」

幽斎まではト伝に頭を下げた。頭を下げていないのは藤孝とト伝のみ。

義輝様と幽斎が頭を下げている状況に藤孝は思考が追いつかない。どうしてこのような状況になってしまったのか。何を思っている人がこのような行為に出たかは理解不能。

しかし、元凶は知っている。義輝様のお言葉で振り向いて上から見下す、この男だ。

「ほうほう、その態度にはほんの少しだけ好感を持てる。ほんの少しだけな。けどなあ、教えてやんねえ」

「わ、わらわの何がダメなのじゃろうか？」

頭を下げ続けたまま、義輝は理由を求めた。その時の彼女の声は震えていた。

「何がダメかって？ オメエの立場だ。將軍の立場の奴に剣術を教えられるわけねえだろ。怪我でもさすりゃあ、さつきみたいはこの御伴や他の奴に口出されるんじゃないやあ、たまったもんじゃないねえ。」

口出しされるとオレの剣術じゃあ無くなる」

「怪我をしないよう教えれば良いのだろう、それは！」

「ほれ、見る。この御伴、変なことを言いやがる。剣術つてものには怪我はつきもんなんだよ。怪我して身に付ける。武術全般は大体そんなモンだ」

「ならば、わらわから口出しせぬよう強く命じておく。そ、それならどうじゃろうか？」

ト伝は無精髭を生やした顎をさすりながら、目を瞑った。

しばしの間に静寂が訪れる。眉を寄せて考えているト伝の様子からするに、彼は明らかに迷っている。

権力など毛が生えたものくらいにしか考えていないト伝であったが、この時はその権力について深く考える。

一応、こんなチンチクリンなチビでも將軍だ。義輝に剣術を教えれば流派の宣伝にもなるし、いい具合にト伝への挑戦者が現れる。

あとついでに、道場に門下生が集まる。間違っても損することはない。

「そうさな……条件としては口を挟まない。文句を言わない。この二つを守ってくれりゃあ弟子にしてもいいぞう」

「感謝致す。今日からよろしく願い申す、お師匠さま」

義輝の表情が輝き、はにかんだ。良き師に廻り合い、師事することが出来る。これほど喜ばしいことはないだろう。

義輝に呼応してか幽斎もそこはかとなく嬉しいそうであった。藤孝は……まあ少し、納得がいかない様子だったが、義輝様が良いならそれで良いかと己に言い聞かせる。

「お師匠さま。早速、稽古をつけて下さらぬじやろうか？」

「あー？ 今日は何んどい、明朝からな。朝餉の前に稽古だ。あとは順を追って説明する。おい、赤い奴、オレの部屋は何処だ？」

「は？ 何がだ？」

「は？ じゃねえよ。オレの部屋だ。チビに教える度に登城すんのはめんどくせえし、宿屋に金かけんのも馬鹿みてえだろ。とつと城主に部屋借りてこい」

至極、分かりやすい理由である。ト伝が在住していたのは常陸国の鹿島。幾内には家などおいていない。

上洛中と至った後も変わらず寝場所は宿屋と野宿の二択しかない。

「うむ、藤孝。お師匠さまの部屋を借りてまいれ」

「はい、了解しました」

ト伝のために部屋を借りに行くのは嫌だという表情を浮かべつつ、藤孝は主命の下に次期当主の六角義賢のところへ向かっていく。

藤孝が出ていったあとにト伝が何かを思い出した。

「チビ、言い忘れてた」

「何じやろうか？ お師匠さま」

「常陸国鹿島の塚原ト伝。流派名『ト伝流』またの名を『新当流』。オメエを弟子として迎える。鍛錬に励めよ」

「——うむっ！！」

元氣良く声を弾ませた返事をもって、師弟の契りはここに成った。その契りが吉であるか凶であったかは、今の時点では予想がつかない。

吉凶が判明するのは明日。全ては明朝に判明することである。

だが……そんなことは問題ないだろう。義輝はまだ若い。いや、幼い。幼い者ほど一つのことには意地になりやすく、成長が著しい。加えて彼女には將軍の地位がある。この地位に座す限りは弱音を吐くことは許されない。

弱音を吐くことは將軍の誇りを汚すことになるのだから。

閑話 剣聖に師事すへ前編 〔後書き〕

そのまま書いて投稿すると長くなり、違和感があるので分けます。
次もこの続きです。

閑話 劍聖に師事す〔後編〕

一日目

義輝はト伝の言う通りに明朝に教えを乞い、師事し始めてから約一刻。

「ふっ、はっ、やあっ！」

気合の入った掛け声に合わせて、横薙ぎ一閃。縦に一閃。そして斜め下に向かって振り下ろして袈裟切り。

義輝は汗を流しながら必死に真剣を三つの斬撃を順に振るう。その工程を終えては赤と青の御伴からの拍手が起くる。

その光景をつまらなさそうに日陰から見やる男が一人。ト伝である。

「まったく、元気なチビだ」

彼が日陰にいる理由はただ一つ。炎天下の中でずっと立っているかという、自分の楽を優先させた結果であった。

今の季節は夏の真っ只中の文月（旧暦の七月）の時期にある。

涼しかった明朝をお天道様は焦がすように強い陽射しを発して、暑くさせた。その中でも義輝は休むことなく、真剣を振り続ける。

「これで……ハアハア、どうじゃろうか？」

途中、真剣を振るうことをやめて、荒くなった息を整えながら義輝はト伝に指摘を求めた。

明朝から何度も指摘された点を改善できたかどうかの確認だ。

「剣筋がぶれる。遅いし、相変わらず腕だけで振ってえんだよなあ。基礎すら出来てねえよ、チビ。オメエは弟子の中じゃあ最低だ」

「むう……」

表情を固くして不満気ながらにト伝の指摘を受ける。自分では改善しているつもりなのだが、まだ駄目だと言われるとガツカリする。どこをどう改善すればト伝に及第点を貰えるものか……。

「腕だけで振りゃあ、人は断ち切れねえんだよ。刀に身体の重さを乗せねえと。乗せるにはどうするか、刀を振ると同時に足を一步前へ踏み込め」

何度目か分からないほどにこの同じ指摘を義輝は受ける。

振ると同時に足を一步踏み込む。その動きを意識しながら真剣を振るった。

何度やってもこの動作でいいはずだが、ト伝の表情は変わらずつまらなそうだ。

「……………けっ、見てろ。手本だ。」

ト伝が炎天下に姿を晒して己の愛刀を鐔を親指で弾き、引き抜いた。

その刀は無銘。世間から見れば名刀とはほど遠い極々普通の刀。だが、異質な点が一つあった。それは刃の長さが三尺（約一メートル三十センチ）ほどの長刀であること。これは義輝が扱えぬまま所持している『備前長船長光』と同じ長さだ。

一般にこの長さの刀は帯刀している場合、途中までは抜くことはできるが最後の切っ先までは引き抜くことはできない。刀が長すぎるのだから当然だ。

長刀を引き抜くためには腰から外して垂直に引き抜くしかない。しかも、普通の刀と比べて引き抜くのに時間が掛かる。

そのため、長刀は帯刀からの切り合いに入るのに使用するのには無用の長物、『物干し竿』と蔑称される。

だが、ト伝はもたつかずに手馴れた様子で引き抜いた。

横薙ぎ一閃、縦に一閃。そして、斜め下に振るって袈裟切り。

その場の三人がト伝の動きに見入った。剣聖の動作は芸術的。一つ一つの動作は鋭く風を切り、力強かった。義輝の剣撃と比べるまでもなく、人を一瞬で死に至らす剣撃だ。

義輝の剣撃は実に幼稚。ト伝の速さにも追いつかず、力強くもない。こんなもので人が断ち切れるわけがない。

義輝はト伝の剣撃を頭の中に投影する。この動きを模倣すれば良い。いや、模倣しかない。今は模倣することで学ぶしかないのだ。動きを思い浮かべ、いざ振るう――

「終了、朝餉を食うぞ」

やる気の無い声に合わせて真剣を取られ、振るうことは叶わなかった。

今振るえば何かが掴めるかもしれない義輝にとって、その一声は受け入れがたいものである。

「あと一振りだけじゃ、最後の振りをさせてくれぬか？」

「却下だ。腹が減ったから朝餉だ。朝餉。飯つてのはなあ……重要なんだ。腹が減っては力は出せねえ。

ま、飲まず食わずである境地に至ることもあるが、そりゃあ稀だ」

「じゃが！」

「それにチビよお、その手で続けると悪化すんぞ？ 手当てしとけアホ」

慇懃に言い放つとト伝は部屋へと一足先に戻っていった。

彼が去ったすぐ後に義輝の手に三人の視線が集まる。本人は目を丸くしただけであったが、藤孝と幽斎はそれでは済まなかった。

手の有り様を見るや顔を真っ青に染めていた。驚愕という表情。

「あわわっ！ 血！ 血！ ひどいじゃないですかっ！？」
「誰かつ！ 医者は今すぐに連れてこいっ！ 今すぐ大至急にだ！」

小さなその手には血溜まりが点々と出来ている。長時間真剣を振り続けてマメを生じ、潰れた結果がその手にあった。

指の付け根の部分に血マメが親指の内側面は皮が剥けて、肉を露出し血が滲む。

針で突き刺されている痛みを生じ、普通の者ならば歯を噛みしめ我慢する。だが……義輝はそうはしなかった。誇らしげにその傷を眺めた。

目に見える傷を作ったのはこれが初めてだったのだ。

——数分後、医者の治療によって、阿鼻叫喚とした少女の叫びが坂本城に響いた。

「なんとも……まあ……。目測を誤ったかねえ」

ト伝は義輝の素振りを観察して、しみじみと呟いた。出来の悪い弟子と烙印していたのを、反故にしないといけないほど義輝は成長していた。

初心者が剣術の基礎を身に付けるにあたって掛かる時間は、最短で三ヶ月。しかし、まだ余分な動きがある。

そのために余分な動きを削ぎ、完全に習得するに更に半年。これedyouやく基礎は完成する。

この過程を義輝は若干の余分な動きはあるものの、二週間半で完成させた。

ト伝が育てて来た弟子の中には覚えも速く、強くなる者は出ていた。

例えば、真壁氏幹。彼は才ある者であった。基礎を半年で終えて五年間棒術を習い、戦場に出ていき名を上げた。

約一丈（約三メートル）ほどの木棒を扱い敵兵を蹴散らす様から、いつしか真壁は『鬼真壁』と呼ばれる。真壁はその異名が気に入ったのか半面の鬼面を被り、生活している。

怠惰な弟子であったが才を持つていたがために強い。特に棒術においては師のト伝ですら苦戦させられる。

真壁が強くなるだろうというのは、練習光景を見て、ト伝の直感がそう告げていた。その感が今。この場で義輝に対して働いている。もしかしたら……いや、確実に彼女は弟子の中で一番成長する。確証はないが、数々の剣士を見て培った観察眼と直感からしてそう判断した。

しかし……すぐに見極めることができなかつたとは、己の身はすっかり衰えちまつたもんだ。
やれやれと手の甲に顎を乗せる。

「しかし惜しいな……実に惜しい奴だ。全てを教えてやりてえのに……」

眼を細めて弟子が繰り出す力強い剣撃を見据えながらト伝は呟く。
目測によれば近い将来、小さな体躯ながらも大人を負かすほどの
剣術を彼女はきつと身に付ける。
理由などない。その才を論理的に説明することは誰にもできない。
異質な天武の才能。

——人、それを天才と呼ぶ。
飲み込みが速く、しっかりと物にしている。

剣術だけで終わらせるのは何かと勿体無い。他の武術——ト伝流
の全ての武術を義輝に伝授したいという考えが浮かぶ。

されど、それは叶わない。今の義輝の立場にそんな余裕はない。
流浪中の将軍が目指すのは帰京。それも年内か来年以内に帰京する
ことを目標としているため、武術を学ぶ時間はそんなに取れない。
なんとも惜しい。生まれが名誉も誇るべき血筋でなければ、剣士
として活躍できただろうに。

「……ああ、止めだ止め。くだらねえことを考えしまった」

馬鹿なことを。將軍じゃなかったら、逢うこともあるまい。

それに義輝が將軍でなければト伝と会うことはなかった。思い出してみよう。

ト伝を無理やり招いたのは將軍である義輝だ。將軍という地位に就いていたからこそ、ト伝は義輝に出会えた。

そう思えばこれは運命さために思える。人の思惑を超える何らかの意思というべきか、神秘的なものが働いている。

「我、天命知る……ハハツ、なんてな。いや、案外そうかもしれねえな」

のそりと立ち上がり、義輝が素振りをしている傍らで盛り上がる二人の前に立つ。

が、二人は目の前にいるト伝から立ち位置を変えて義輝の素振りに見入る。

「おい、青いの」

「最高です！ 義輝様！」

幽斎に声を掛けたものの、反応すらせずに義輝の応援に集中していた。

「おい、あか——」

「うるさい、黙れ！」

「お、おう……」

尋常ならざる異様な気に圧しのされ、肯定してしまった。どんな相手にも圧されることが無かったト伝が、始めて圧された

なんたる恥、なんたる失態。そして、なんだこの忠犬はっ！？

心の内で動揺しつつ、二人を見やる。頭から獣耳がひょこり、お尻の辺りから激しく動く尻尾が現れた。

「んな！？」

目を擦って再び見やる。……何も無かった。はてさて、先ほどの幻覚か……。

幻覚が見えるほどになっていたとすれば、死期が近づいているのだろうか。

「ふむ、いつ死のうが関係無いがな。おい、チビ！」

「は、はい！ 何じやろうか、お師匠さま！」

「稽古つけてやる。従者に木刀を持ってこさせこい」

「

「それでしたら、もう用意してありますよ」

間延びした声を発しながら、幽斎がいつの間にか木刀を持っていた。

その場から動かずに何故か木刀を用意していたのだから、ト伝は言葉を失った。

「オイ、待て青いの」

「はい、なんでしょうか？」

キョトンとする幽斎に対してどつから……と言いたかったが、ト伝は口を閉ざした。

くだらないやり取りも稽古の方が大事だ。不毛な口論なんかして
いるひまではない。

「いいや、貸せ、その木刀」

「はうい」

幽斎から木刀を二人は受け取り、互いに向かい合い構える。
構えは双方とも剣先を相手の喉に向けた中段の構え。

「一太刀でも喰らったらそこまでで仕切り直す。原則はそんなもん」
「一太刀だけで終わりじゃと」
「おう、ト伝流に二撃目はねえ。基本は一太刀で決する」

義輝にとって好都合か、いや不都合だ。腕の差がハッキリしているのに、一太刀で終わりとは、非常に厳しいものがある。

だが、それが現実だ。一太刀でも受ければ、動きを少なからず鈍らせる。鈍ったところで二撃目の餌食となり、死に絶える。

戦場や斬り合いにおいて、攻撃を喰らわないことが重要なのだ。

「あとな一撃必殺の心構えを教えとくわ。天の時、地の利、人の和。これら三つ揃わせれば一撃必殺となる」

「はあ……どういう意味じやろうか？」

「ふはははっ！ テメエの頭で考えろ、肌で感じる、感覚を掴め」

しかめっ面になって義輝が、意味がわからなそうに悩む姿を、ト伝は面白そうに笑った。

天の時、地の利、人の和。

これはト伝の極意である心構えだ。極めて極めてはてに開眼したもののだから、始めたばかりの義輝には理解できるものではない。

「ま、とりあえず覚えとけや。始めるぞ」

「あ、ああ……はい！」

義輝は背筋を伸ばして構えをとる。少しも間違いがない申し分ない構えだ。

続いて、満足したような目で見ていたト伝も構え直す。

刃の部分を下に向けて左脇に腕を引く、左脇構えをとった。

「む……？」

「何なんだろう？」

「分かりません」

三者とも疑問の色を浮かべる。

ト伝のとったこの構え、義輝から見ると木刀が身体に隠れて見えない。

恐怖である。見えないということは動きを予測することもできない。

「むう……」

「どうした……？ 来ないなら此方から行くぞ？ バカ弟子」
「いやっ！ わらわから行く」

一拍間を置いて、義輝が間合いを詰める――

「ふんっ！」

と、すぐさまト伝がその場で低空に木刀を思いつきり投げた。
木刀は右回転しながら義輝に迫る。

「なっ！ あーーーー痛ッーーーー！！」

何の対応もできずに木刀は義輝のスネへ吸い込まれるように直撃した。

これは痛い。スネに当たると、それはもう言語化できないほど痛い。

義輝はスネを擦りながら、地面をのたまわった。

「義輝様っ！」

「大丈夫ですか？」

藤孝と幽斎は、たまらず義輝に駆け寄り、心配そうに見つめる。すねには青黒く染まった部分があった。そのことは、内部で血が吹き出たことを意味している。

「うわっ……痛そ」

「貴様がやっただろうがっ！　　というか……」

「卑怯……ですね」

他人事のようにその状況を眺めるト伝に二人は非難の色を示す。

確かに木刀を投げるという行為は、正道とは言えない邪道だ。

しかし、ト伝の思想には勝利に正道も邪道も関係ない。どのような手段であれ勝利したことは変わらない。

勝利のためには小細工も卑怯も容認するのがト伝流。

「でも勝ちも勝ちだ。卑怯あろうが正道であろうが勝ったことには変わりねえさ。ああ、でも真剣じゃ脚斬ったくらいじゃ死なねえか」

ト伝は先ほど投げた木刀を拾い、義輝の首筋を斬る素振りをした。

「はい、首チヨンパ。足利將軍討ち取ったり……なんてことも有り得るぜ」

茫然自失とする三人に対して、ト伝がカラカラと一人笑う。
そうして、ひとしきり笑い終える。

「しかし、道から外れておるではないかの？ 武の道から……痛ッ」
「はああ、戈^{ほこ}を止めると書いて武と習った口だな、それは。オメエらもか」

その問いに藤孝と幽斎も頷いた。二人はそのよう習い、義輝に教えた。

戈^{ほこ}を止めると書いて武。すなわち、戦闘を止めるために武は存在するということだ。

これが武の存在だと、三人は思うのだ。

「うん、んなもん、クソ喰らえだ。世を見る、みくんな戈を執って争ってやがるじゃねえか。問題は……どっかが全く機能してねえかなあ」
「うぐっ……」

ニヤリとト伝は笑みを見せながら発した言葉が義輝を貫く。
まったくもってその通りである。各国が戈を持って戦闘を行なって争っている。

その戦闘を起こさせないために抑止力として、武の頂点に立つ義

輝がいる幕府が存在するのだが、機能していないがために国が戦乱を起こす——戦国の世になったのだ。

「ま、でも最近はや安定しつつある見てえだぞ。三好の幕府が執る政策のおかげでな」

「三好は逆臣だ！ 義輝様に戈^{ほこ}を向けた」

「そうかもしれないが、民に不満は出てねえ。何で分かるか？ 三好は力の使いどころを弁えているし、何より規律が厳しい。聞いた話じゃあ、京で狼藉を働いた三好の兵がお偉いさんから即首チョンパだそうだ」

苦笑しながら親指で首を真横に切って、断首の意をとった。そしてすぐに「ナミアミダブツ、ナミアミダブツ」呟く。

ト伝の話本当のことで、安定していることは事実である。そして、狼藉を働いた兵が首チョンパされたのも事実である。

首チョンパされた兵の首は三条河原に晒され、民を畏怖させると共に感心を買ったとな。

「三好と組んで国を治めるというのも一つの手じゃねえか。チビの性格からしてねーと思うけど。ま、あるんだったら京の松永弾正を訪ねりゃあいい」

「敵に頭を垂れるのは出来ぬ」

むっとして忌々しげに義輝は拒絶した。

敵対関係にあるので、組むから国を治めましょう、はい一緒にや

りましよう、とはいかないのだ。

將軍から下手に出れば、どうせ体のいいように利用されるのは目に見える。そんなことは、義輝の誇りが意地でも容認できない。

「そりやそうだ。オレもチビの立場だったら、同じように思っわな。和睦というのを勧めたのは、ただ単に第三者の立場にいるからだ。だから、聞き流しとけ。チビのやりたいようにやればいい。

しかし、道を間違えることもあるかもしれん。そんなときゃあ、反省はしろ。後悔はすんな。反省は今後の糧になるが後悔は何も得ねえ」
「要するに唯我独尊であれということですね」

手をポンと叩いて藤孝が場を締めた。

少し何かが違うような気もするが、とりあえずはそういうのである。

「ならば、強くならねば！ 強くなって幕府を取り戻すのじゃ！」

勢いよく立ち上がった義輝は、信念を抱いた胸を張った。威風堂々――

「あいてててッ！」

とはいかなかった。

幕府掌握（6）

明朝に伝令兵が慌ただしく三好屋敷に礼も取らずに飛び込んだ。
た。

彼は息を切らしながら廊下を駆け、なおかつ声を張り上げる。

「長慶様！ 長慶様！」

「長慶様は不在でござる。將軍様に何か動きでもありましたかな？」

この時期も長慶は京にはいなかった。その代わりとして康長が顔を固くして対応する。

伝令の慌ただしさからして、良くないことが発生したのだろう。

六角と將軍が如意ヶ嶽に築城してから一月が経過し、季節は秋の収穫を終えた初冬。百姓の仕事が少ないため徴兵を行うことができる。

つまり、敵方が兵をまとめて、仕掛けてくるなら今だろうというのは、何となく予想はついていた。

予想はしていたが、三好の本心としては、できれば將軍とは矛を交えたくない。平和的に和議でも結びたかったが、三好から持ちかけるというのはしなかった。

無論、將軍方も持ちかけることはしない。簡単な話、双方の案が噛み合わないことが分かっていた。

將軍方は三好が京から出ていくことを望み、三好は晴元の排除に京の支配権を望む。

互いに当家が正しいとして主張を譲らず、その結末が現在の状況となった。

「如意ヶ嶽に築城された城に兵が集結し、旗がはためいております」

「ついに来ましたか。將軍様と矛を交える日が」

「動きましたかっ!？」

次いで颯馬が康長と伝令の間に遅れて混じった。康長はただコクリと頷くと、颯馬は己の頬を叩いて気合いを入れた。

そして、行動を思索する。まずすべき事は京の郊外に待機させていた兵を呼び寄せること。兵がこちらへ向かっている間に久秀を呼び寄せ軍議を開く。

軍団構成は康長が大将を務め、久秀と颯馬が攻めを担当する。総兵力約七千、この数が三好の限界常備兵力である。

対して敵兵力は不明。斥候でも放ち、兵力を計る。兵力が三好よりも上回るか、同等であれば援軍を呼び、到着まで堪える。

そんなところだろうか。

「そ、それと……寺に軟禁させていた者たちが逃亡致しました」

「何ですと!？ そんなことは起こりえないはずですぞ」

康長は驚愕を禁じえない。声には出さなかったものも、颯馬も啞然とした様子から動揺していることが窺える。

寺に軟禁していた者たちとは、晴元に加担していると思われる家。いわば不穏分子だ。

彼らの逃亡先は一つ、三好と敵対する將軍の元しかない。しかし問題は、なぜ逃げ出すことができたのかということ。軟禁先の寺の

周りには、ネズミ一匹も入る隙もないほど、三好の兵を警備に当たらせていた。

軟禁者の監視、寺に入る者への厳重な検査と身分調査……逃亡することはおるか、逃亡を手引きすることが入ることは極めて難しい。

「こんな時に……間が悪い」

苦々しく顔を歪めて、下唇を噛み締める颯馬。本当に間が悪い。目前に戦が迫っているのは、手引きした者の調査などしてられない。いったい誰が何の目的で——というのは考えるまでもない。この件で得するのは將軍方、彼らが事を起こしただろう。

一つ、颯馬は伝令に質問をする。

「昨夜から明け方にかけては異常は無かったのか？」

「特にはございません。朝になったら忽然と姿を消していたのとです」

「ふむう……おかしい話ですな。百人近くの人数が逃亡したならば、何かしらの兆候があってもおかしくは無いはず」

康長が言うように、実に妙な話だ。厳重な警備に何一つ悟らせず逃亡するとは、ありえない話である。

いや、誰にも悟らせずに行動する者はいる。隠密、間者、工作をなりわい生業とする者——

「確か……六角は忍を抱えていましたよね？」

「甲賀衆……！ いや、しかし……」

ハッと気付いたように康長が六角が抱える忍の名を言った。

六角を支える甲賀衆という影。その者たちならば、誰にも悟らせずに忍びこめる。

忍びこむだけであれば、赤子の手を捻るように簡単だ。しかし、問題は如何にして老若男女問わず混じっている、百近い人数を連れ出すかということ。

如何にして……連れ出したかを颯馬は思考する。

「可能性としては…… ああ、迅速な伝達ご苦労だった。すまないがもう一仕事頼めるか？」

「ははッ」

「待機中の兵への連絡、それと松永殿をここへ」

「では、今すぐに」

新たな命を受け取った伝令兵は、すぐに三好屋敷から飛んで行った。あの足の速さなら松永屋敷まで時間はそれほど掛からない。

掛からないが、もしかしたらその間に將軍方が攻めて来るのではないかと、颯馬は内心ヒヤヒヤする。

思えば、まともな合戦はこれが初めてだ。これまでの戦といえば、敵が弱っている状態での追撃戦、築城中のところを強襲。

今回の戦は互いに万全での戦いとなる。すなわち、兵の質と数に指揮官の戦術を総合した戦いだ。

想像すると思わず身体が震えた。己の戦術によって敗北する恐怖と、戦を前に昂る思いの両方の意味で身体は震えた。

震えは数秒ほどで静まり、颯馬は一呼吸して息と共に言葉を吐き

出す。

「如何にして逃げられたか……ですが」

「何か気付いたことでも？」

「推測ですけど、警備兵は異変を感じなかったのではなく、見過ごしたのではないかと。警備をさせていた兵は正規では無いはずですから、金で動かされたのでは」

颯馬が顎を手で擦りながら淡々と語る推測に康長は相づちをうつた。

農兵の大抵は生活苦であるから、金に目がくらんで動くことは、ありえない話ではない。

「むむむ……しかし、敵に金で買収されたという証拠がない」

「いえ、買収したのは敵じゃないです。たぶん、彼らは話に乗っただけだと思います」

「まさか……謀叛者がいると」

「謀叛……謀叛というには語弊がありますが、まあ、そのようなものでしょう」

信じられないといった顔で恐るおそると康長が低く聞き返すと、颯馬は微笑する。

肯定の意に康長の額に汗が滲む。今、彼の頭の中で家中の誰が謀叛者は誰かと問いをしているのだろう。

三好政康、三好長逸、岩成友通……一度だけ顔を会わせた家中の顔を、颯馬は思い浮かべる。皆、従四位下の官位を持つ重臣たちで

ある。

無論、目の前の人当たりの良い康長も、河内半国をを任せられ、官位を持つている。官位や領地を任されるのは、見合うだけの働きや忠誠があるからだ。

それに三好家臣団は、晴元に叛いて阿波から蜂起した者ばかり。そんな彼らが寝返るなど考えられない。

「安心してください。家中ではありません」
「では誰が？」

康長は颯馬の答えにホツとして額の汗を拭った。それとついでに薄い髪もふんわりと整えた。

数少ない毛根が抜け落ちぬように……赤子の頭を撫でるようにして整えた。

薄毛は縁の下を支えたり、家臣団の争いを仲裁したり（主に冬康と一存の喧嘩）と、苦労している証である。

「これは傀儡管領の下らぬ策かと。適当な理由でもつけて、淀城へ正規兵を二百ほど回しましょう」

颯馬は呆れと侮蔑混じった表情で、三好に害なす獅子身中の虫を管領氏綱と断定した。

仮にこの推測が外れていても構いはしない。不気味なほどに大人しくしている者ほど、腹では何かを考えている。

策謀の芽を潰すために、警告の意味で兵を管領のもとに向かわした。

——日がようやく昇りきった頃の話であった。

如意ヶ嶽に築城された『中尾城』という城の前で將軍義輝は藤孝と幽斎と共に京を見下ろしていた。

家々が並び立ち、先祖の建てた慈照寺（銀閣寺）が映る景色は趣深いものがある。

無論、市中に忌々しくたなびく、三階菱の釘抜きの家紋が刻まれた三好の旗がなければの話ではあるが……。三階菱の釘抜きは、甲斐源氏の流れを汲む小笠原氏から派生した庶流の家紋。三好氏は阿波を拠点とすることから阿波小笠原氏と称する。

阿波小笠原氏を名乗るのは三好氏だけではなく、阿波の武士のほとんどが名乗っていた。つまりはたまたま、阿波を制したのが三好氏だから、真偽はともかく三好氏が阿波小笠原氏であるとされる。

しかし義輝にとつては、だからなんだとの話である。所詮は一方の豪族で、その上に立つのは武士の棟梁である足利氏だ。血筋で言えば、庶流の三好氏など格下だ。

「ようやく……ですね」

「うむ、ようやくじゃ」

幽斎の呟きに同意した。京から逃げ出して約半年、世から流浪將軍なんて渾名で呼ばれ続けた屈辱を堪え忍んだ。

そして、六角から兵士を借り入れ、攻撃拠点となる城も完成した

今、屈辱を晴らす時が来た。

「三好なんて家はパツと追い出してやりましょう、義輝さま！」

「当然じゃ！ 幕府を好きのままにする小悪党にわらわ達が負けるわけがない。じゃが……晴元は参戦せんで武器だけ寄越したのう。何という名じゃったか、あの小さい木筒」

眉を寄せて義輝は気筒の名前を思いだそうとする。

此度の戦に参戦しない晴元が寄越したものは、何でも堺の商人らが南蛮人から購入したものを、解析して開発した最新武器らしい。刀のように斬りつけるのではなく、槍のように突くのではなく、弓のように目一杯弦を引いて放つのではない。

ある工程をこなして、引き金と呼ばれる箇所を指で軽く引くだけでよいという武器である。

「たしか……鉄砲と呼ばれる武器——だっ たっ け？ 幽斎」

「晴元様からはそう聞かされましたね。なんでも引き金を引くと筒から球状の鉄が高速で飛ぶらしいです」

幽斎が思い出した説明に義輝は納得した。確かに、そんな感じの説明を受けたような気がしないでもない。

「うゝむ、鉄の塊が飛ぶなんて半信半疑じゃのう」

「たしかに……」

「本当に飛ぶんでしょうかね？」

聞かされた鉄砲という武器の性能に対して義輝らは頭を捻る。

ただの鉄の塊が、変な形の木筒から高速で飛び出すということが想像もつかないのだ。

そもそも何故高速で飛び出すのかも理解できないし、鉄の塊で人を殺めることができるのか、甚だ疑問である。

三人は、鉄砲は投石器のようなものとしか認識できない。実際に鉄砲の性能を、目の当たりにしていないので、そう思うのも無理はない。

「あのうゝ、上様」

「おお、義賢、準備は整ったか？」

遠慮がちな声色と共に、ぎこちな動きで現れた少女を義輝らが視認すると、藤孝と幽斎は主の両隣に控えた。

現れた少女の名は六角義賢、將軍家を支援する六角の次期当主である。

肩をすくませて両手を重ね、伏し目がちで義輝の前にいるその姿には、自信と呼べるようなものは存在しない。

義賢の武士にはあらぬ立ち振舞いを見ると、なぜ武士らしく自信を持たないのかと義輝は少々もどかしく思う。

だが、それは価値の違い。生まれの違いである。まあ、義賢の都合は元からの性格の色が普通とは異なるという話だが。

「はい……いつでも出陣可能です。鉄砲を使用する者の調練も一応

「終えました」

「うむ、ご苦労じゃった。すぐにでも仕掛けよう」

「上様の命令とあらば、そのようにいたしますう」

義賢は手の甲をモジモジと擦りながら、視線を横目やら斜めやらに動かす。

落ち着きのない姿は小動物を連想させ、男の庇護欲をくすぐるだろう。

しかしその姿を見ると、義輝はイライラとし、背中も疼く。家を背負う将らしかぬ卑屈な態度を、今すぐにでも改めさせてやりたい。

「……我慢してください」

「……藤孝と同意見です」

傍らに控える御伴の囁き声の諫言がなければの話だが。

まあ、義賢はこのような性格でも将としての政治判断、内政手腕、戦術は確かである。

中でも感嘆したのは城下の座を解散させて商業自由化したことである。誰もが商売できる環境にしたことで商人が集まり、経済が活性化した。

結果、農耕が中心の北近江に、商業という収入源を得たことで国が栄え、小国でありながら強国となった。

商業を自由化する——いとも簡単そうに思えるが、実行に移すのは難しい。

自由化すればお抱えの商人との繋がりが切れ、必ずしも成功するとは限らないのに、義賢はやったのけた。

という話を義輝は聞き、さぞかし豪胆な人物であろうと思ひこん

でいたら、真逆の性格にガツカリとしたのは真新しい出来事である。

「まあ良いじゃろ。六角には世話になっておる。感謝致す」

「ありがたき幸せです」

ここまで来れたことに感謝の意を告げる義輝。そわそわとしながら答える義賢。

自信に溢れる者と自信がなく内向的な者。まったくもって相対的な性格だ。だが、どちらも未知なる力を秘めている。将としての才覚を。

「では参ろうか！」

「ううう……三好との戦いかあ……帰りたい。でもお仕事だし……」

彼女たちは、三好の旗がはためく京に背を向けて中尾城の陣に向かった。

陣内には六角の正規兵、農兵の混成部隊が直立不動で待っていた。割合で言えば、四対六と若干農兵の方が多い。

正規兵は士気旺盛だが、戦に駆り出された農兵の方は、士気が低い。さもあるう。金で釣られてというのもあるが、半ば強制徴兵に近い形で集められたのだから。

戦乱の世で人の死が近くにあり、慣れているとはいえ、実際に戦うとなると恐怖を感じる。

恐怖を感じることは、戦場で火事場の馬鹿力を生み出すことある。しかし、正常な判断が出来ずに、身体が動かずに死ぬ者が多い。

彼らを死なせないためには、恐怖を打ち消し覚悟を持たせること

である。すなわち、兵士を鼓舞することが一番である。

「みなもの、わらわのためにご苦勞である」

鼓舞するのは將軍義輝。兵士たちの士氣は瞬くまにうなぎ登り——とは行かなかった。

將軍が年端もいかない小柄の少女なのだから、その反応は当然と言えよう。兵士たちは將軍が少女である話は、噂などでよく知っていた。

曰く、世間知らずの將軍。曰く、哀れな流浪將軍。曰く、劍聖の弟子。曰く、名刀の蒐集家。

他にも色々と噂があるが微妙な噂が多い。というのも、義輝には功績が無い。誇ることでできる武勇や治世も無い。更には応仁の乱以来、安定しない將軍家のこともある。

だから、兵士は内心では大したことないだろうと低くみていた。

「こたびの戦の目的は京から三好を追い出し、父上と共に帰京する。そのためにも、みな力を貸して欲しい」

ありふれた言葉での話はここで切れた。正規兵の一部の心は燃えたが、残りの兵士の反応は微妙、不完全燃焼といったところだ。その間を藤孝、幽斎、義賢はそんな空気を察知した。

義賢にいたっては、その空気に紛れて陣の隅へと行こうとする。が、藤孝と幽斎に挟まれて指定の位置へと戻された。

「いかに強大な三好であろうと屈することはせん。わらわは勝利するまで戦い続ける！ 何故なら將軍だからじゃ、それ以上に理由はらない。もう一度言つ、わらわは將軍だからじゃ！」

兵士がザワリとどよめきを起こす。義輝の言葉に重みが宿る。力強い声に満ち溢れる自信。なんとも頼りになる將軍である。

兵士たちの関心が義輝へと集まる。流浪將軍と馬鹿にされていた彼女へと。小柄な少女に畏怖を感じて、身震いした。

年下の少女に何故、畏怖を感じているのかは彼らには分からない。だが、理屈などいない。

「厳しい戦になろう。不利な状況にも追い詰められよう。しかし、案ずるが良い、わらわたちが必ず勝利する。わらわはそなたたちの力を信じておる。逆賊なぞに負けぬことを。もし、仮に絶対に逃げられぬ状況に追い詰められたときは――」

言葉を区切った。義輝は兵士たちを見回す。己のために死地に向かう者たちの顔を、一人でも多く覚える。

それは兵士を率いる者として、当然のことであろうと考えているからだった。

「――公方らしく戦場にて散りたいと思う」

威風堂々と言い切ったそこには、少女の姿はなかった。いるのは、將軍としての誇りと責務の重みを背負った武士だ。

一筋の信念を身体の中に通していた。折れることも曲がることもない、刀が中に存在していた。

紛れもない、彼女こそが武の頂点に立つ者だ。武士の在り方をしかと心得ている。利より名を。恥より誇りを。

愚直で華々しい武士を体現していた。

誰かが呟いた。

——尊氏公の再来だ

語り継がれる英傑、足利尊氏は自らが率先として戦場に赴き、武を振るつたと聞く。武士とは何かと理解し、武士と太平のために働いた。武士はみな、尊氏公の下ならば死んでも良いと思つたらしい。この場の兵士もそうであつた。義輝の下ならば死んでも良いと思つた。惹かれたのだ。眩い光りを放つ義輝に。

これほどの者がおるうか。これほどの將軍が今までおるうか。否、語り継がれる初代と三代目の他は、彼女に遥か劣る。

兵士らは感極まり、晴天下で雨を溜めて一滴。頬に流れた。そうして数秒——

嗚咽混じりの雄叫びが中尾城の陣中から上がった。

將軍方の軍は士氣旺盛。かくて戦は始まる。成り上がり土豪と武の頂点に立つ者の。

——京から遠望する山は、青空を背景に、傘を被っていた。

幕府掌握（6）（後書き）

景「『なぜなに戦極姫』！ 今回の疑問は『足利尊氏って英傑？』だ！」

政「いつになく張り切っているな」

景「3はリストラされたからな我らは……フッフッフ……そんなに百合はいらんか」

政「いやまあ、リストラされたのが口惜しいのは判るが……。それは他の皆も同じだろう。最上は滅びて欲しいがな」

景「ハア、成実と鬼庭様が妬ましい。なんで二人はリストラされない……」

政「おーい、小十郎？ ダメだな、これは……。しばらく戻ってこない。私がやるか……」

尊氏公は室町幕府を開いたことで有名なお方だ。しかし、現在では逆臣のレッテルを貼られている。というのは、江戸時代辺りからの評価で、戦国時代は紛れもない英傑だった。

何故、逆臣とされた理由は帝に関係する。尊氏公は南朝となる後醍醐天皇を裏切り北朝を確立した。これが南北朝の乱に発展して、結果は尊氏の北朝が勝利と。詳しいことをかいつまむと正統なる皇統は南朝にあつて、南朝を滅ぼした尊氏公は国賊に意識上でされた。代わりに南朝を味方していた楠正成が英傑にされて、江戸時代末期では勤王や倒幕を目指す志士たちに崇拜され、明治には国賊から外されて正一位の官位を授かったとのこと。

話をまとめると江戸時代に入るまでは英傑で、それ以降は人々によって逆臣にされた。歴史人物は多数の人の解釈によって善い者にされたり、悪者にされたりする。織田信長とか……武田信玄とか……。以上、カンペからだ。長いなコレ」

景「……3がダメなら4で返り咲いてみせる。4だ」

政「まだ帰ってこないな。ま、放っておくか。あ、戦極姫3をよろしく頼むぞ。買ったら伊達ルートをやってくれ」

幕府掌握（7）

淀城の傀儡管領氏綱はニタニタと笑みを浮かべながら、あぐらをかいて茶を飲む。

氏綱は今の京の状況が面白くてたまらない。將軍の侵攻、不穩分子の逃亡のこの二つが、氏綱に幸をくれるのだから。京が危機に晒されたり三好が失態を犯せば、自然と氏綱の管領として重要性は高まる。

京を導くのは三好ではない。京の導き手は管領である。つまり、氏綱は管領としての権限を取り戻そうとしていた。

「小娘の下に甘んじるワシではないわ」

管領に就いて以来の日々を思い出せば腹の立つことばかりで、一度も良かったことがない。傀儡管領の名は伊達ではなく、そのままの意味であった。

政治は長慶が行い、内政の承認も長慶が行っていた。氏綱が管領として機能しているのは、政治・内政報告を長慶の部下からたまに受けるくらいである。

本当に傀儡だ。氏綱は二、三回報告を受けて、あとは聞くのを止めた。ただ報告を受けるだけとは馬鹿ばかしい。

だから、少しばかり策を施して三好に混乱を落とした。軟禁されていた者たちの逃亡の手引きにちょこつと関わった。

限りある蓄財を放出して、下賤で愚かな見張りを買収し、甲賀衆に依頼した。

甲賀衆には、畏ではないかとかなり怪しまれたものも、多額の前払い金でなんとかこじつけた。

「ふふふ、ふはははははっ！　やはり今の世はここよ、ここ。お前もそう思うだろう？」

頭を指で叩き、氏綱は腹心の部下に問いかけた。

「は、おっしゃる通りでございます。武力では世は渡れぬものと思います」

「そうよ、そうよ。よくわかっておるではないか。さすがは我が腹心よ」

部下の言葉に気を良くして上機嫌となる。部下の言うとおりこの世は武ではなく智。

それもしたたか深い策謀は重要だ。三好は武や政治には長けてはおるが、策謀いうのはなっておらん。

ゆえに己の天才的な策謀は成る。

「それで主、この後はどう動かれるのですか？」

「知りたいか？」

「はい、知りたいです。しかし、お話たくないのであればそれでも良いです。この目で主の策謀を刻みますゆえ」

「ぬふふっ、少し教えてやろう」

「本当でございますか？」

氏綱は扇子で部下に近くに来るよう招いて、扇子を開いた。その様子はかなり重要なことらしいことを匂わせる。

部下は生唾を飲み込んで、耳を傾けた。

「三好はな……結束しておるようできておらんだ。小娘の下には虎視眈眈と……ぬふふふふ」

「お、おるのですか、ねら——」

「これ、言つでない。どこの誰ぞに聞かれでもしたら破産する」

「申し訳ございません！」

「よいよい、気にするな。ただ、いるというだけよ」

悪どい笑みを浮かべて、氏綱がこれからのことに思いを馳せていると、無数の足音が乱暴に近づいてくる。

足音は氏綱のいる部屋を開け入ってきた。

入ってきたのは甲冑を纏った数十人の兵士だった。

「無礼者、ここを管領様のお部屋と知つての狼藉か！」

「それは失礼、管領様に緊急のご報告がありましたゆえ参りました」

「なんだ、報告ならば一人で十分。そんな大人数で入ってこんでいいだろう？」

何かがおかしいと感じ、氏綱は部下に黙るよう視線を送った。大人数の兵士……もしやな、いやいやそんなはずはない。ばれるということは絶対にありえない。

それに氏綱が関わったという証拠が存在しない。

「実は寺に軟禁しておいた者らが、何者かの手助けによって逃亡致しました。加えて、坂本に流浪しておりました上様が六角と組んで京に侵攻してまいりました」

「う、うむ……前者は——知らぬが後者は聞き及んでおる。先ほどの轟音を聞いて肝を冷やしている」

慎重に言葉を選んで発言をすると、兵士はしてやったりという表情を浮かべた。

それを見て、氏綱を冷や汗を流す。何か失言でもしたか？ いや、ないはずだ。

「そのことでございます。管領様が肝を冷やされましたように、我ら三好も冷やされました。今の京は色々と物騒ゆえ、我らが警護致すよう康長様、颯馬殿から任を承りました。これからは我ら二百名が管領様に危険が及ばぬよう警護致します」

「いやいや！ それは不要だ。そこまで三好に負担は掛けられぬ」

完全に三好は氏綱を疑っている。

警護をつけるとは三好に監視されること意味する。そのことを理解した氏綱は、何とかして断ろうとした。

とすると兵士は目を瞑って唸りこんだ。

「それは困ります。我ら三好とって《管領様》は大事なお方。《不運》にもくせ者によって、お《死なれ》になられるのは望ましくな

い。どうか《分かって頂けますよね》」

「うぬう……」

ここで断ると氏綱は暗殺される気がした。ジリッと焦燥を感じて動揺する。

今の三好とつては管領はいようがいまいがどちらでも良いことだろう。何せ、管領を無視して幕政やら内政やらを行なっているのだから。

「……分かった。勝手にせい」

幾度も計算を繰り返した結果、氏綱は警護を受け入れた。もう己の負けだ。気付かぬままに己は三好によって詰んでいた。もうこれ以上どうすることもできない。

「は、では今日より警護させてもらいます」

「ああ……」

意気消沈と氏綱は応えた。

三好の方が一枚上手であった。だが……それはあの小娘の力ではない。配下の力であろうよ。

果たして……果たして小娘は配下に首を狙われていると気付いておるものか……。クハッ、叶うならば、あやつの絶望を望もうぞ。

この日より実質監禁となった氏綱は、三好長慶の不幸を心の底から願った。

さて、三好と將軍方との戦の始まりに時は遡る。戦場は慈照寺（銀閣寺）周辺の京市内。

市内と言っても民家がまばらにあつて、膝下まで届くほど草が繁つている程度で、多少の行動の制限が考えられる。

「上様も面倒なことをするのね。よりによつて今日だなんて、腹立たしいこと」

「なんか大切なことでもあつたか？」

ゆつくりと進軍してくる六角の兵を見据えつつ、颯馬は不機嫌な久秀に話しかけた。

その様子を見た久秀の兵が、一瞬どよめいたがホントに一瞬であつた。彼らは知っている。不機嫌な久秀がいかに危険かを。

己の命に反する者、気に食わぬ者はすぐに殺す。兵が何をしていたくても不機嫌であれば、難癖つけて殺すこともある。現に今日も一人死んだ。

触らぬ神に祟りなしである。触れても触れなくても祟られることはあるが、それでも幾分かは殺される可能性は減る。

よつて久秀の兵は、視線を逸らして六角の方へむけた。

「商人と会つて九十九茄子を買う予定だったのよ。それが戦のせい

で無くなつたわ」

「聞いたことも無い茄子だな。うまいのか？」

「九十九茄子も知らないの？ 足利義満公が愛用した唐物茶入れよ」

久秀は馬鹿にしたように颯馬に語るが、彼は気分を害した様子はない。むしろ、唐物茶入れ……？ と首を傾げた。

唐物茶入れ……大陸から伝来した茶器の一種。文字による知識と堺の今井屋に並んでいた茶器を記憶から引っ張り出した。

茶器は安物から一国の石高に匹敵するものもあると聞く。しかし、颯馬には名器と呼ぶようなものに価値を見いだせない。所詮、単なる土くれから作られた物なのに、どうしてそこまで価値が出るものだろうか。

「光沢を放つ深紫色に独特な丸みと普通の茶器より大きいのが素敵なのよ。永くじつとして眺めていると、深紫に意識が意識が沈んでいて、俗世から遮断されたわ。あの色はとても絶妙で不思議な魅力を持つてるの。初めて見たとき、あまりの素晴らしさに思わず息を呑んだわ。眺めているうちに愛着が湧いて、千貫で購入することにしたのよ」

「へー、千貫でねえ。千貫？ え、ちょ、茶器に千貫だつて！？」
「クスクス……千貫よ。たったそれだけで名器が手に入るなら安いものよ」

言葉を発しよう口を動かすが、言葉は出なかった。

茶器一個が千貫とはあまりにも馬鹿げている。季節にもよるが、米が一、二石買える。一石は毎日三食、一人あたりの米の消費一年分に値する。

よって千貫は安いものではない。これで安いというならば、金銭感覚がズレている。

「り、理解に悩むな。俺には何がいいのかさっぱりだ。茶器なんてどれも同じだろうに」

「違うわ」

久秀は柳眉をつり上げて、即座に怒りを含ませた言葉を返した。場の空気が凍てつく。もっとも、その空気に当てられたのは久秀の兵で、彼らの表情は瞬く間青ざめた。

記憶に深く刻まれた恐怖心がわき上がった。天城殿め、下手なことを言わんでくだせえ、と彼らは内心で嘆願するが、颯馬には知らぬこと。

「茶器は個々に侘びさびの味わいがあるのよ。この世に一つしか存在しない名器となれば、更に深みがある。名器は稀少なの、だから皆欲しがる。それに茶をたしなんでおくとか外交を円滑にすることもあるもの。」

外交が円滑にとは、茶を通じて個人的に仲を深めたりすることだろう。なるほど、一理ある。

茶は狭い茶室などで飲むが、外交・政治のためにも使える。密室ならば、内密な話や交渉も行える。

茶に通じている者に名器を送ったりして、買収することも可能だ。とすれば、茶に通じていれば何かと利を得ることがある。

問題は好きになれるのだが、まあ茶器や茶の良さを感じとれない者には難しい話だ。

「少しばかり興味をもったな、それは。是非、詳しくと言いたいとこだが……」

「ええ、これを終えてからになるわね。こんな戦、さっさと終わらしちゃいまして」

交戦開始範囲まで迫り来る六角の兵を見据えて、二人は気持ちを入れ替えた。

戦に駆り出された六角の兵にしては珍しく、今すぐにも襲い掛かって来そうなほどの気迫が宿っていた。

槍を奮い、弓を構えて声を張り上げて鼓舞する。命を惜しむ姿など一つも見掛けられない最高の軍団である。

一度解き放たれば、彼らは鬼神の如く向かってくるだろう。腕をもがれても首を跳ねられても喰らいついてくるにすぎない。

だが、恐れすぎる必要はない。簡単な話、先制攻撃で怯ませてやればいい。

「構え！」

颯馬の一喝により弓部隊が、六角の進軍に備えて斜め上方に狙いを定め、弦を引き絞る。

弓の飛距離は最大で百間（約180メートル）だが、それは極めた者の飛距離であり、最大飛距離は一般にはその半分くらいの三十間（三十三間（約55～60メートル））。更に有効射程距離は二十

間ほど。

六角の兵までの距離は目測五十間（約90メートル）、まだまだ射程範囲外である。

「ガッ！」

「え？」

弓部隊の一人が糸が切れたように地に伏すし、血溜まりが広がる。数秒間もがくように痙攣する身体で地を掻きむしり、動かなくなつた。

冷静に見てみると喉元に矢が奥深くに突き刺さっており、血が溢れていた。射程範囲外であるに関わらず矢が突き刺さっている。何故に？

「ギヒッ！？」

また一人、倒れて血溜まりが広がる。その兵も同じく喉元に矢を受けて絶命していた。

六角の軍勢に目を凝らせば一人の少女に止まった。陣軍の最後尾に弓を構えて騎乗している。

名を――六角義賢。

「……………」

オドオドとしたいいつもの義賢とは見違えるほどの真剣な表情で、弓を斜め前方に構えて弦を引き絞り、矢を放つ。放ち終わった後は普段の気の弱い彼女となった。

矢は吸い込まれるように、五十間先、いや六十間先の弓兵の喉元へと突き刺さった。

自然体で緩やかに弓を構えて、放つ。ただそれだけのことであるのに、ひどく華やかに見えた。

構え、放つ。凶矢によって一人、三好兵が崩れる。一人、また一人と射たれてく間、六角の兵が徐々に近づく。

「な、なんなんだあ、アイツ」

「あの距離からとか……ありえねえよ」

「木楯！ 前衛弓斉射しろ！ その後、最前列は木楯を立てて松永隊、進軍の援護！」

「……お、応！」「……」

拡がる動揺を打ち消すように下された颯馬の命に兵は応え、射程外の六角兵に向けて引き絞った弦を放った。

矢の雨——とまでは行かないが、進軍する六角兵に何割かの矢が届く。

致命傷とまでは行かない軽傷ではあるが、進軍を鈍らせるには十分。

そうして、命通りに最前列は矢避けの木楯を立てて、後列の久秀の部隊の進軍を援護する。

歩を互い進める三好と六角。距離がどんどん縮まり、もうじき白兵戦というところで六角が歩みが止まる。

「……。止まった？ 弓か？」

前衛となった久秀隊と距離を取りながら進む弓部隊を率いる颯馬は、止まった六角に疑問を持つ。

進軍する三好に対して止まった六角が取る行動は弓で迎え撃つことのみに。しかし、それは得策ではない。

「止まりなさい！」

前衛の久秀の声が響き、兵の足が止まる。飛び込めば弓の雨を味わうと、誰でも分かる所に進むわけがない。

にらみ合う両軍。すなわち、何も変化の起きない戦況の膠着が発生した。

三好は無理に攻める必要が無い。この戦で求められていることは、京の死守と援軍が到着するまでの時間稼ぎである。よって、進展の無い膠着状態に陥るのは好都合だ。

しかし、敵に好都合を与えろとは、何らかの策なのか、それとも単にうつけなのか。

誰も答えることなく、届かずとも、たまに矢を放っては挑発し合う。

経過。幾人かの軽傷者を互いに出しつつ、ただいたずらに時間を消費するのみである。

「ん……減っている？」

僅かに、ほんの僅かに六角の兵数が少なくなっていたことに颯馬が気づく。六角の後方が少なくなっているような気がする。

別機動隊ということか。ならばこちらも備えて……

颯馬が部隊分けを思考し始めると、六角が行動を起こした。陽動なのか、しびれを切らしたのかは知ることはできない。

仮に何の策もなく仕掛けてくると仮定すると、膠着状態にさせたのは六角ならば、脱するきっかけを作るのも六角。何がしたいのか意味が分からないとだけ言える。

「か、構えてください」

おどおどとした義賢の声と共に最前列に兵が十人、素早く歩み出て片膝をついた。

——奇妙な細い木筒を手にとって

失笑が三好方の兵から漏れる。意味不明、意図不明。六角は木の棒を構えているぞ。どうやら錯乱しているらしい。

と大いに嗤いが起こる。

「え、鉄砲……？ あ、あの強欲商人……売ったわね。あ、あ、もう、耳を塞ぎなさい！」

「鉄砲だ！ 皆、耳を塞げ！ 早く！」

木筒が何であるかを知る久秀と颯馬は、緊急の対策として耳を塞ぐよう命令するが、兵達は困惑して茫然と立っていた。

不自然なく調和している。

堺が鉄砲という新武器を作っていることを、颯馬は三好家に仕官する前から知っていた。最初は噂として知り、好奇心に駆られて商人見習いしている友人の一人に問い詰め、鉄砲の实在を吐かせた。

鉄砲の予想威力は聞いてが、三好軍を見る限り、予想以上の威力だ。

鉄砲の殺傷能力は、肝心の鉛玉があらぬ方へ飛んで行って分かりじまいだが、注目するべき点は音にある。人を恐慌状態にまで陥らせる威力は、これまでの合戦形式を全て破壊してしまう。いや、この合戦で破壊してしまった。

膠着状態の戦局が鉄砲によって打ち破られたのだ。それもたった一発で。一発でこの威力なら百発、二百発となればどれほどの効果が得られるか。恐らく、不利な戦況を覆すことができるだろうよ。

鉄砲の活用について颯馬があれこれと考えていると、二射目、三射目と立て続けに六角は鉄砲を撃った。

続く九連続の轟音に颯馬は現実へと引き戻された。耳を塞がなかったので、轟音にしっかりと鼓膜を貫かれた。

「くっ！ ええい、落ち着け！ ただの音に怯むな！」

必死に乱れる兵の鎮静化を図るが、混乱が混乱を呼んで兵の指揮が中々うまくいかない。久秀も颯馬と同様に鎮静化がままならない。中にはちらほらと逃げる兵もいた。

もうこの状態ではともに戦えない。戦局は完全に六角に呑み込まれて勝負にすらならない。

「総員掛かってください！」

三好兵にとって絶望的な宣言を義賢が放つと、六角兵は怒号を上げて前衛の久秀の兵に突撃する。

撤退するか……。槍や弓を持って突撃してくる六角兵を見て、颯馬に諦めが浮かぶが、直ぐに振り切った。

ここは撤退することが最善なのかもしれないが、相手は將軍方だ。仮に撤退して立て続け敗戦し、京を取られたらどうなる。言わずもなが、三好家の軍事敗北と政治敗北となり衰退するだろう。

それは絶対に許されない。ここは何としても混乱を治めて六角兵を打ち破らねばなるまい。そのためにはどうすれば……。

刹那に頭を回転させて知恵を絞る。

「やむ無しか……」

颯馬は顔を苦痛に歪めてボソリと呟き、腰刀を引き抜いて、己の横を通って逃げ出す味方の首を後ろから狙って振るった。

刃はすんなりと味方の首半分のにめり込んだ。

「ヒギッ！」

「あがああああッ！」

上がる血飛沫、上がる叫びが二つ。前衛と後衛。原因は味方を切りつけた久秀と颯馬だった。

現況において求められることは混乱を鎮静化させること。しかし、声が届かない場合はどうすればよいか。簡単だ。逃げ出せない状況

を作り上げること。

「逃げた奴は処刑する、応戦すれば報酬を弾んでやる」

「戦いなさい、勝ったら報酬は倍よ。負けたら……そうね、連帯責任で全員に地獄を見せてあげる」

混乱する最中で味方が指揮者に切られたことの衝撃で、一時混乱が収まって指揮者の命令が耳に入る。

似ているようで微細の異なる言葉が前と後ろで発された。二人とも恐怖による混乱の鎮静化を図った。

先に鎮静化したのは久秀の兵。身体に刻みこまれた恐怖が混乱を打ち消した。

「それで？ どうするのかしら？」

ぬとりとした血が粘着した刃を片手に持って、久秀はニコリと笑顔を浮かべた。

久秀の兵は肩震わす。彼らを感じたのは死という観念だ。敵によってではなく主に苦しみながら殺されるとう情景を思い浮かべて恐怖する。

「ア——」

大笑いする身体で槍をしっかりと握りしめて六角兵の方へ久秀の

部隊は向いた。

「アアアアアアアアアアアア！」

獣の叫びを上げて、突撃してくる六角兵へと彼らも同じように砂煙を起こしながら突撃する。

そこにまた轟音が一発、天を貫いた。今度はしっかりと軽装の鎧を纏う足軽の左胸に貫通した。

一撃必殺。

運悪く当たった久秀の兵は言葉を発することなく絶命し、骸となりて仲間に踏まれていく。

馴れぬ銃声に一時怯みつつも、主から来る恐怖で身を奮って突き進む。

「態勢を整えて久秀隊の援護！ あと伝令兵！」

「は、はっ！」

「本陣から援軍要請。六角は鉄砲を所有している。威力は戦況を左右するほどの力を持つと伝える」

「承りました！」

後方で簡潔とした指示を颯馬は下して混乱を鎮めた。久秀の部隊が持ち直して突撃してきたこともあってか、士気を取り戻しつつある。

あとはこの場で抗戦して持ちこたえることか。この戦況ならば少々厳しいものの援軍が来るまでには耐えることができるだろう。

無論、鉄砲を再び使用されたら予測はつかないが、今は久秀の部隊が近接戦に持ち込んだため、その心配はない。

鉄砲は高威力であれども、射撃可能に入るまでの弾詰めに時間が掛かる。それも精密な作業のため、この近接戦の中では弾詰めなどは行えまい。

「放てー！」

側面方向から誰かの声が聞こえたと思えば、すぐさまに轟音が再び走った。また、鉄砲だ。

「落ち着け！　ただ音が異様にでかいだけだ、列を乱すな」

兵に再び衝撃と動揺が走るが、さきほどより混乱は小さい。颯馬は状況を把握する。

伏兵は颯馬の部隊から見て側面方向の物陰より出現した。鉄砲を持った兵はたったの数人で総兵数は久秀が交戦している敵兵よりも遙かに少ない。

「だいたい二百といった奇襲部隊だろうか。」

「兵を分けて迎え撃つぞ」

颯馬の部隊、千のうちの八百を奇襲部隊に充てる。残りは久秀の部隊に充てた。そして八百のうちの七百を接近戦に備えさせる。

弓部隊は弓しかできないということはない。弓が人並よりも少し優れているだけであり、その他の戦い方もできる。

「逆賊三好！ 義輝様の名のもとに滅びなさい！」

敵方の奇襲部隊は足利家の旗をはためかせて、赤毛の藤孝を先頭に颯馬の部隊に突撃してくる。どうやら、鉄砲の使用は最初だけのようだった。

颯馬は下がって、弓部隊に射撃の用意をさせて、命を下す。放たれた矢は藤孝の部隊に降り注ぐ。

「ふっ、はっ、とりゃー！ こんなもので義輝様を敬愛する我らは止められない！」

矢の雨を受けてなお、藤孝らは突撃する速度を落とさなかった。中でも飛び抜けて、先頭を走る藤孝は矢を槍ではたき落して一射も喰らうことはなかった。

そうして、瞬くまに接近戦。穿ち、払い、突く……戦力差があるはずなのに、藤孝らは同等に対抗していた。

「京から出て行け！ 三好いっ！」

藤孝が息を荒くしつつ、何人目の喉を穿った後を狙って、乱戦の最中に矢を放つ。

しかし、それはいとも簡単に槍で弾かれた。

「ち、ダメか。何人かで協力しながら応戦しろ、だがあまり深追いはするな。弓は赤毛を狙え」

「お前がその部隊を率いる将だな、後ろからコソコソと弓を放つとは臆病者め！」

「積極的に攻めなくていい、ただひたすらに時間を稼げ」

部隊をいそいそと動かす颯馬の耳には、藤孝の声は入っていないようだった。

状況を見極めつつ、乱戦の合間を縫って弓部隊に矢を放させる。

矢は主に藤孝を狙ってのものだが、回避または槍によって弾かれる。

「ふん、何度矢を飛ばしたって」

射撃。

「私には」

射撃。

「あたらないつとと……」

集中射撃、集中攻撃。

「……………」

集中射撃、集中攻撃、攻撃攻撃攻撃攻撃攻撃攻撃攻撃攻撃
撃……………！

「しつこいつ！！ お前、よってたかつて狙ってきてそれでも武士
か卑怯者！」

「一対一で勝てない相手には束で掛かって当然だろうが」

そう言葉を発しつつ、矢を藤孝に放つ颯馬。矢は目測を過つたの
か、藤孝の後方の兵に突き刺さった。

キッと颯馬をにらみ、藤孝はいくつもの攻撃を防いで回避する。

「なるほどなるほど、卑怯者の逆賊の三好らしいな」

「逆賊だって？ もともと上様が勝手に逃亡して、晴元に吹き込ま
れて言いがかりをつけて仕掛けてきたくせに」

「將軍家に齒向かい、幕府をいよいよにして私腹を肥やす三好のど
こが逆賊でないと言える」

「私腹など肥やしていない」

「逆賊には何を言っても無駄だな。ここでお前たちはやられて、天
下を治めるべき人は義輝様しかないことを知りなさい！」

「天下の情勢が判断できないとは、やはり上様はよほど目が曇っている見える」

カツと藤孝は目を見開いて、怒りを燃やした。

將軍家を侮辱するとは何事か。とくにその中でも愛するべき義輝様を侮辱したこの男、首を絶対刎ねてやる。

「はあっ！」

槍を奮って三好兵を薙ぎ払い、腰を落して構える。

「御伴衆細川藤孝、義輝様のため、いざ参る！」

名乗りを挙げて颯馬の方へと兵を率いて突っ込んでいった。

防戦の三好、攻勢の將軍方。京の支配を争う戦はこの後、將軍方の優勢で連日続けられる。

三好は追い詰められながらも京を死守し、長慶の援軍を待つこととなる。

幕府掌握（８）

三好と將軍方の合戦は開戦から一週間が過ぎようとしていたが、未だに雌雄を決することができなかった。

最初の四日間は新武器である鉄砲で怯ませて、攻撃を仕掛けていた將軍方が優勢で、一時期は三好を京から追い出す直前までいった。しかし、器用貧乏の康長に智將、謀將の颯馬と久秀による徹底防戦により、將軍方は決定打を出せず攻めあぐ。死者数言えば双方とも同等に損失していた。死者数およそ二千、けれど負傷者数は兵に限りのある三好の方が多く、無傷の者は千にも及ばない。

反対に將軍方も負傷者はいるが、三好ほどではない。やはり、鉄砲が合戦に投入されたというのが大きいだろう。

この状況で行けば、三好を京から追い出すことが可能だ。そう、あくまでもこの状況で合戦を継続できればの話だった。

現実には將軍方の優勢から劣勢に切り替わった。

原因はハッキリとしている。將軍方はあまりにも時間を掛けすぎた。短期決戦で仕掛けた戦のはずが、予想以上の抗戦で時間を掛けに掛け過ぎたのだ。

五日目の昼頃、当主三好長慶が率いる援軍が京に到着した。およそ二万のも大軍であった。

援軍が到着した三好は一気に息を吹き返して、電光石火の如く反撃し始め、將軍方を城へと追いやって包囲陣を敷いた。

鉄砲で以てすれば少しは大軍相手に対抗出来たかもしれないが、不運にも鉄砲の種は尽きていた。

硝石、火薬、弾……これらの種が無ければ鉄砲はただの飾り物。絶大な武器が使用不可になったために、將軍方も近江からの増援を検討したが、義賢がやんわりと反対したために却下された。

理由としては近隣国に憂いがあり、六角が抱えている甲賀衆によれば、犬猿の仲である浅井に怪しい動きが見られるという報告があったためだ。

真偽は定かではないもの、そういう報告があった時点で警戒だけはきちんとしておき、防衛できるだけの余力は残して置かねばならない。

仮に此度の戦に兵を送れば、手薄になった六角領土を侵攻されるということも無きにも非ず。

將軍家を支援する有力大名である六角に手を出すことは、將軍家に反するものである。よって、六角に手は出して来ないだろうという考えはあり得ない。

そのような楽観的考えは戦国の世では、すぐに喰われる。重要なのは考えを巡らせて隙を見せないことだ。

故に、六角義賢は三好の援軍が到着した時点で、好戦的な將軍家に反してどうやって和睦しようかと、ヘヤノスミで考えていた。

「うつつ……連日外に行くのはもう嫌だよう。三好は怖いし、上様は好戦的だし……うつつつつ」

義賢は膝を抱えて、現状にどんよりと気を滅入らせた。

外に出ることも人と交流することもあまり関わらない彼女にとって、連日の出撃は仕事と割り切ることではなんとかこなしたが、それも限界だ。

三好に追い詰められて籠城した今、体面を取るか利を取るかの選択を迫られる。

体面を取るならば將軍家と共に三好に抗戦するが、勝ち目もなく浅井のせいで増援ができない今となつては、六角の兵をいたずらに

死なせるだけ。さらには、六角が消耗した直後に浅井が祟り目につけ込んで侵攻してくる可能性がある。

反対に利を取るならば、將軍家への義は果たしたとして三好と和睦する。しかし、幕府の逆臣とされる勢力と和睦するとなると、隣国から利に擦り寄る家として見られ、六角の名を落とす。また、將軍家が力を取り戻した時に、この時のことを根にもって冷遇することもありえる。

体面か利か……家を左右する選択が義賢を悩ましてやまない。

「――義賢様」

ふすま越しに低い声が流れると、義賢は肩をビクツと震わせて息を潜めた。

おそらくは義輝からの伝達かもしくは戦況報告だろう。

義輝からならば劣勢巻き返しのための軍議、戦況報告ならば三好が包囲から城攻めに切り替えたというようなもの。

選択の答えが出ていない義賢には聞きたい。聞いてしまえば、三好と和睦する道が自動的に潰えてしまう。

決心もできないまま流されて不利なれば心残りができ、戦が終結して本城へ戻った時、快く引きこもれないであろう。

せめて後少しだけ考える時間が欲しい。己で選択して後悔しない時間が欲しい。

「我ら甲賀衆、定頼様より伝達があります」

そう聞くと直ぐに義賢は立ち上がって、ふすまを開けて小姓に紛

した甲賀衆を部屋に入れた。

義賢の父である隠居間際の当主からの伝達となれば、聞かずにはいられない。

何せ、定頼の言う通りに実行すれば間違いはない。昔からそうだった。義賢があることに悩み、選択できないときに、定頼は進む道を示してくれる。

ここところは体制移行のために助言されることはなかった。こうして来たということは、重要度がかなり大きく、義賢では荷が重いと判断されたのだろう。

理由は何にせよ、義賢は安堵する。命令にただ従うことが思考放棄であつたとしても、自分の気が軽くなるなら何でもいい。

「父上は何と……？」

「今日を以て家督を義賢様にお譲りすると。それに伴い、此度の戦いの判断は義賢様が当主として決断せよとのことでございます」

「……え」

予期せぬ伝達に、ホツとしていた義賢の表情を凍りつかせた。

いつものように命令を受け取って、難しいことを考えずに実行すればいいと思っていたゆえに信じがたい言葉を理解できなかった。

家督を譲る、それは義賢が当主となること。当主として決断せよ、それは義賢が責任を持って選択をしなければならぬ。

つまり、父は道を示してくれないということ。

「そんなの……む、無理ですよ……私が当主なんて……。重すぎますよ」

谷底に突き放された義賢は視線を下に沈めて、涙を浮かべて嫌々とした。

先ほど命運を分ける選択に悩み、その答えを求めていただけにあつて、当主なんて無理という思いが強い。

「それでも定頼様が決められたことですので、義賢様は決断し、命を下さなくてはなりません」

「で、でも……」

重々に理解している。定頼がどんな理由で義賢に家督を譲ったのかは不明だが、決定は覆されることはない。

義賢がせねばならないことは、当主として自国を如何にして守るかという判断をすること。

そう考えると心に重圧が掛かり、すぐにでも部屋から人を追い出して一人になりたい。

「……何も義賢様が一人で考えることではございませぬ。家臣と話し合い、そして我ら甲賀衆が収集する情報を基に決断すれば良いかと」

「情報……ほ、本城の意見と現況に影響がありそうな情報をお願いします」

何かに気付き、甲賀衆へと視線を向けて他の意見と情報を聞く。

甲賀衆はそれを待っていたと言わんばかりに、前歯を見せてほくそ笑んだ。

「本城の家臣たちの意見は、抗戦派と和睦派に真つ二つに割れております。ただ、抗戦派には定頼様を筆頭に過去の三好との戦での嫌悪感情から来る者が多数です。反面、和睦派は三好と敵対する利がなく、このまま敵対すれば浅井につけ込まれると主張する者が多数です」

「ううう……いったい、どっちが……」

「それに加え、坂本の……、どこから嗅ぎ付けたのか伊勢貞行殿が訪れております」

迷う義賢に声を極限に潜めた甲賀衆の情報が入ると、狼狽を捨てて長考に入った。

得た情報は戦局を左右するものであり、上手く利用することができれば六角があまり損失が無い状態で、この戦から手を退けるものだった。

しかし、下手に情報を漏らしてしまうと、義輝をさらに焚き付けてしまうようなもの。そうなると六角は泥沼から抜け出せなる。

「伊勢殿は……親三好で非戦派、幕府運営を第一するまの……ですよね?」

「その認識でよろしいかと」

「ここから坂本までの時間は、どれくらい……です」

「半日もあれば十分に」

腕をしきりに擦りながら義賢は和睦への策を練り、完成させた。しかしながら、己の策に自信は無い。おそらくは成功するかもしれないが、義輝が義賢の意図に反して行動するかもしれない。

父君の命を一言一句義輝が従うかどうか、それだけが心配である。義賢は深い息を吐いて決断した。

「ま、まず伊勢殿に秘密裏に和睦の意思を示して協力してください。そしたら、えっと……没した直後に私のところへ……その報告をもとに撤退したいと思い……ます」

「では仰せのままに……失礼」

甲賀衆はそう言うつと足音や物音を立てずに颯爽と飛び出して行った。

しばらくの間、中央に座していた義賢はゆるりと立ち上がってヘヤノスミへ身を寄せる。

狭苦しいこの座り心地に心がホツとする。合戦だとか当主だとか全てのことを一時だけ忘れられる絶対領域。膝に額を乗せて、ボソリと呟く。

「早く終わらないかなあ……」

仕事言えども外に出ることは嫌なことだ。人と交わることが多い合戦となれば尚更だ。

ヘヤノスミにて一人、戦の早期終結を願った。

將軍方の籠城から七日目、戦局は三好が優勢を誇ったまま慈照寺（銀閣寺）周辺に陣を敷き、終始静観としている。

兵数は長慶の援軍にさらに追加して一万、よって援軍は三万となった。

増援をしたのはわけがある。まず一つ目に京を防御した兵の負傷が多く、参戦させても足を引っ張るだけなので退かせ、準備万端な兵を用いることで疲弊した將軍方に圧力を感じさせること。

二つ目に三好の軍事力を隣国に知らしめることだ。

いかなる侵略があろうとも、先発部隊が防御し大軍を派遣できる家であることを宣伝する。これにより一種の牽制として侵攻にくくする。

望まぬ戦といえども、これを機会に自国の利とする。この籠城戦は長引けば長引くほど、將軍家の名は地に沈みこみ、三好家は栄えることができる。

逆臣とされる三好が將軍を追い詰め続ける現況が続けば、反三好派とて力の無い將軍より力のある三好に寝返ることだろう。

現実として少しほど前、幕府に従順な丹波国の波多野家が三好と同盟を結んだように、時代の流れは三好に傾いている。

ただ平穏を求める民はもちろんのこと、反発の多い公家にすら三好を積極的に支持する家が出てきている。

彼らは上に立つ者が將軍でなくてはならないという感覚が薄れている。この戦乱の世の中、平和に暮らさせてくれる者であれば支配者は誰でも良いのだ。

圧政を敷かない支配者となれば、それはもう大歓迎である。支配者が逆臣であったとしても彼らにとっては善政を敷く名君として認められるのだ。

その名君の資格を持つ長慶は、中尾城を包囲する陣が多々ある中

の一番後方に本陣を構えていた。

ジッと、將軍方が籠城する中尾城を眺めて時間を空費する。將軍方は援軍は望めないことが判明している以上、無理に強行することはない。

三好はただ囲んで將軍方の兵糧が尽きるのを待つだけでいい。二ヶ月でも三ヶ月でもだ。

幾内一円に敵勢力のいない三好には補給経路がしっかりしているため、兵糧が尽きるという心配はない。

「長慶様……」

ふと老齡な声に呼び掛けられ、長慶はゆっくりと声の主に視線を落とす。

声の主は康長、その後ろに付き添うように久秀と颯馬がいた。京の防衛の最大の功労者たちだ。

長慶はその功を労い、包囲戦から外して休息を与えたのだから、こうして陣を訪れることは無いはずだ。

「……………三人とも、休息を与えたはず。何故ここへ」

「もちろん、休息は存分に取らせて頂き、このとおり元気になりましてな。長慶様が指揮を執っているというのに我らは安静するというのは居心地が悪いものでして」

つまりは指揮権を与えてくれということだった。

三人が包囲戦に参加してくれれば、想定外の動きに迅速に動くことができるので願ってもないことではあるが……

「……………そう……………？ 颯馬のくまが酷い気が」

颯馬のくまは数日前に会ったときより、ハッキリと浮かんであり、長慶そのことが気になった。

休息を取ったのであれば調子を取り戻すものだが、颯馬は逆で覇気が無い。

長慶と視線がぶつかり、ばつが悪そうに頭を掻いた。

「こやつは単なる寝不足です。昼夜構わず書を読んでおりましてな」
「……………そう。それは良くない、武士なら規則正しい生活を送るべき」

「……………善処します」

颯馬が以前にも同じ返答をすると、康長が呆れたように息を吐いた。この感触では全く改める気持ちが無さそうだ。

前歴を知らない長慶は颯馬の返答を満足そうに頷いた。基本、長慶は人を疑うということを知らないかのように、身内や家臣の言葉に全信頼を寄せている。

家臣が裏切るわけが無いという考えはかなり甘い、それこそが三好家を繁栄させる理由でもあった。

家臣を信頼して支配地域を分け与え、運営を任せる。そうすることできめ細かい内政に統治を実行でき、民の支持を集めている。

「……………久秀はどう」

次に久秀へと長慶は視線を移した。

久秀はいつものように恭しく頭を下げてから微笑する。どこもおかしいなところは無いが、若干雰囲気だけが異なる。

少し不満を募らせているような、悔しんでいるような、ほんの些細な感情の乱れがあった。

康長と颯馬には、なんか雰囲気が違うな程度に感じるが、彼女を傍に置いていた長慶には感情の乱れが強く感じられた。

「そうね、体調は万全だけれども、少し虫の居所が悪いかしら。先の戦のせいで話がまとまるはずだった商談が、商人が一目散に逃げたおかげで決裂したもの。あとは堺の強欲商人が將軍に鉄砲を引き渡したことね。本当なら私が個人で契約した鉄砲が今頃には引き渡されて、長慶様の目に掛かる予定だったわ」

「……………鉄砲？」

「南蛮の武器で、俺の——私の出身の堺が独自生産に成功していると、長慶様に仕える前から密に噂にが流れていましたが、まさかあれほどの威力があるとは驚きでした」

颯馬はそう言いながら、初戦の日から防戦の日々に鉄砲によって一方的な戦局支配を思い出して苦い表情を浮かべ、威力に性能を感じたこと見たことを長慶に告げた。そして、最後に鉄砲の導入を検討すべきとの旨を伝える。

鉄砲は知っている者はそれほど驚くべき音では無かった。しかし、何も知らぬ雑兵にとっては神のごとく畏れを抱く音で、鉄砲が放たれるたびに腰を抜かされて無力化された。

その事実は見過ごすことなく重く受け止めるべきである。例え鉄

砲の価値が高すぎて手が出せないとしても、議論し検討しなければならない。

「……………そう。この戦が終結したら鉄砲の導入を検討する」

コクリと頷いて、長慶は鉄砲の導入を検討することを承知した。その影で颯馬はひっそりと言葉をかける。

「なあ、鉄砲の購入なんていつしたんだ。ずっと京にいたろ。それに鉄砲は会合衆が厳しく取り扱っているから普通無理なんだが」
「あら、簡単な話よ。普通じゃない手で購入したに決まっているじゃない」

深く聞くのが怖くて颯馬は沈黙し、久秀はその流し目で見ながら長慶に聞かれない大きさを短く笑った。

それはとても妖しげな笑いだった。瞳を覗けばすぐにでも吸い込まれてしまいそうなほどに、深淵らしきものを感じさせる。

もちろん、彼女の瞳を覗いていればの話で、長慶と康長の現状についての会話の方に視線を向けている颯馬には分からないことである。

「そういう颯馬は鉄砲をどこで知ったの？」

「さつきも言ったように噂だよ。確信を持ったのは今井のところで働いてる友人に聞いてからだな。友人はいつも誇張して物を語るから話し半分に聞いたせいかな、出てくるまで頭に無かった」

「ふうん、会合衆の一人の下で働く友人ねえ。出世してるの？」
「いいや、まだ見習いだ」

堺の大豪商、会合衆の一人、今井宗久の下で働く友人を脳裏に浮かべる。

周囲からは出世欲の塊やら嘔吐きやらと評される友人だが、どこか憎めないものがあつた。

いつもよく日ノ本を飛び出して交易し、財を築くと言っていた。夢が叶うかどうかは知らぬが、現在ではなく未来に生きている前向きな友人だ。

この陰鬱とした世の中、彼のような明るさが嫌いではない。

「しかし——この籠城、いつまで続くのかな。下手に追い詰めて上様が自害されるのはあまり望ましくない」

「あら、アレが死んでも大した問題は無いんじゃない？ だってアレの弟とか阿波で憤ましくしてる義栄とか、代わりはいるもの。言うことを聞かない將軍よりも従順な將軍の方がやりやすいわ」

心底、どうでも良さそうに久秀が平然と述べた。

義輝の弟は家督争いに担がれぬよう覚慶と名を改めて出家しているため、跡継ぎの対象にならないが官俗させれば問題はない。

そして阿波公方義栄は一応足利家である。一応つけたのは義栄の父は長慶の父、元長や細川晴元に擁立され、堺に政権運営を置いた政権を樹立した。

京にある室町御所ではなく堺に居を構えたことから、俗に堺幕府と称される。

堺幕府は樹立から一年も立たない内に、力を強める元長を恐れた

晴元の変心によって滅ぼされ、將軍は阿波へと逃れて没落し、貧相な日々を送る中で義栄が生まれた。

堺幕府が崩壊した時に晴元が新たに將軍として擁立したのが義輝の父、義晴である。故に阿波公方は現將軍を敵視しており、將軍としての要請があれば喜んで飛びついてくるだろう。

であれば、反発する將軍義輝を降ろすなり殺すなりして除外し、比較的従順、もしくは扱いやすい者を擁立すればトントン拍子で進む。

そう考えはあつて当たり前のことではあるが、口にするの不穩当で憚れるものである。

相手は何と言つても將軍、そのような発言はよろしくないと、康長が久秀の方へ身体を向けて穩健に注意する。

「久秀殿、その発言は些かよろしくありませんぞ」

「意味が分からないわ。私は將軍家ではなく、三好長慶様に仕えてるの。だから実行するかは置いて、三好家が最大限に利を得る方法を述べたに過ぎないわ」

「そうであつてもです」

扇を広げて久秀はこみ上げる嘲笑を見られぬよう、素早く口元を覆った。

不敬であるから禁忌であるからと言つて発言すらも抑制するのは愚かな行為であり、思考放棄に等しい。既存の固定概念の枠に当てはまらず、効率を重視する合理性を持つ、それが松永久秀の思考であつた。

だからこそ、康長のような古臭い形式から脱却しない考えを持つ者は、少しばかりの嫌悪を抱き、嘲りの対象になる。

「……………いい、康長。久秀の考えも一理ある」

「しかしですな」

「……………久秀、発言は構わない。でも、言い方が良くない」

「はい、次より気をつけます」

長慶が理解を示しつつ注意すると、久秀は微笑みながらあっさりと従った。

三好長慶に仕えていると公言するだけであって、忠誠心は確かのようなのである。が、あまりの完全さに康長は言いようもない不安を感じ、それを放棄した。

思考を放棄することを余儀なくされたのだ。

何せ將軍が籠城する中尾城が黒煙と共に炎を上げていたのだから。長慶らは燃え上がる炎をただ黙々と眺める。

嘲笑する者、驚愕する者、事実を分析する者、ただ受け止める者、あまりの変化に追い付けない他陣が騒然と慌てふためく中、各々異なる反応を示した。

「自決……？ いや、撤退か」

あくまで冷静さを振る舞い、颯馬は状況を分析した。

山の木々の合間から何かが蠢いていて、こちらに降りてくる様子もないことから撤退と判断できた。

つまり、京を戦地とした争いに三好は勝利し、將軍方は敗北を意味する、

「……………近江へ侵攻する」

長慶が瞳を閉じて、そう言った。

「追撃ですか？　しかし、これで勝敗は決したはずですが」

「何を言ってるの？　六角は疲弊し、今が領土を広げる好機じゃない」

長慶の出した近江侵攻に颯馬は口を挟むが、久秀の主張に圧された。

確かに、確かに今が好機といえよう。將軍方が撤退したというのは、ここで戦をするのが限界のため逃走したと考えてよい。

疲弊している今こそ攻撃を仕掛ければ、三好はさらなる勝利を得て、運よければ少ない損害で領土を広げることができるかもしれない。

侵攻されたから侵攻し返すという名分もあるため、何の問題もない。

「……………領土拡大の件もある。何より、何より、上様に度々蜂起されても困る。優先事項は上様の保護、出来なければやむを得ず殺害。次に坂本城とその地の占領——」

明朗淡々と長慶は意見に反応せずに作戦目的と優先事項を、中尾城が音を立てて燃えるのも目をくれず、静かに述べた——

「長慶様、伊勢殿がお見えになっております。如何いたしましょうか」

「……………貞孝殿が？」

——時だった。陣の外から聞こえた兵の声に遮られ、その訪問者の名を聞いた長慶は、不思議そうな表情を浮かべて聞き返した。

幕臣の伊勢貞孝が戦場でできることは何もない。それゆえに、わざわざやって来たということは、何か重要な話でもあるのだろう。

「……………ここ——」

「ああっ！ ちょっと伊勢殿！」

「事態は急を要するのでな。すまぬ——長慶殿、突然押し掛けて申し訳ございませぬ。おや、これは皆さんお揃いで」

長慶が判断を待たずして、陣内に入ってきた貞孝は康長たちを目にして、驚いた様子もなく雅に礼をした。

「これは丁寧にどうも。して、伊勢殿何か用でござるかな」

「長慶殿、これを」

「それは？」

貞孝が懷から二通の書状を取り出して長慶に渡す。、何の書状なのか気になった颯馬は貞孝に聞いた。

長慶が黙々と広げて読み始める中、貞孝は堅苦しくに頷いて答える。

「一通は六角家よりの和議の申し入れ、もう一通將軍家よりです」
「単なる和議の申し入れであれば、城に火をつけて撤退する必要なんてないんじゃない？ 大方、和議交渉の場に行けば、長時間の話し合いの末に決裂して態勢を整える腹でしょう」

さらりと長慶が一通目を流し読みした。一通目は六角家よりの和議の申し入れの旨が書かれていた。

貞孝の発言には間違いはない。しかし、久秀の言う通り、城を燃やして撤退のしてる最中に和議を申し入れるのは、交渉が決裂することを前提にしか思えない。

長時間、たかだか長時間の話し合いとはいえ、その間に兵力の補充なども可能だ。

「そうだな、そうでなければ、城を燃やすこともない。城を燃やしたのは、あそこが我らの攻撃拠点にしないためだろうな」

「いえ、本当に和睦を前提にしたでして、二通目を見て頂ければお分かりになります」

「時間の無駄でございますな。失礼だが、伊勢殿……」

「ほ、本当でございます！ 本当に和睦できますから！」

長慶が二通目——將軍家よりの書状を広げ、先ほどとは打って変わってじっくりと目を通す。

時節、あごに手を当てて思考しながら目を瞑り、再び開いて読み

進めて立ち上がった。

兵に強制的に追い出されようとしていた貞孝の動きが止まり、康長らが何かと長慶の方に視線を向けた。

「……………和睦は決定的、三好は話に応じよう」

「それは……………どういうことでございますかな？」

「……………この書状、前將軍の——遺言書。上様が真に武士であるなら従わざる得ない」

場が静観として、他陣の騒音が不自然に浮き立って聞こえる。長慶の言葉に彼らは声を失い、立ち尽くす。

するりと貞孝が兵の拘束から抜け出して乱れた服を整え、悲壮と喜びを混ぜた表情を浮かべる。

「前將軍、義晴様は坂本にて病死なされました」

「……………そう。しかし、義晴様の死によって戦は終結の兆しが見える。久秀」

「は、はい」

「……………和睦交渉を任せる」

「……………！ 長慶様の仰せのままに」

ごうごうと中尾城が燃え盛る。前將軍、義晴が建てた城。それが彼の死去を揶揄するように燃え落ちていく。

実績を持たず、流されゆくままに利用され続けた末には京外で没した哀れな將軍。

けれど此度の戦の最後には些細な輝きを放ち、人生の幕を降ろし

た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6206n/>

戦極姫～幾内の智将物語～

2011年10月16日05時59分発行